

伊 良 原 I

下伊良原中ノ坪遺跡
下伊良原原田ノ谷遺跡
下伊良原寺ノ谷遺跡
上伊良原川上遺跡
上伊良原下ノ段遺跡

福岡県文化財調査報告書 第222集

2009

福岡県教育委員会

伊 良 原 I

下伊良原中ノ坪遺跡
下伊良原原田ノ谷遺跡
下伊良原寺ノ谷遺跡
上伊良原川上遺跡
上伊良原下ノ段遺跡

福岡県文化財調査報告書 第222集



1 下伊良原寺ノ谷遺跡全景



2 下伊良原原田ノ谷遺跡土層

序

福岡県教育委員会では、伊良原ダム建設事業に伴い、京都郡みやこ町犀川上伊良原・同下伊良原に所在する諸遺跡の発掘調査を平成18年度より実施しています。

深い山々に囲まれたこの伊良原の地で、今まで思いも及ばなかった数の遺跡が徐々に見つかりはじめています。縄文時代の遺跡からは、当時の豊かな自然と共生する人々の生活、中世の遺跡からは、今と変わらぬ農村集落の景観、山岳信仰の繁栄、地方豪族の盛衰など、埋もれてしまったさまざまな歴史の断片が偲ばれます。

本書は平成18年度に実施した五遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、地域文化の普及啓発や学術研究の一助となることを願ってやみません。

なお、発掘調査および報告書作成にあたり、ご協力をいただいた方々に厚く感謝いたします。

平成21年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 森山 良一

例　言

- 1 本書は、県営祓川流域総合開発事業（伊良原ダム建設事業）に伴い、平成18年度に福岡県教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本書で報告する遺跡は、下伊良原中ノ坪（しもいらはらなかのつぼ）遺跡・下伊良原原田ノ谷（しもいらはらだのたに）遺跡・下伊良原寺ノ谷（しもいらはらだらのたに）遺跡・上伊良原川上（かみいらはらかわかみ）遺跡・上伊良原下ノ段（かみいらはらしものだん）遺跡の5遺跡である。
- 3 発掘調査および報告書作成は、福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 4 本書に掲載した遺構写真的撮影は調査担当者の吉田東明・下原幸裕が、遺物写真的撮影は北岡伸一が行った。ラジコンヘリによる空中写真撮影は九州航空株式会社に委託し、気球写真による空中写真撮影は（株）空中写真企画に委託した。
- 5 本書に掲載した遺構図の作成は、大里弥生・海出淳平・楠木益子・内野陽子・城戸富士子・渡辺万里子・吉留ますみ・森潤アツ子の協力を得て調査担当者が行った。
- 6 出土遺物の水洗、復元、実測、浄書作業は、調査担当者ならびに九州歴史資料館および福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所で行った。
- 7 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館および福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所において保管する。
- 8 本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「田川」を改変したものである。本書で使用する方位は、国土座標II系による座標北である。
- 9 本書の執筆・編集は吉田東明が行った。

本文目次

Iはじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
II位置と環境	5
1 遺跡の地理的環境	5
2 周辺の歴史的環境	6
III調査の内容	11
1 下伊良原中ノ坪遺跡	11
2 下伊良原原田ノ谷遺跡	41
3 下伊良原寺ノ谷遺跡	61
4 上伊良原川上遺跡	93
5 上伊良原下ノ段遺跡	104
IV自然科学系の分析	107
1 下伊良原原田ノ谷遺跡の自然科学分析	107
2 下伊良原寺ノ谷遺跡のウイグルマッチングによる年代測定	117
3 下伊良原寺ノ谷遺跡出土木柱の樹種同定	121
Vおわりに	126

図 版 目 次

- 巻頭図版 1. 下伊良原寺ノ谷遺跡全景
2. 下伊良原原田ノ谷遺跡土層
- 図版 1 1. 下伊良原中ノ坪遺跡遠景（南上空から）
2. 下伊良原中ノ坪遺跡遠景（東上空から）
- 図版 2 1. 調査区北東端土層（南から）
2. 調査区南東端土層（西から）
3. 6号土坑（南から）
- 図版 3 1. 縄文グリッド（西から）
2. A1Gr北壁（南から）
3. 1号掘立柱建物跡（西から）
- 図版 4 1. 1号掘立柱建物跡P13（南から）
2. 1号掘立柱建物跡P14（南から）
3. 1号掘立柱建物跡P17（南から）
- 図版 5 1. 1号掘立柱建物跡P19（南から）
2. 2号掘立柱建物跡（西から）
3. 1号土坑（北から）
- 図版 6 1. 2号土坑（東から）
2. 3号土坑（南から）
3. 4号土坑（西から）
- 図版 7 1. 5号土坑（南から）
2. 1号溝土層（北から）
3. 古銭出土状態（西から）
- 図版 8 縄文土器①
- 図版 9 縄文土器②
- 図版10 石器、掘立柱建物跡・土坑・ピット出土土器・陶器
- 図版11 包含層出土土器・陶磁器・土製品・石製品・金属製品・古銭
- 図版12 1. 下伊良原原田ノ谷遺跡全景（東上空から）
2. 下伊良原原田ノ谷遺跡全景（西上空から）
- 図版13 1. 調査区南東土層（西から）
2. 縄文グリッド（上空から）
3. E8・E9Gr遺物出土状態（南から）
- 図版14 1. E8Gr遺物出土状態（東から）
2. E7Gr北壁（南から）
3. E7Gr西壁（東から）
- 図版15 1. I4Gr北壁（南から）
2. I4Gr西壁（東から）

3. I5Gr西壁（東から）

図版16 1. 調査区西側中世遺構面（南から）

2. 1号掘立柱建物跡（西から）

3. 1号掘立柱建物跡P6（南から）

図版17 1. 1号柱列（南から）

2. 1号土坑（南から）

3. 2号土坑（南東から）

図版18 繩文土器

図版19 繩文土器、石器、土器、陶磁器、土製品、石製品

図版20 1. 下伊良原寺ノ谷遺跡遠景（西上空から）

2. 下伊良原寺ノ谷遺跡遠景（東上空から）

図版21 1. 下伊良原寺ノ谷遺跡全景（上空から）

2. 下伊良原寺ノ谷遺跡北半部全景（上空から）

図版22 1. 1・2号掘立柱建物跡（北から）

2. 1号掘立柱建物跡P8断面（北から）

3. 1号掘立柱建物跡P5（南から）

図版23 1. 2号掘立柱建物跡P32（東から）

2. 1号礫石建物跡（西から）

3. 1号礫石建物跡（東から）

図版24 1. 6～8号掘立柱建物跡（西から）

2. 6号掘立柱建物跡P6（西から）

3. 2号柱列P58（北から）

図版25 1. 1号土坑（北から）

2. 2号土坑（北から）

3. 3・4号土坑（南から）

図版26 1. 5・6号土坑（西から）

2. 7号土坑（東から）

3. 8号土坑（西から）

図版27 1. 8号溝断面（西から）

2. 9号溝遺物出土状態（北から）

3. 13号溝断面（西から）

図版28 繩文土器、石器、掘立柱建物跡・溝出土土器・陶磁器

図版29 溝・ピット出土土器、染付、石製品、金属製品、古銭

図版30 6～8号掘立柱建物跡・2号柱列柱根

図版31 1. 上伊良原川上・下ノ段遺跡遠景（北上空から）

2. 上伊良原川上・下ノ段遺跡遠景（南上空から）

図版32 1. 上伊良原川上遺跡全景（上空から）

2. 上伊良原川上遺跡繩文グリッド（上空から）

3. 調査区西端土層（東から）
- 図版33 1. 縄文グリッド（東から）
2. 1号堅穴住居跡・3号土坑（北から）
3. 1号堅穴住居跡完掘状態（北から）
- 図版34 1. 1号土坑（東から）
2. 2号土坑（東から）
3. 5号土坑（北から）
- 図版35 上伊良原川上遺跡出土遺物
- 図版36 1. 上伊良原下ノ段遺跡全景（南から）
2. 調査区西端土層（東から）
3. 上伊良原下ノ段遺跡出土遺物

挿 図 目 次

第1図	みやこ町の位置	5
第2図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	7
第3図	調査区位置図①(1/5,000)	9
第4図	調査区位置図②(1/5,000)	10
第5図	下伊良原中ノ坪遺跡遺構配置図(1/300)	12
第6図	下伊良原中ノ坪遺跡基本土層図(1/60)	13
第7図	6号土坑実測図(1/40)	14
第8図	6号土坑出土縄文土器実測図(1/3)	15
第9図	グリッド実測図(1/100)	16
第10図	グリッド出土縄文土器実測図①(1/3)	17
第11図	グリッド出土縄文土器実測図②(1/3)	18
第12図	グリッド出土縄文土器実測図③(1/3)	19
第13図	グリッド出土縄文土器実測図④(1/3)	20
第14図	ビット出土縄文土器実測図(1/3)	21
第15図	その他出土縄文土器実測図(1/3)	22
第16図	石器実測図(2/3、1/2、1/4)	23
第17図	1号掘立柱建物跡実測図(1/60)	24
第18図	掘立柱建物跡出土土器実測図(1/3)	26
第19図	2号掘立柱建物跡実測図(1/60)	27
第20図	1・3～5号土坑実測図(1/30)	28
第21図	土坑出土土器・陶器実測図(1/4、1/3)	29
第22図	2号土坑実測図(1/40)	30
第23図	1～5号溝断面実測図(1/30)	31
第24図	溝出土土器・陶器実測図(1/3)	32
第25図	ビット出土土器実測図①(1/3)	33

第26図	ピット出土土器実測図② (1/3)	34
第27図	包含層出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	36
第28図	土製品・金属製品実測図 (1/4、1/2)	37
第29図	古錢実測図 (1/2)	38
第30図	下伊良原原田ノ谷遺跡遺構配置図 (1/400)	40
第31図	下伊良原原田ノ谷遺跡基本土層図 (1/60)	42
第32図	グリッド実測図① (1/100)	44
第33図	グリッド実測図② (1/100)	45
第34図	グリッド実測図③ (1/150)	46
第35図	グリッド実測図④ (1/150)	47
第36図	グリッド出土繩文土器実測図① (1/3)	49
第37図	グリッド出土繩文土器実測図② (1/3)	50
第38図	グリッド出土繩文土器実測図③ (1/3)	51
第39図	試掘・表土掘削時出土繩文土器実測図 (1/3)	53
第40図	石器実測図① (2/3、1/2)	54
第41図	石器実測図② (1/2)	55
第42図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	56
第43図	1号柱列実測図 (1/60)	57
第44図	1・2号土坑実測図 (1/30)	58
第45図	土器・陶磁器実測図 (1/3)	58
第46図	土製品・石製品実測図 (1/2)	59
第47図	下伊良原寺ノ谷遺跡遺構配置図 (1/200)	62
第48図	下伊良原寺ノ谷遺跡基本土層図 (1/40)	63
第49図	グリッド実測図 (1/100)	63
第50図	繩文土器実測図 (1/3)	64
第51図	石器実測図 (2/3)	64
第52図	1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	66
第53図	掘立柱建物跡・柱列出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	67
第54図	3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	68
第55図	4・5号掘立柱建物跡・1号礎石建物跡実測図 (1/60)	69
第56図	6～8号掘立柱建物跡・2号柱列実測図 (1/80)	71
第57図	1号柱列実測図 (1/60)	72
第58図	3・4号柱列実測図 (1/60)	73
第59図	1～4号土坑実測図 (1/40)	75
第60図	5～8号土坑実測図 (1/40)	76
第61図	土坑出土陶器実測図 (1/3)	77
第62図	1～14号溝断面実測図 (1/30)	79
第63図	3～6号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	81

第64図	8号溝出土土器・陶磁器実測図(1/4、1/3)	82
第65図	9・13号溝出土土器・陶磁器実測図(1/3)	84
第66図	ピット出土土器・陶磁器実測図(1/3)	85
第67図	包含層等出土土器・陶磁器実測図(1/3)	87
第68図	土製品・石製品・金属製品実測図(1/4、1/2)	88
第69図	柱根実測図(1/6)	90
第70図	上伊良原川上遺跡基本土層図(1/60)	93
第71図	上伊良原川上遺跡遺構配置図(1/300)	94
第72図	1号整穴住居跡・炉跡実測図(1/60、1/30)	95
第73図	1号整穴住居跡出土繩文土器実測図(1/3)	95
第74図	1～3・5号土坑実測図(1/60、1/30)	96
第75図	1号溝断面土層図(1/30)	98
第76図	グリッド実測図①(1/100)	99
第77図	グリッド実測図②(1/100)	100
第78図	グリッド出土繩文土器実測図①(1/3)	101
第79図	グリッド出土繩文土器実測図②(1/3)	102
第80図	ピット出土繩文土器実測図(1/3)	102
第81図	石器実測図(2/3)	103
第82図	上伊良原下ノ段遺跡遺構配置図(1/300)	104
第83図	上伊良原下ノ段遺跡基本土層図(1/30)	105
第84図	落ち込み土層図(1/30)	105
第85図	出土遺物実測図(2/3、1/3)	106
第86図	火山灰ガラスの形態ごとの頗度分布	109
第87図	火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率	109
第88図	下伊良原原田ノ谷遺跡、E8Gr北壁における植物珪酸体分析結果	115
第89図	ウイグルマッチング結果	120

表 目 次

第1表	下伊良原原田ノ谷遺跡の火山灰u分析結果	109
第2表	下伊良原原田ノ谷遺跡における植物珪酸体分析結果	115
第3表	測定試料及び処理	119
第4表	放射性炭素年代測定、曆年較正、ウイグルマッチングの結果	119
第5表	下伊良原寺ノ谷遺跡出土柱材の樹種同定結果	123

I はじめに

1 調査に至る経緯

伊良原ダムは、福岡県と大分県の県境にある鷹ノ巣山を源流として、みやこ町、行橋市を流れ、豊前海へと注ぐ、二級河川蔽川の上流、福岡県京都郡みやこ町原川下伊良原に建設予定の重力式コンクリートダムである。洪水の調節、水道用水の開発、既得取水の安定化及び河川環境の保全のための流量の確保を目的として計画された。集水面積36.8km²、湛水面積1.22ha、総貯水量2,870万m³を有する多目的ダムである。

建設の計画は古く、昭和16年（1961）年にはすでに予備調査に着手され、昭和49年度には実施計画調査も採択されたが、建設事業が採択され、田川



伊良原ダム堤体予定地

地区・京築地区水道企画団と基本協定が締結されたのは平成2（1989）年度になってからである。文化財に関する協議は平成6年度、地元地権者5団体と建設に関する基本協定書の締結を得て開始された。福岡県土木部（現国土整備部）河川開発課、福岡県行橋土木事務所伊良原ダム建設出張所（現伊良原ダム事務所）、福岡県教育庁指導第二部文化課（現総務部文化財保護課）、同京築教育事務所等の協議の中で、埋蔵文化財調査については用地買収が終了し、民家が移転した後に本格的に開始すること、移転地については用地買収後に先行して実施すること、民俗文化財についてはその性格上、移転前に実施する必要があること等が合意され、福岡県教育委員会では平成7年度から10年度の4カ年に亘って民俗文化財の調査を実施、平成11年3月に調査報告書が刊行された。

ダム建設事業の関連として最初に埋蔵文化財調査のメスが入ったのは、平成10（1998）年9月のことである。岩屋河内地区代替地への工事用道路建設予定地として、下伊良原西ノ塚地区に試掘調査が行われ、下伊良原原田ノ谷遺跡（試掘調査当時は西の塚平原遺跡）の所在が明らかになった。以降、平成13・17年度の小規模な試掘調査を経て、関連建設事業が本格化する平成18年度を迎える。平成18年6月には下伊良原西ノ塚地区的試掘調査を本格的に実施し、新たに下伊良原中ノ坪遺跡、下伊良原原田遺跡第1地点、同第2地点の3つの遺跡を確認し、工事着工前に本調査が必要である旨ダム事務所に通知した。そしてその後の協議の結果、同年7月より下伊良原中ノ坪遺跡の発掘調査を実施することとなった。

2 調査の経過

下伊良原中ノ坪遺跡は、7月18日より重機による表土掘削を開始、同月27日に作業員を投入して人による作業を開始した。工事の計画上、急を要する東半部を先行して明け渡す必要があったため、遺構検出作業は遺跡の北東隅から始め、南側へ向かって順次進行し、東半部の調査を完全に終了してから西半部を開始することとした。

調査を進める中で、調査区東半部の中央付近に堆積する黄褐色土層中に突帯文土器が含まれるこ

とが判明したため、中世遺跡の調査終了後に再度縄文時代遺跡の調査を行う必要が生じたが、工期の都合上期間の延期は望めなかったため、当初の予定通りの期間内に調査を終了せざるをえないという厳しい状況での発掘調査となつた。

8月末には次の調査予定地である下伊良原田ノ谷遺跡の樹木伐採が終了した旨、ダム事務所から連絡を受け、9月からは中ノ坪遺跡の発掘調査と並行して下伊良原田ノ谷遺跡の表土掘削を行ふ事となつた。

9月7日からは突帯文土器包含層の掘削を開

始、9月19日には調査区東半部の調査を終了し、その旨をダム事務所へ伝達、翌20日には東半部の工事が着工され、その工事を横目に見ながら、残る西半部の発掘調査を進めていった。

9月25日から26日には、地元伊良原中学校の生徒1名、27日には犀川中学校の生徒30名を受け容れて体験発掘を行い、学校教育との連携を図った。

10月3日には全ての遺構を完掘し図面等も終了、4日に空中写真撮影を行い、器材を次の調査地である下伊良原田ノ谷遺跡へと移し、下伊良原中ノ坪遺跡の調査を終了した。

下伊良原田ノ谷遺跡では調査の進行にあたり、試掘調査で確認していたように中世と縄文時代の二つの時期が異なる遺構が想定されたため、まず中世の遺構の調査を終了し、そのうちに縄文時代包含層のグリッド掘削を行うこととした。また周辺に廃土置き場が確保できなかつたため、やむを得ず調査区内で反転処理することとなり、西半部の調査終了後に再度重機を入れ、廃土の反転を行うこととした。

調査は扇状地の頂部にあたる北端部から開始した。この付近は中世の遺物包含層が認められた

ものの、予想以上に谷の傾斜が深く、また出土遺物も僅少だったため、人力による全面掘削を中止しサブトレーンチ掘削による断面土層観察へと切り替えた。

その後、調査区東側の平坦面へと調査を進めていくにつれ、中世の遺構とともに縄文土器や石器の出土が見られるようになり、調査区内の3ヶ所に見られる黄褐色土から縄文時代の遺物が出土することも判ったため、その3ヶ所に4mメッシュのグリッドを設定し、中世遺構の調査終了後直ちに縄文時代包含層の掘削へと移行した。

10月6日には同じ伊良原ダム建設事業で、上伊良原地区代替地（C代替地）の沈砂地建設予定地である上伊良原中村地区で試掘調査を行い、新たに上伊良原川上遺跡と、上伊良原下ノ段遺跡の二つが確認された。この二つの遺跡もまた今年度中に工事完了を予定していたので、ダム事務所と協議の末、原田ノ谷遺跡の調査終了後直ちに上伊良原川上遺跡の発掘調査を行うこととなつたため、



発掘調査の様子



犀川中学校体験発掘

原田ノ谷遺跡の本調査と並行して11月8日より川上遺跡の表土掘削を開始した。

原田ノ谷遺跡では予想以上に中世の遺構が少なく、作業は順調に進んだ。11月6日からは中世の調査が終了した所から順次グリッドの設定を行い、縄文時代の包含層掘削に取りかかった。場所によってはかなり深かったため、完掘まで手間がかかったが、11月30日に空中写真的撮影を行い、12月5日には原田ノ谷遺跡西半部の調査を終了し、発掘器材を次の上伊良原川上遺跡へと移動、翌6日から川上遺跡の発掘調査を開始した。

上伊良原川上遺跡では、犀川町役場伊良原所の協力をいただき、作業員休憩所と駐車場の提供を受け、スムーズに調査を進める事が出来た。調査は南端部から北へと向かって進めていった。試掘調査では中世の遺跡しか確認できていなかったが、やはりここでも北端部で縄文時代の包含層が確認されたため、中世の調査終了後にグリッド調査を実施した。なお、12月11日からは川上遺跡の発掘調査と並行して下伊良原原田ノ谷遺跡の廃土反転と表土掘削作業を開始し、更に1月12日には原田ノ谷遺跡に近接する沈砂地建設予定地の試掘調査を並行してを行い、新たに下伊良原寺ノ谷遺跡を確認した。この沈砂地遺跡も当年度中に工事を着工する必要があるということであり、原田ノ谷遺跡の調査終了後、2月末までに寺ノ谷遺跡の発掘調査を終了することでダム事務所と協議が整った。また同時に隣接する上伊良原地区代替地（C代替地）の試掘調査を実施し、上伊良原櫻遺跡（平成19年度調査）を新たに確認した。

上伊良原川上遺跡は遺構密度が薄く、縄文時代包含層も堆積が浅かったため、12月27日には空中写真的撮影を実施し、翌28日には調査を終了、発掘器材を再び原田ノ谷遺跡へと移動して年末年始を迎えた。

平成19年は1月9日から作業を開始した。原田ノ谷遺跡東半部の発掘調査を進めながら、同日からやはり伊良原ダム建設事業である上高屋地区の国道496号迂回道路建設予定地の試掘調査を実施し、新たに上高屋台ノ原遺跡（平成19年度調査）を確認した。

原田ノ谷遺跡西半部は幸い遺構密度が非常に希薄であったため、掘削作業は1月23日には終了し、実測要員を残して作業員を次の下伊良原寺ノ谷遺跡に移動し、遺構確認作業に入った。また同じこの日から、上伊良原川上遺跡に隣接し、やはり沈砂地予定地の上伊良原下ノ段遺跡の表土掘削も開始した。

原田ノ谷遺跡は26日に全ての実測作業を終え、全体写真的撮影を行い調査が終了した。同時に遺構確認作業を行っていた寺ノ谷遺跡では、多数の柱穴が並び、また複雑に重複しており、一般的な山間の集落遺跡ではないことが次第に判り始めた。予想以上の遺構密度に、調査期間を延長したいところであったが、工期がそれを許さず、当初の予定通り限られた期間内に調査を終了せざるを得なかった。加えて2月13日からは上伊良原下ノ段遺跡の調査を並行して行うこととなり、調査は一層困難を極めた。

上伊良原下ノ段遺跡は幸いにして顕著な遺構が見つかなかったため、19日に調査を終了し、翌日からは寺ノ谷遺跡に集中して調査にあたった。2月は雪や雨が降り必ずしも天候に恵まれた訳ではなかったが、休憩時間や休日も作業を行い、また作業員の尽力もあって、23日には全景の空中写真的撮影を実施、その後柱穴の完掘やセクションベルトの掘削等を行なながら実測作業を続け、26日からは縄文時代包含層のグリッド掘削、2月最終日の28日によくやく全ての調査を無事終了し、器材を撤収することができた。

平成18年度は、7月に本調査を開始して以来、常に次の調査地の表土掘削や周辺工事予定地の試掘調査と並行して発掘調査を実施し、著しい時には三遺跡並行して調査を進めるという過酷な状況であった。予定期間内に無事五遺跡全ての発掘調査を終了出来たのは、住民の方々の御協力と、発掘作業に参加いただいた作業員の方々の一方ならぬ御尽力の賜であり、この場を借りて厚く感謝申し上げる。

3 調査・整理関係者

平成18年度の発掘調査関係者および平成20年度の整理作業関係者は以下のとおりである。

福岡県教育委員会

	平成18年度	平成20年度
総括		
教育長	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 主輔	横崎 洋二郎
総務部長	大島 和寛	荒巻 俊彦
文化財保護課長（本副理事）	磯村 幸男	磯村 幸男
副課長	佐々木隆彦	池邊 元明
参考	新原 正典	新原 正典
参考（兼課長技術補佐）	池邊 元明	小池 史哲
	小池 史哲	
課長補佐	安川 正郷	前原 復史
庶務		
管理係長	井手 優二	富永 育夫
管理係	淵上 大輔	小宮 辰之
調査・整理		
調査第一係長	小田 和利	小田 和利
調査第一係	吉田 東明（調査）	
	下原 幸裕（調査）	
大規模遺跡対策・災害復旧班		吉田東明（整理・報告書作成）
調査補助員	大里 弥生	
	海出 淳平	

なお、発掘調査および整理作業にあたり、御理解・御協力いただいた関係各位に厚く感謝申し上げます。

II 位置と環境

1 遺跡の地理的環境（第1図）

今回報告する五つの遺跡が所在するみやこ町は、福岡県の北東部に位置し、総面積151.28km²、北は北九州市小倉南区、東は行橋市・築上町、南は大分県中津市、西は田川郡添田町・赤村・香春町と接する。平成18年（2006）3月20日、京都都勝山町・豊津町・尻川町の三町が合併して新たに発足した町である。

伊良原（IRAHARA）地区は、みやこ町の南部、旧尻川町にあり、英彦山系の分水嶺を境にして大分県と接する山間地である。鷹巣山麓に端を発し、北流して豊前海へと注ぐ、二級河川祓川の上流域にあたり、南側から順に軋柱、扇谷、上伊良原、下伊良原という四つの集落がある。以前はこの四つの集落をもって伊良原村が形成されていたが、昭和31年（1956）に隣接する城井村とともに尻川町に合併した。面積は3746km²で、そのうち90%以上が山林である。標高は南部の最高所で800m、北部の下伊良原付近で150m前後である。年平均気温は上伊良原地区14度、下伊良原地区15度で県下有数の寒冷地域であり、日照時間も少なく雨も多い山地型気候区に区分される。産業はやはり地形の特質を活かした農林業が盛んで、農業では棚田による稲作の他、近年では椎茸や茶、ミョウガ、ホオズキなども作られる。

地質を見てみると、ダム湛水域は古生代の三郡変成岩類に中生代白亜紀時代に大規模に貫入した酸性深成岩の花崗岩類が広く分布している地域であり、また一部には小規模な中性岩である閃綠岩の貫入も認められる。標高300m以上の高所では新生代・第三紀に噴出した英彦山火山岩類が花崗岩類を覆つて広く分布する。祓川の両側には、新生代・第四紀に属する主に亜円礫、砂よりなる段丘堆積物が標高200m付近に所々小規模に堆積する。祓川に合流する支流及び祓川の山裾部には、主に花崗岩類の各礫よりなる崖錐堆積物が段丘堆積物、河床堆積物を覆つて発達している。

市街地から離れた深緑豊かな伊良原では、動植物相にも希少種が見られる。伊良原の樹木相は本来はシイ・カシ類やクスノキ・ツバキ科等の常緑広葉樹が優先する照葉樹林帯であるはずだが、現在では植樹によるスギ、ヒノキが卓越する。その他やはり二次林であるコナラ類を主とする落葉広葉樹林、河川沿いの岩角地にはアラカシ群落やタブ群落、丘陵地や尾根の緩斜面ではシイ群落等の常緑広葉樹二次林が分布する。草木類の中には絶



第1図 みやこ町の位置



伊良原の樹林

滅危惧Ⅱ類のエビネやナツエビネの生育が確認される他、ミズマツバやホシクサ、セッコクなどの貴重種も見られる。

魚類ではカワムツが優占種として見られる他、放流が行われているウナギ・アマゴ・アユ・オイカワ・コイ・ギンブナをはじめ、ムギツク・カマツカ・ドンコなど河川の上・中流域に生息するもの、稀少種のオヤニラミなども生息する。他所では既に失われてしまった自然の河川形態がよく保存された地域である。鳥類には河川でサギ類が多く、他に希少種であるヤマセミ・カワセミも確認

されている。陸域の貴重種ではハイタカやサシバなどが見られる。哺乳類ではニホンイノシシ、キュウシュウジカが近年特に増加傾向にあり、その他にもコウベモグラ、キュウシュウノウサギ、ホンドアカネズミ、ホンドタヌキなどが確認されており、一般的な北部九州低山地の哺乳類相が見て取れる。昆虫類ではオオムラサキ、ゲンジボタル、クロセセリなどの貴重種が確認されている。



オヤニラミ

2 周辺の歴史的環境（第2図）

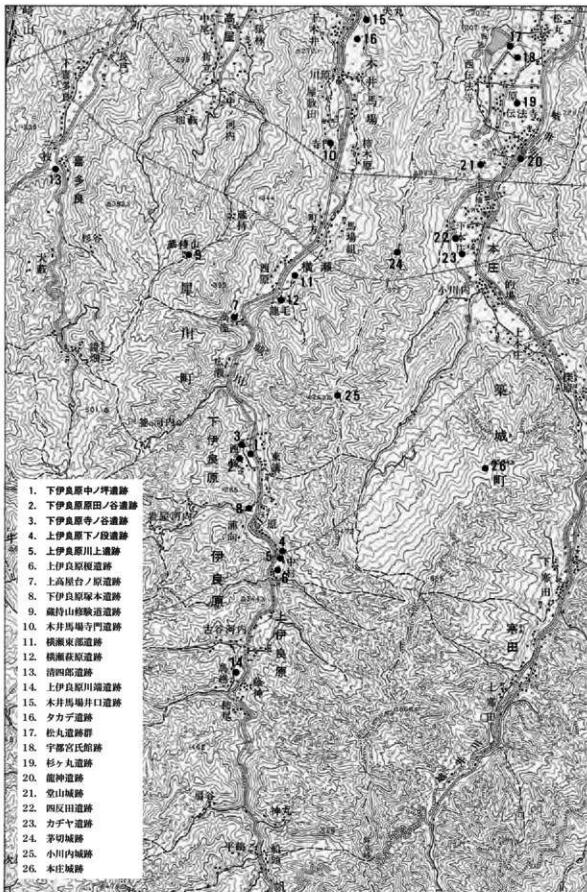
伊良原一帯は平地の少ない山間部であり、これまでに見つかっている遺跡も大半が縄文時代と中世のものである。縄文時代は食料の獲得を狩猟採集に依っていたためあり、中世は可耕地を求めて人々が山間部に進出したため、或いは天台系山岳宗教の靈山として知られる蔵持山の存在と、その影響下にあった所謂宿坊集落の成立によるものと思われる。



上伊良原川端遺跡

縄文時代では、上伊良原にある上伊良原川端遺跡が知られる。農業基盤整備事業に伴い平成9年度に発掘調査が行われ、縄文後期初頭の堅穴住居跡2棟と、良好な一括出土遺物が見つかった。伊良原からやや下流にある横瀬東部遺跡は、やはり農業基盤整備事業に伴って平成7年度に発掘調査が行われ、包含層中から前期轟B式土器がまとまって見つかった。更に下流の木井馬場地区では、農業基盤整備事業に伴い平成4年度に発掘調査が行われた木井馬場寺門遺跡で、早期・後期・晩期の遺物が比較的まとまって出土している。また、谷を一つ隔てた城井川上流左岸にある築上町松丸遺跡群では、後期の堅穴住居跡や土坑が豊富な遺物とともに見つかった。

伊良原地区では弥生時代から古代の遺跡は基本的に存在しない。この頃の遺跡が見られるのは木井馬場地区より北側の、やはり広い平坦面と可耕地が確保できるところである。木井馬場寺門遺跡で弥生時代中期・国道496号の改良事業に伴い平成12年度に調査が行われた木井馬場井口遺跡で弥生前中期の集落跡、圓場整備事業に伴い平成2年に調査されたタカデ遺跡で前期～後期の集落跡と墓群が見ついている。タカデ遺跡では古墳時代後期の集落跡も併せて見つかった。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

古代の遺跡として特筆すべきは、蔵持山修験道遺跡である。蔵持山は伊良原の北西にある標高478mの山である。その初現は明らかではないが、採集遺物に10世紀代のものが見られることから、遙くともこの頃には山岳信仰の場として成立していたようである。また平成16・17年度に林道建設事業に伴い蔵持山修験道遺跡の発掘調査が行われ、成果の大半は中世以降のものであったが、11・12世紀頃の巨岩祭祀跡も見つかっている。中世以降は彦山の勢力範囲に組み込まれ、彦山領の東北城を守護する彦山六峰の一つとして繁栄し、盛時には九十六の坊数を数えたという。山内に残された坊跡や窟群、石塔類は大半が中世期のものであり、発掘調査でも中世の坊跡や集石墓が見つかっている。また現在蔵持山神社の所有品に、宝治元年（1247）の紀年銘がある金堂十一面觀音懸仮がある。

中世の京築地域一帯を支配下に置いた宇都宮氏（城井氏）は14世紀前半まで本拠地を木井馬場の神楽城に置いており、蔵持山と宇都宮氏との関係も浅からぬものがあったようである。伊良原には今でも中世石塔群が各所に残っており、また伊良原ダム開通の発掘調査でも中世の遺構が多く見つかっている。蔵持山から彦山へと向かうルート上に位置する伊良原地区でのこうした中世遺跡の成立・繁栄には、この三者の密接な関連があったように思われる。

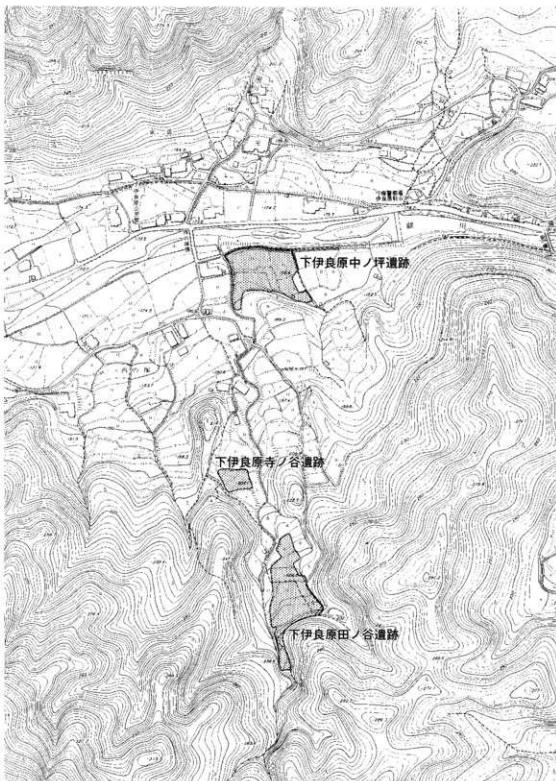
なお、宇都宮氏の本拠地として知られる木井馬場地区では、市屋敷遺跡や下木井遺跡など、宇都宮氏に関連する重要な遺跡の発掘調査例がある。また本拠地を移転した篠上町本庄では、本庄立屋敷遺跡で14世紀前半の建物跡が見つかっており、更に同町松丸にある宇都宮氏館跡は保存を目的とした範囲内容確認調査が平成11～15年度に町教育委員会の手によって行われた。このように、これまで文献史料でしか見えなかった伊良原とその周辺の歴史的環境は、近年の発掘調査によって次第に明らかになりつつある。

参考文献

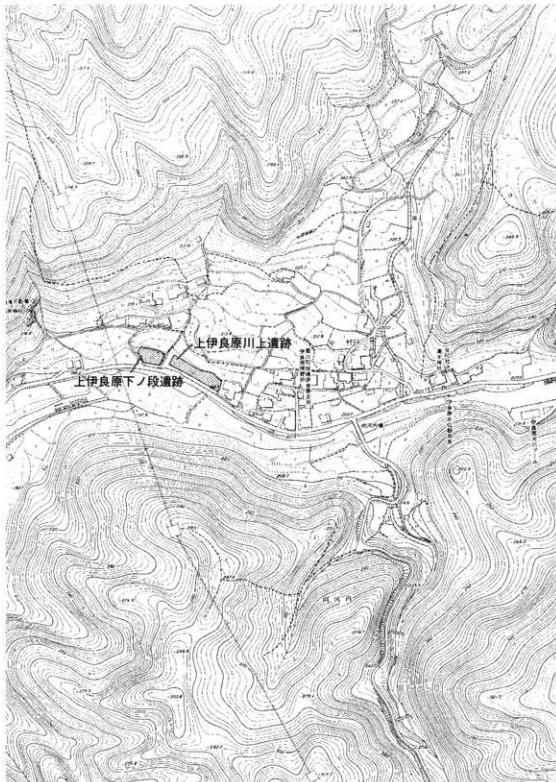
- 福岡県教育委員会 1999 「伊良原－民俗文化財の調査－」福岡県文化財調査報告書第143集
福岡県教育委員会 2003 「木井馬場井口遺跡・味噌ヶ谷古道跡」福岡県文化財調査報告書第183集
犀川町教育委員会 1992 「城井遺跡群」犀川町文化財調査報告書第3集
犀川町誌編纂委員会 1994 「犀川町誌」
みやこ町教育委員会 2007 「みやこ町内遺跡群」みやこ町文化財調査報告書第2集
菱城町教育委員会 1992 「城井谷I」菱城町文化財調査報告書第2集
菱城町教育委員会 2005 「宇都宮氏城館跡」菱城町文化財調査報告書第11集



蔵持山修験道遺跡



第3図 調査区位置図① (1/5,000)



第4図 調査区位置図② (1/5,000)

III 調査の内容

1 下伊良原中ノ坪遺跡

1) 調査の概要 (図版1、第3・5図)

下伊良原中ノ坪遺跡は、京都郡みやこ町大字下伊良原字中ノ坪1176-1に所在する遺跡である。蔽川左岸の低位段丘上に位置し、標高は約176m、蔽川水面との比高差は約3m。山間地の伊良原において、比較的広い平坦面を有するこの付近一帯は、蔽川に注ぐ小河川によって形成された小扇状地形であり、一般的に西の塚地区と呼ばれる。棚田の中に民家が点在する景観は中世の集落風景とほとんど変わらない。調査対象面積は3,361m²、調査面積は約3,300m²、調査前の地目は水田。調査期間は7月18日～10月4日。

平成18年6月、伊良原ダム建設に伴う住宅代替地（B代替地）への工事用道路建設に先立ち試掘調査を実施した結果、中世の遺構と遺物が確認されたため、翌7月より本調査を実施することとなった。調査面積は約3,000m²。

遺構面の標高は、北東端で176.5m、北西端で179.0m、南東端で175.5m、南西端で177.0mを測り、西から東へ向けて緩やかに傾斜する。遺構は主に遺跡の東半部に集中し、特に北西端では遺構は全く見られない。中世の遺構は広域に広がるが、調査中にその存在が判明した突帯文期の遺構・遺物は、東半部中央付近の黄褐色土にのみ認められる。また詳細は後述するが、遺跡中央部から見つかった6号土坑にのみ、縄文時代前期・後期の土器が出土した。

検出した主要遺構は、縄文時代の土坑1基、中世の掘立柱建物跡2棟、土坑5基、溝5条である。突帯文期の包含層は4mメッシュでグリッド掘削調査を実施した。

2) 基本層序 (図版2、第6図)

調査区北東端では、表土、床土の下に粘性を帯びた灰褐色土層（3・4）が見られる。この層には中世の遺物が含まれる。因みに伊良原地区では同質の層が他のどの遺跡でも確認されており、普遍的に見られる堆積層である。その下層の黄灰色粗砂層（5・6）は無遺物層であり、この層の上面が中世の遺構面となる。中世の遺構覆土も灰褐色土が基本となる。調査区南東端でも多少色や質に差があるものの、基本的に同様な堆積状況が見られる。

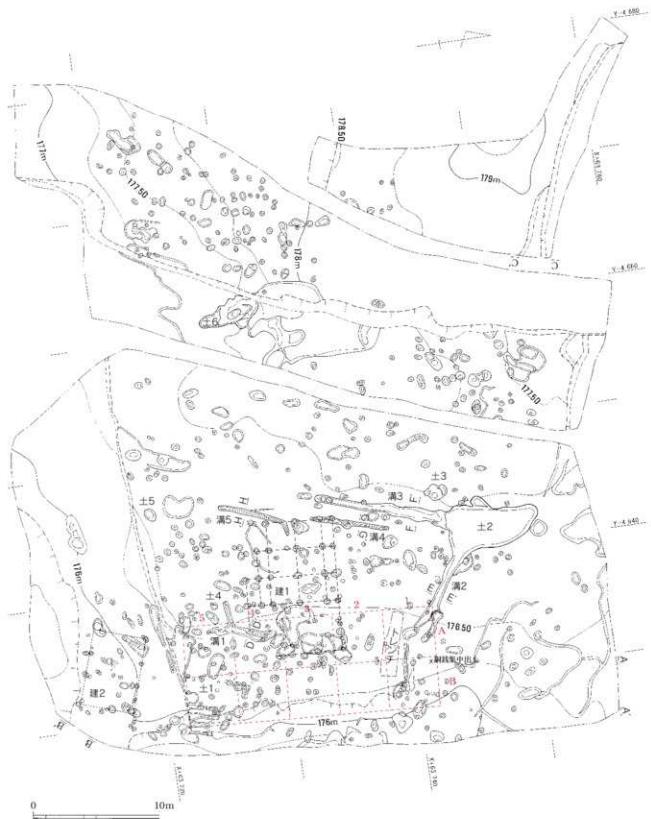
また第9図の土層に見られるように、東半部の中央付近には、アカホヤに由来する肌理の細かい暗黃灰色土の堆積が見られるが、突帯文期の遺物はこの層にのみ含まれる。中世の遺構面上でこの黄褐色土の覆土からなるビットが確認され、中世のビットとは明確に区別できたため、これらについては別時期のものと判断し、区別して掘削を行った。

調査区北西端は恐らく小河川の氾濫によるものであろうが、砂礫を多量に含んだ不安定な層の堆積が見られ、この付近では遺構は確認されていない。これは調査区中央付近や南西端の遺構が認められなかつた付近でも同様である。

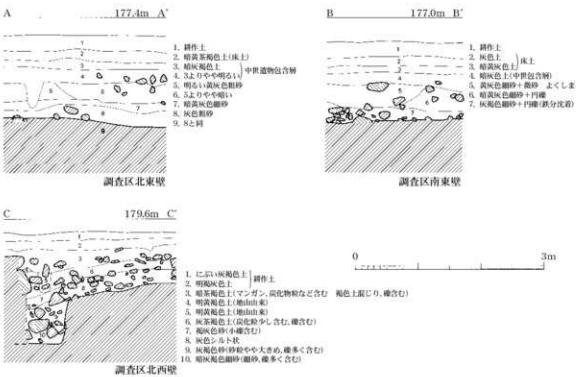
3) 縄文時代の遺構と遺物

6号土坑 (図版2、第7図)

調査区中央で検出した土坑である。長軸5.0m、短軸2.6mを測り、南北に長い楕円形となる。



第5図 下伊良原中ノ坪遺跡遺構配置図 (1/300)



第6図 下伊良原中ノ坪遺跡基本上層図(1/60)

深さは0.6mを測り、最深部に向かって掘り鉢状に深くなる。覆土は黒褐色砂質土や灰褐色砂質土からなる。土坑中央の底部から15cmほど浮いた場所で、完形の条痕文土器が口縁部を上にした状態で出土した。また土坑の上層からは3点の轟B式土器が出土した。

出土遺物 (図版8、第8図)

1～3は轟B式土器である。接合しないが恐らく同一個体であろう。内外面とも強い貝殻条痕調整を行い、2では6条の隆起帯を貼り付ける。胎土に砂粒をあまり含まず暗褐色に焼成される。3には焼成後の穿孔が見られる。

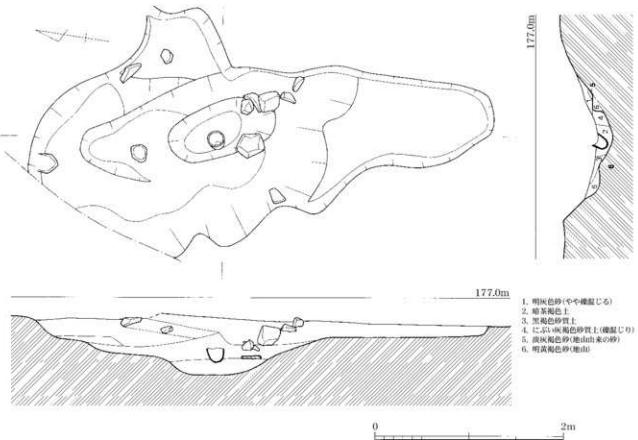
4は完形の条痕文土器である。底部は平底で胴部はあまり開かず、口縁部は緩く外反する。口縁端部は面をなす。不明瞭ではあるが、口縁部は波状口縁となる。器壁は全面粗豪な貝殻条痕調整を行い、一部口縁端部にも及んでいる。全体的に器壁が厚く、1cmに及ぶ所もある。胎土に雲母を若干含み、暗灰色～暗黃灰色に焼成される。

縄文時代包含層調査

A1Gr～B5Gr (図版3、第9図)

調査区東側にある純時代遺物包含層である。中世遺構検出時に、この一帯に堆積する黄灰色土層中から突帯文土器が出土することが判明したので、中世遺構調査終了後にあらためて調査を行った。

調査に際して、まず部分的に残る黄灰色土層の掘削を行い、その下層の暗黃灰色土層上面で遺構確認作業を行った (図中の黒線)。その後、4mグリッドで暗黃灰色土層の掘削を行い、下層にあ



第7図 6号土坑実測図 (1/40)

る黄灰色細紗・微砂層上面で再度遺構確認作業を行った(図中の赤線)。

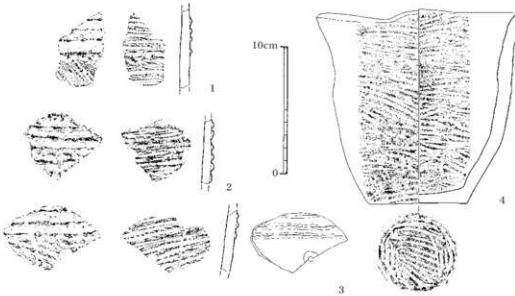
土層図を見てみると、暗黃灰色土層が見られるのはA1Gr～B2Gr間に限られ、遺物もやはりこの付近から集中して出土している。この付近には他に黒灰色土層や黒色土層が堆積しており、この層中からも突帯文期の遺物が出土した。他の所は既に黄灰色細紗・微砂層が露出しており、表面を掘削した結果、無遺物層であることを確認したので、それ以上掘削していない。検出した遺構はピットのみである。

出土遺物

縄文土器 (図版8・9、第10～13図)

1・2は丹塗を行う窓である。1は肩部片。外面は不明瞭だが内面にはヘラミガキが認められる。B2Gr暗黃灰色土層出土。2は胴下半部片であろう。内面はナデ、外面はヘラミガキが認められる。H1Gr暗黃灰色土層出土。

3～8は浅鉢である。3は口縁部付近が内湾し、端部を短く屈曲させて上方へと立ち上がらせる。屈曲部内面には明瞭な棱が見られる。内外面ともヘラミガキ調整。A5Gr暗黃灰色土層出土。4は口縁部が長く外反し、端部を丸く上方へと立ち上がらせる。調整には細かいヘラミガキを使用しており、単位が見えない。B5Gr暗黃灰色土層出土。5は端部が小さな玉縁状になるもの。内外面ヘラミガキ調整を行う。黄灰色土層出土。6は外端部に段を形成するもの。中世包含層である灰褐色



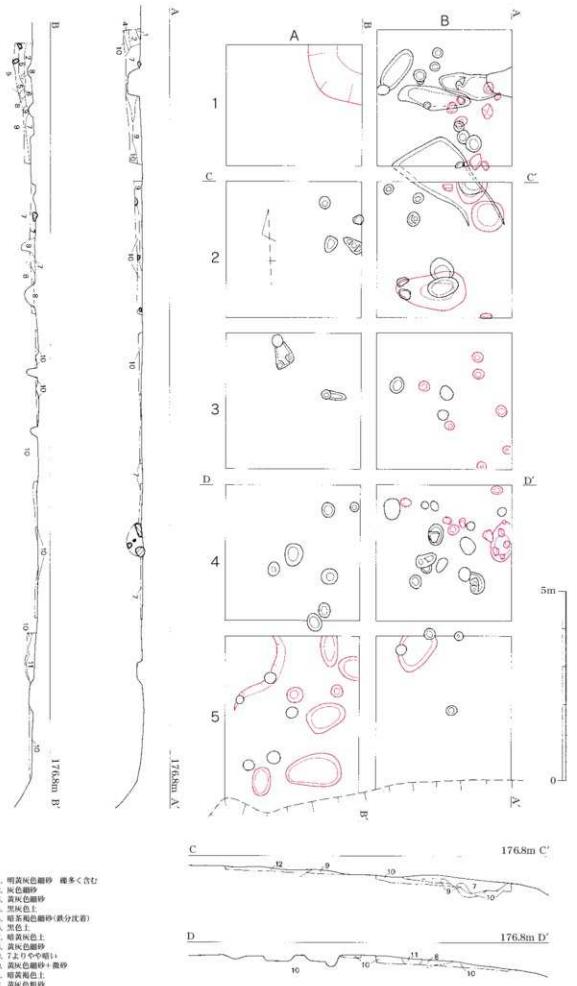
第8図 6号土坑出土縄文土器実測図(1/3)

土層出土。7は粗製の浅鉢である。端部は素口縁で器壁も厚く、調整はナデ仕上げ。中世包含層の灰褐色土層出土。8は精製浅鉢の屈曲部片。外面に明瞭な縦を有す。内外面へラミガキ調整。暗黃灰色土層出土。

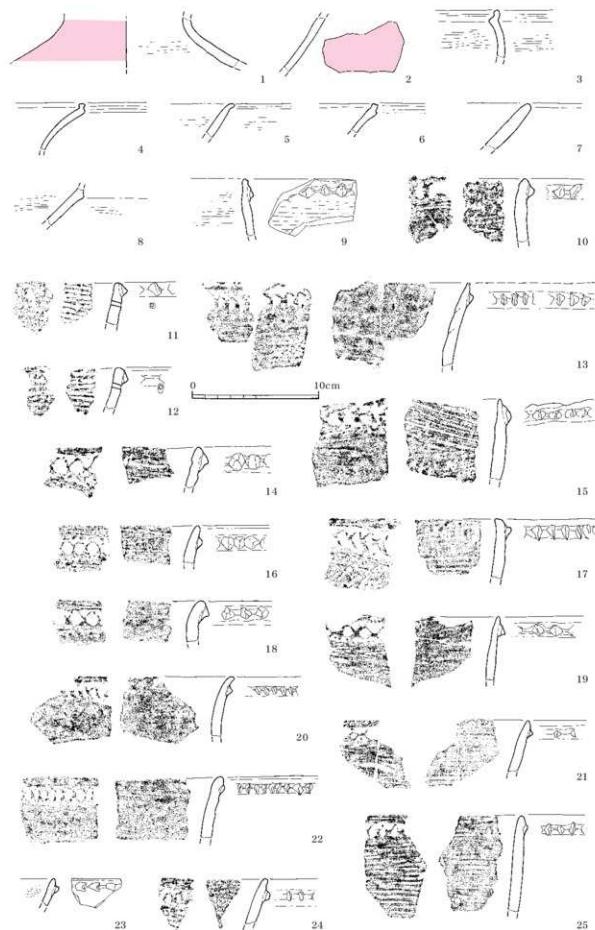
9~45は刻目突帯文土器である。9~19は大きめの刻目を施すもので、大半は指による施文と思われる。突帯は口縁部に接するか、わずかに下がった位置に貼付される。口縁部は直立気味あるいは外傾するものが多く、内傾するものはほとんど無い。調整は内外面とも横方向の条痕調整を行い、その後ナデ消すものも見られる。9はわずかに内傾する。黄灰色土層出土。10は直立気味に立ち上がる。胎土に粗砂が目立つ。色調は黒色~黄褐色を呈す。A2Gr暗黄灰色土層出土。11・12は口縁部下に焼成前穿孔を行う孔列文の要素を併せ持った土器で、恐らく同一個体。どちらもB1Gr暗黄灰色土層出土。13はわずかに外反気味に開き、端部が尖る。B2Gr暗黄灰色土層出土。14は黄灰色土層出土。15は口縁部の仕上げが歪てある。B1Gr暗黄灰色土層出土。16も同じくB1Gr暗黄灰色土層出土。17は端部上面が水平面をなす。B1Gr暗黄灰色土層出土。18は器壁が厚く、口縁部が外反する。黄灰色土層出土。19は器壁がやや薄い。B2Gr暗黄灰色土層出土。

20~44はやや小振りな刻目を施すもの。施文は爪や二枚貝側縁によるものが多い。突帯は口縁部から少し下がった位置に貼付されるものが多い。器壁の調整は条痕調整を基本とし、その上からナデ消すものも少なくない。

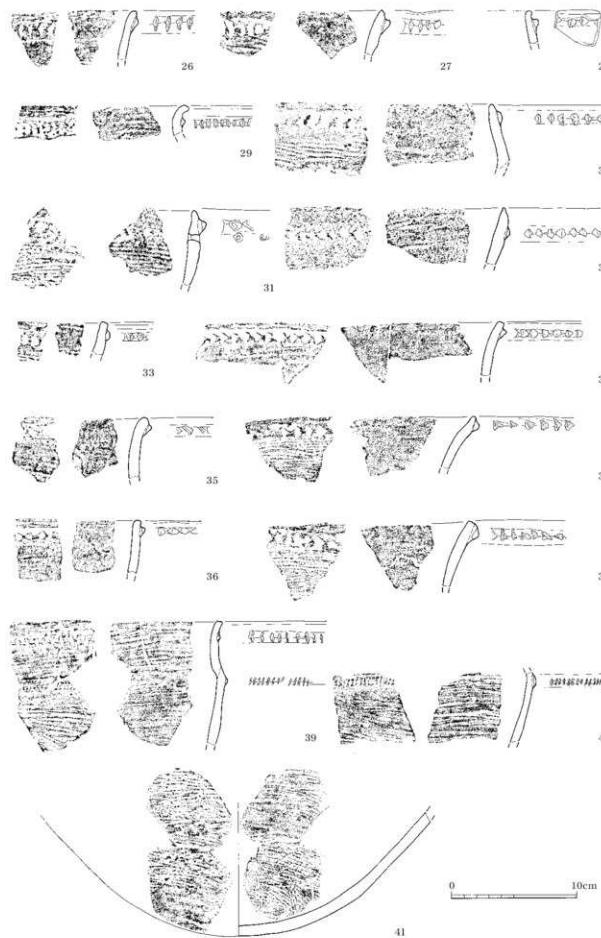
20は口縁部が緩やかに外反するもの。刻目は爪による。内外面とも丁寧にナデ消されている。B1Gr暗黄灰色土層出土。21の刻目は貝殻側縁による。胎土に角閃石が含まれる。B2Gr暗黄灰色土層出土。22は上端部が不明瞭な面をなす。刻目の工具は不明だが、深く器壁にまで達している。B1Gr暗黄灰色土層出土。23は器壁が薄く、小型品かと思われる。刻目は板状の工具を使用して左方向から施文される。B1Gr暗黄灰色土層出土。24は爪による施文で、間隔の開いた刻目となる。



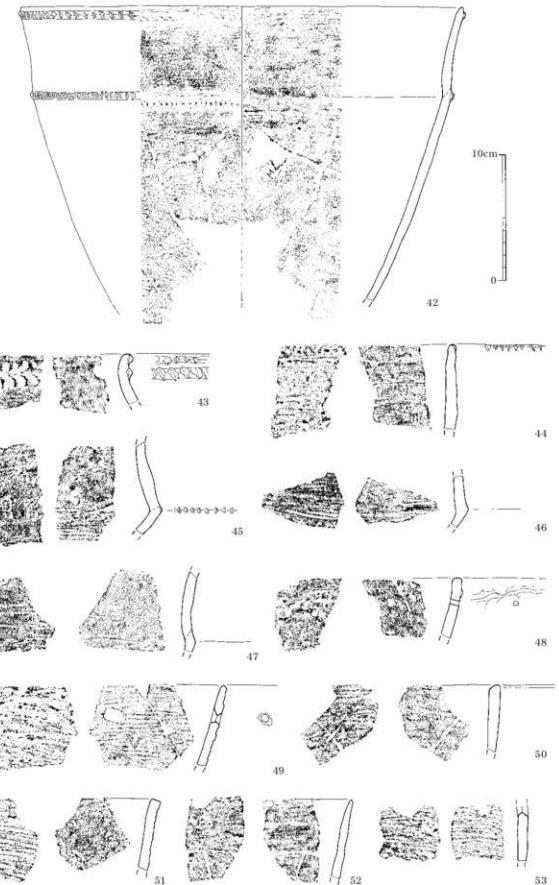
第9図 グリッド実測図 (1/100)



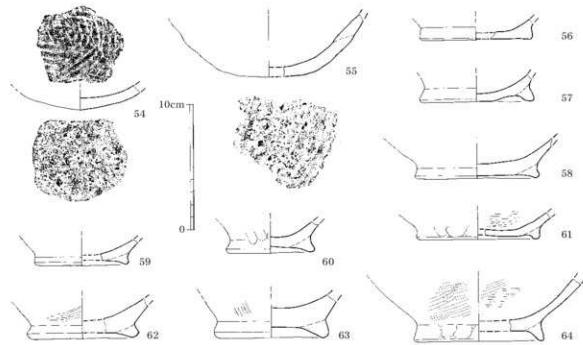
第10図 グリッド出土縄文土器実測図① (1/3)



第11図 グリッド出土縄文土器実測図② (1/3)

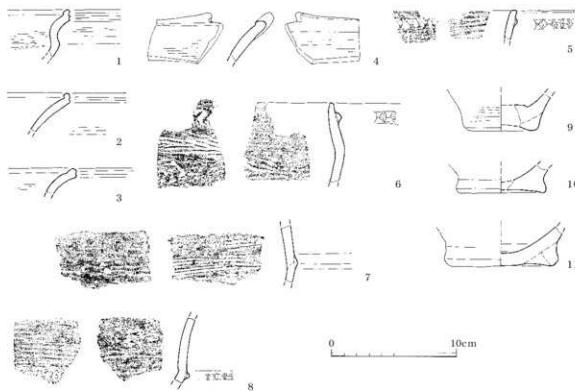


第12図 グリッド出土縄文土器実測図③ (1/3)



第13図 グリッド出土縄文土器実測図④ (1/3)

口縁端部は面をなす。黄灰色土層出土。25は低い突帯のもの。胎土に粗砂をほとんど含まない。器表にわずかではあるが炭化物の付着が認められる。B1Gr暗黄灰色土層出土。26は突帯が口縁部に近い位置にある。刻目は貝殻側縁による。胎土に角閃石を多く含む。B2Gr暗黄灰色土層出土。27は爪による施文。黄灰色土層出土。28は口縁部が内傾する。風化が著しく調整不明。黄灰色土層出土。29は口縁部が短く強く外反する。突帯は小さく鋭い棱をなす。施文は爪による。B1Gr暗黄灰色土層出土。30は屈曲部から口縁部までが短く、直線的に内傾する。施文は貝殻側縁によるものと思われる。黄灰色土層出土。31は口縁部付近の器壁が厚くなるようである。端部は上方に尖らせる。突帯はやや大きめで明瞭な棱を有す。施文は指によるものと思われる。突帯下には二つの円孔があるが、これは焼成後穿孔である。B2Gr暗黄灰色土層出土。32は口縁端部から少し下がった位置に突帯を貼付する。施文は爪による。胎土に雲母が目立つ。黄灰色土層出土。33は端部が面をなす。突帯の施文は棒状の工具によるものと思われる。B1Gr暗黄灰色土層出土。34は口縁部が緩やかに外反し、端部は面をなす。突帯の施文は棒状の工具による。B1Gr暗黄灰色土層出土。35は端部を丸くおさめる。施文は恐らく爪によるものと思われる。B1Gr暗黄灰色土層出土。36は爪による施文で、小さく浅い刻目である。B1Gr暗黄灰色土層出土。37は口縁部が広く外反する。端部は上方に尖り、口縁部に接して突帯を貼付する。刻目は貝殻側縁による施文。黄灰色土層出土。38は口縁端部の形状が異なるが、37と同一個体。黄灰色土層出土。39～41は接合しないが同一個体である。口縁端部から屈曲部までの間隔は短く、口縁部はわずかに外反しながら直立する。口縁端部は水平



第14図 ピット出土縄文土器実測図 (1/3)

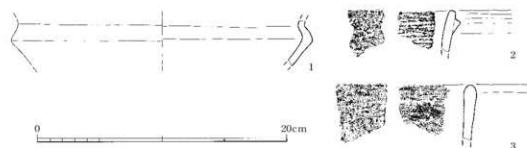
な面を形成する。突帯は口縁部下と屈曲部に巡らされるが、非常に小さいものであり、刻目は貝殻側縁による施文で、浅く密に施される。屈曲部の刻目は特に浅く密である。底部は丸底。胎土に雲母が少量認められる。B1Gr、B2Gr暗黄灰色土層出土。42は屈曲が弱く口縁部がわずかに外反する。口縁部下の突帯は断面三角形で、刻目は斜方向から施文される。屈曲部の突帯は断面台形で、刻目はほぼ垂直に施文される。施文具はどちらも板状の工具を使用する。胎土に雲母を若干含み、茶褐色～暗褐色を呈す。一部突然により黒変する。B2Gr暗黄灰色土層出土。

43は口縁部下に二条の突帯をもつものである。口縁部は内傾し、上面は面をなす。端部に接する突帯の刻目は、爪あるいは棒状工具によるもので、やや小ぶりである。その下にある突帯の刻目は恐らく指によるものであり、比較的大きい。A1Gr灰色土層・黒灰色土層出土。44は口縁端部に直接刻目を施すもの。口縁部は直立し端部は面をなす。刻目は小さく鋭い。B2Gr暗黄灰色土層出土。

45～47は屈曲部片。45は屈曲部に突帯をもたず直接刻目を施す。刻目は小さく浅いもので、恐らく爪によるものと思われる。胴部に対して口縁部側の器壁が厚く、やや内傾している。B1Gr暗黄灰色土層出土。46・47は屈曲部に刻目を持たないもの。46はA1Gr黒灰色土層出土、47はB2Gr暗黄灰色土層出土。

48は口縁部下に小さく刻目がない突帯を巡らせるもの。端部は面をなし、突帯下には焼成前の穿孔が見られる。A2Gr暗黄灰色土層出土。

49～52は突帯を持たない粗製の条痕土器。49は口縁部下に焼成後穿孔を行う。A1Gr灰色土



第15図 その他出土縄文土器実測図 (1/3)

層・黒灰色土層出土。50は口縁部が直立し、上端が内傾する面をもつ。粗さが目立つ土器である。B5Gr暗黄灰色土層出土。51は内面ナデ、外面に粗豪な横条痕調整を行うもので、端部は明瞭な面をなす。黄灰色土層出土。52は端部が尖る。内面ナデ、外面条痕調整。B2Gr暗黄灰色土層出土。

53は焼成後穿孔の見られる胴部片。B1Gr暗黄灰色土層出土。

54~64は底部片である。54・55は丸底となるもの。54は内面に条痕が見られる。B2Gr暗黄灰色土層出土。55は内外面ナデ。B2Gr暗黄灰色土層出土。56は平底となるもの。恐らく浅鉢の底部であろう。黄灰色土層出土。

57~64は底部に粘土縫を温らせて高台状の底部とするもの。57・58・62はB2Gr暗黄灰色土層出土。59・60・63はB1Gr暗黄灰色土層出土。61はA1Gr灰色土層・黒灰色土層出土。64は黄灰色土層出土。

ピット出土縄文土器 (図版9、第14図)

1~4は浅鉢である。1は屈曲部から上が短く強く外反し、端部が上方を向くもの。2・3は口縁端部が短く上方を向くもの。4は突起を持つものである。

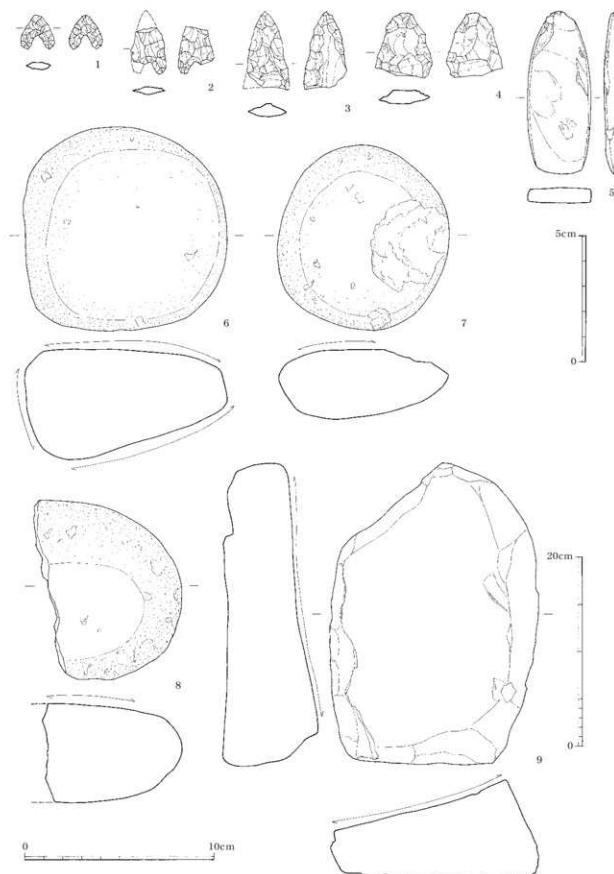
5・6は刻目突帯文土器である。5は低平な突帯を貼り付け、刻目は貝殻側縁による。6は屈曲部が不明瞭で、口縁部は内傾する。刻目は貝殻側縁による。胎土に角閃石を若干含む。

7・8は屈曲部片。7は屈曲部に無刻目の低い突帯を貼り付ける。8は小さくシャープな突帯を貼り付けるもの。

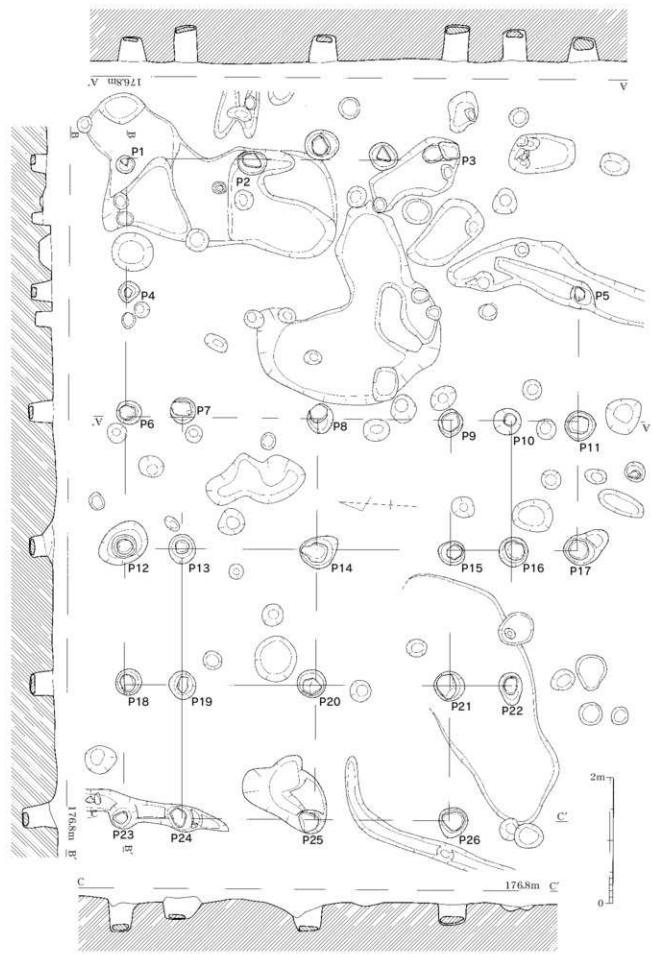
9~11は底部片である。9は小さく分厚い底部である。底面は若干上げ底となる。内面はナデ、外面には横方向の条痕が見られる。10・11はどちらもわずかに上げ底となる平底の底部。11は胎土に雲母を含む。

その他出土縄文土器 (図版9、第15図)

1は浅鉢で、屈曲部より上が短い。1号土坑出土。2は口縁部下に刻目がない三角突帯を貼付する。1号溝出土。3は条痕調整の粗製深鉢。口縁部は直立し端部を丸く収める。胎土に雲母を多く含む。1号溝出土。



第16図 石器実測図 (1~5:2/3, 6~8:1/2, 9:1/4)



第17図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

石器（図版10、第16図）

1～4は石器である。1・2は円基式。1は縦身の短い小型品で西北九州産黒曜石製。灰褐色土層出土。2は船島産黒曜石製で黄灰色土包含層出土。3は平基式で安山岩製。灰褐色土包含層出土。4は未製品で安山岩製。B1Gr暗黄灰色土包含層出土。

5は厚みの少ない小型の磨製石斧である。研磨は丁寧だが敲打痕が所々に残る。蛇紋岩製。調査区南東隅の灰褐色土包含層出土。

6～8は凝灰岩製磨石である。6は上下両面と側面一面の3面を使用する。黄灰色土包含層出土。7は片面のみ使用し、敲打による剥離が認められる。B1Gr暗黄灰色土包含層出土。8は片面のみの使用である。A1Gr灰色土・黒灰色土包含層出土。

9は凝灰岩製台石である。使用は片面のみ。南東隅の造構面出土。

4) 中世の遺構と遺物

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版3～5、第17図）

調査区の東側で検出した掘立柱建物跡である。主軸をほぼ東西にとり、梁行3間、桁行2間の柱間をもつ純柱建物である。桁長6.4m、梁長4.2mで、1間の長さは210cm。P7・13・19・24の北側と、P9・15・21・26の南側にそれぞれ半間分の縁側をもち、P10・P16の南側には更に半間分の張り出しがあり、この東側にあるP5と柱筋を描えている。ここまで含めると、梁長7.2mを測る。P6の東には柱列に沿ってP1～P4のL字に曲がる柱列がある。この囲まれた空間は後世の類似例から土間として機能したのではないかと推察される。

柱穴は直径40cm～60cm、深さ30cm～60cm。全ての柱穴の底から平たい円礫を使用した礎石が見つかった。

出土遺物（図版10、第18図1・2）

1は小皿である。口径8.7cm、器高1.2cm、底径6.6cm。2は壺である。底径10.0cm。

2号掘立柱建物跡（図版5、第19図）

調査区の南東で検出した掘立柱建物跡である。主軸を東西にとり、梁行3間、桁行2間の柱間をもつ側柱建物で、西側のP1～P6間の柱穴は欠落する。桁長5.0m、梁長4.2m。柱穴は直径25cm～80cm、深さ30cm～50cm、柱間は180cm～210cmとかなりばらつきがある。

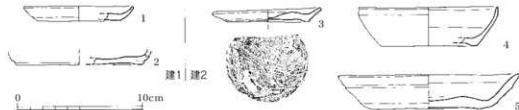
出土遺物（第18図3～5）

3は小皿である。口径9.6cm、器高1.1cm、底径6.8cm。4は深みのある壺。口径11.0cm、器高3.1cm、底径7.6cm。5は浅い壺。口径14.4cm、器高2.7cm、底径9.2cm。

土坑

1号土坑（図版5、第20図）

調査区南東側で検出した土坑である。長軸200cm、短軸105cmで東西に長い楕円形を呈す。深さは15cm程度に過ぎない。中央に直径20cm、深さ15cmのピットが一つある。覆土のうち、第2層の底面には薄い焼土層が見られ、また第2層は純炭化物層である。遺物は全く出土していない。



第18図 掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)

2号土坑 (図版6、第22図)

調査区北側で検出した大型の土坑である。長軸7.2m、南壁4.5mを測り、南北に長い不整三角形状を呈す。深さは北側で10cm、中央付近で40cm、南側で15cmを測り、中央が若干深いものの底面にはあまり高低差はない。南東隅には2号溝が接続しており、この土坑から水が流出したものと思われる。

土坑内は大小様々な円礫が無数に見つかったが、規則的に配置されたような状況ではなく雑に放り込まれた感がある。遺物はこの礫に混じって出土した。

出土遺物 (図版10、第21図1~3)

1~5は土師器環である。どれも雲母を多く含み、3・4は角閃石を含む。1は底径9.0cm。2は口径12.2cm、器高2.7cm、底径9.0cm。3は口径12.8cm。4は口径13.1cm、器高3.4cm、底径9.0cm。5は口径13.3cm、器高2.9cm、底径9.0cm。

6・7は白磁碗である。6は口縁部内面に一条の沈線を巡らせる。釉色は灰色味を帯びる。口径13.0cm。7はやや緑がかった灰色に発色する。

8・9は青白磁である。8は内面に棱をもって屈曲する。9は底部片。高台の外側まで施釉する。

10は備前焼の擂鉢である。擂目は6条を1単位とする。

11~13は火鉢である。11は土師質。口縁部上面を水平に仕上げ、その上面と外面に菊花文のスタンプを施文する。12・13は瓦質。12は口縁部が外傾する器形となるもので、11と同様口縁部の上面と側面に菊花文のスタンプを行う。スタンプ施文具は大小2種類を使用している。全面ナデ調整。13は三脚となる底部。器表が風化しており調整不明。

3号土坑 (図版6、第20図)

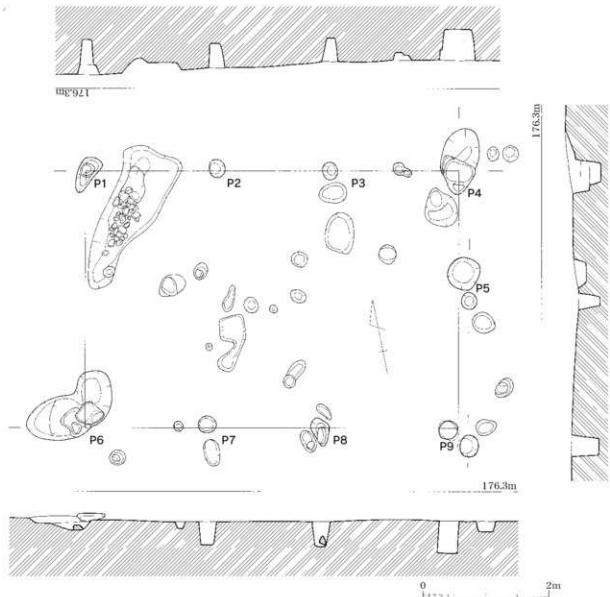
調査区中央やや北寄り、2号土坑の南側に位置する土坑である。長軸185cm、短軸120cmで南北に長い楕円形状を呈す。深さは東側が最も深く60cm、北側のテラス部で10cm、南側のテラス部で20cm。出土遺物は少ない。

出土遺物 (第21図14)

14は土師器環である。底径9.0cm。端部の仕上げが特徴的である。

4号土坑 (図版6、第20図)

調査区中央のやや南寄り、1号掘立柱建物跡の南側に位置する土坑である。長軸140cm、短軸



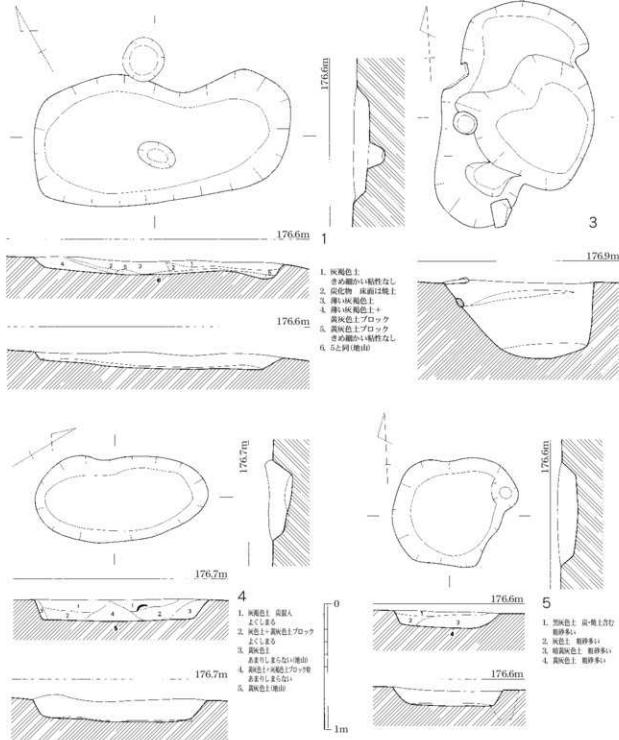
第19図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

70cmを測り、南北に長い楕円形状を呈す。深さは20cm。覆土のうち第1層には炭が混入する。
出土遺物 (図版10、第21図15~17)

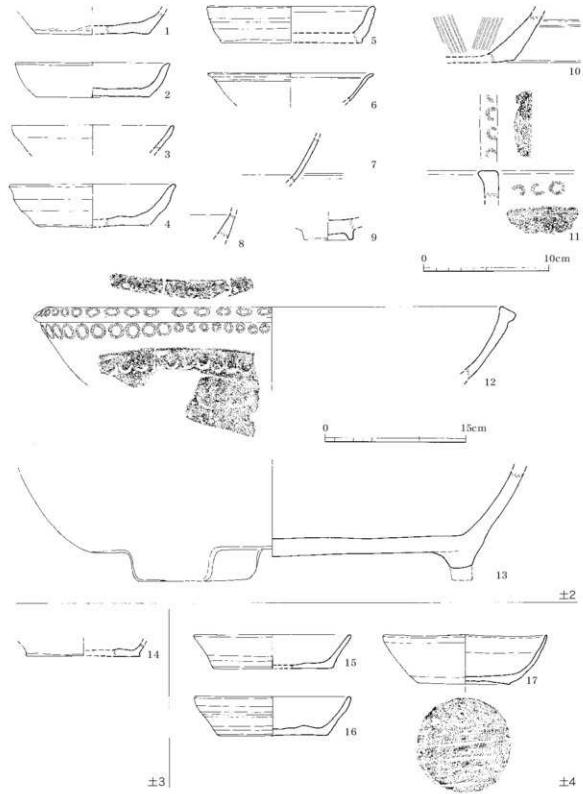
15~17は土師器壺である。15は体部が外反しながら開く。口径12.4cm、器高2.7cm、底径9.4cm。
16は口径12.3cm、器高3.1cm、底径8.8cm。17は口径13.0cm、器高3.9cm、底径7.2cm。

5号土坑 (図版7、第20図)

調査区南側で検出した土坑である。長軸100cm、短軸80cm、深さ10cm。北東隅に径20cm、深さ
20cmのピットが1基ある。覆土のうち第1層には炭・焼土が見られる。
図示できる遺物は出土していない。



第20図 1・3～5号土坑実測図 (1/30)



第21図 土坑出土土器・陶磁器実測図 (12:1/4、他:1/3)



第22図 2号土坑実測図 (1/40)

溝

1号溝（図版7、第23図）

調査区の東側、1号掘立柱建物跡の南東側で検出した溝である。南北に約6m延びる南北溝と、これに接続して東西に約2m延びる東西溝ととなる。幅は40cm前後。断面図を見てみると、東側がテラス状に浅くなる二段の掘削を行っていることが判る。覆土は上層に灰褐色土、下層に黄灰色または黄灰褐色細砂が堆積する。

その位置から推察して、1号掘立柱建物跡の排水溝として掘削されたものと思われる。

出土遺物（第24図1・2）

1・2は土師器壺である。2は底径9.8cm。

2号溝（第23図）

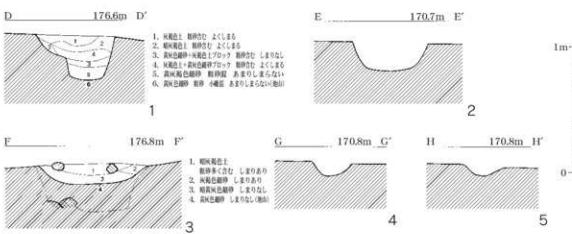
調査区の北側に位置し、東西に延びる溝である。全長約11m、東端から6mのところで枝分かれしている。西端は先述の2号土坑に接続する。幅60cm、深さ20cm。底面は西側から東側に向かって傾斜しており、2号土坑の排水溝として機能していた事が判る。

出土遺物（第24図3～8）

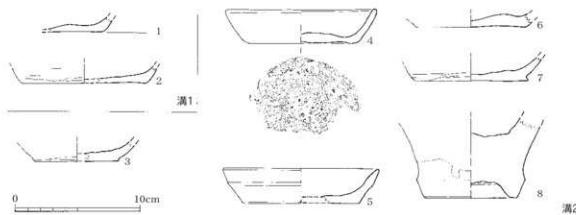
3は土師器小皿である。底径6.7cm。4～7は土師器壺である。4は口径12.0cm、器高2.7cm、底径9.0cm。雲母を多く含み、他に角閃石も含む。5は口径12.4cm、器高2.7cm、底径9.4cm。6は底径8.7cm、7は底径9.0cm。8は白磁壺の底部である。高台部は内外面とも露胎となる。高台部径7.3cm。

3号溝（第23図）

調査区東側で検出した溝である。南北に直線的に延びており、全長約13m、北端は2号土坑に切られる。幅90cm、深さ40cm。土層図を見てみると、上層に暗灰褐色土、下層に黄灰色細砂層が堆積する。その位置から推察して、西側から流入する雨水が宅地に進入するのを防ぐための排水溝であろう。出土遺物はほとんど無い。



第23図 1～5号溝断面実測図 (1/30)



第24図 溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

4号溝（第23図）

調査区東側で検出した溝である。南北に直線的に延びており、全長6m、一部1号掘立柱建物跡と重複する。幅30cm、深さ10cm。3号溝と併行しており、溝の機能も同様のものであろう。出土遺物はほとんど無く、図示できるものはない。

5号溝（第23図）

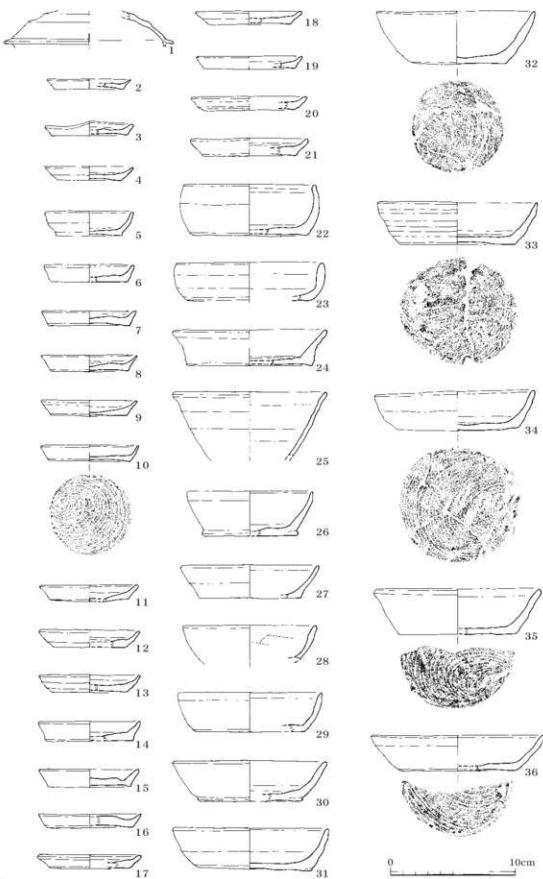
調査区東側で検出した溝である。南北方向に7mほど直線的に延びており、北端は東側へ1.5mほど折れる。幅30cm、深さ15cm。3・4号溝と同方向に延びており、やはり同じく排水溝として機能していたものと思われる。出土遺物はほとんど無く、図示できるものはない。

ピット出土土器（図版10、第25・26図）

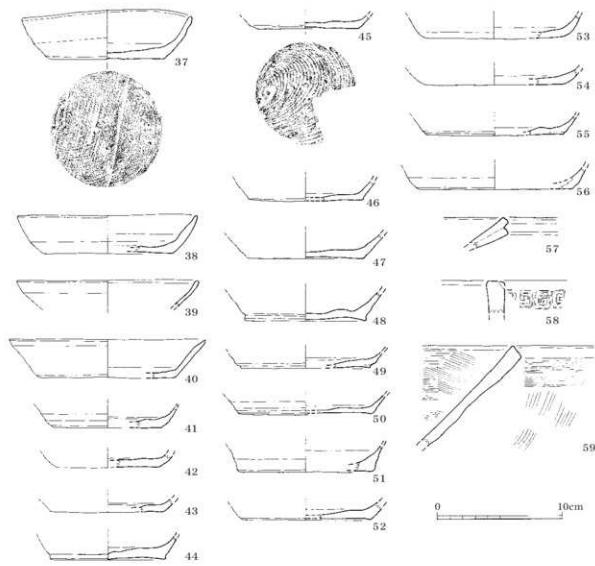
1は須恵器壺蓋である。径13.4cm。

2～21は土師器小皿である。2・4・8は口縁部を薄く仕上げ、底部は上げ底気味となり端部が鋭い稜をなすのが特徴である。2は口径6.6cm。3～5は口径7.0cm。5は口径に対して器高が高く、深みのある器形となる。器高2.0cm、底径5.2cm。6は口径7.2cm。7は口径7.4cm。8・9は口径7.6cm。10は口径7.8cm、器高1.3cm、底径6.6cm。11は口径7.8cm、12は口径7.9cm、13～15は口径8.0cm。13は2などと同様口縁部を薄く仕上げる。14は底端部が稜をなし体部があまり開かないのが特徴的である。16は口径8.1cm。口縁部が薄く底部が極端に厚い。17は口径8.2cm。18・19は口径8.4cm。20は口径9.2cm、21は口径9.3cm。

22～56は土師器壺である。22・23は体部が丸く内湾するもの。22は口径11.7cm、器高4.1cm、底径9.2cm。23は口径11.7cm。24は底端部が明瞭な稜を有し体部が外反するもの。口径12.2cm、器高2.8cm、底径10.0cm。25は器壁が薄く、体部が直線的に伸びるもの。小片を反転復元しているため、口径に不安が残る。胎土には砂粒をほとんど含まず精良である。26～40は体部が外反気味になるものと内湾するものがある。26は口径10cm、器高3.5cm、底径7.6cm。27は口径11.0cm、器高2.6cm、底径8.0cm。28は口縁部付近の器壁が厚くなる。口径10.6cm。29は口径11.4cm、器高3.1cm、底径



第25図 ピット出土土器実測図① (1/3)



第26図 ピット出土土器実測図② (1/3)

8.6cm。30は口径12.2cm、器高3.2cm、底径8.4cm。31は口径12.3cm、器高3.4cm、底径9.1cm。32は底径が小さく身の深い器形となる。口径12.5cm、器高4.2cm、底径7.4cm。33は口径12.6cm、器高3.3cm、底径9.0cm。34は口径12.7cm、器高3.2cm、底径7.5cm。35は口径13.0cm、器高3.6cm、底径9.4cm。36は口径13.8cm、器高2.8cm、底径9.0cm。37は口径13.5cm、器高4.0cm、底径8.9cm。38は口径14.2cm、器高3.1cm、底径10.4cm。39は器壁が薄い。口径14.4cm。40は口径15.6cm、器高3.1cm、底径11.2cm。

41~56は底部片。全て系切りである。41は底径7.6cm、45は底径8.2cm、46は底径9.2cm、50は底径10.0cm、51は底径10.8cm、56は底径12.4cm。

57は土師質鍋の口縁部片。端部に凹線を巡らせる。胎土に砂粒をほとんど含まず黄灰褐色に焼成される。58は土師質火鉢の口縁部。上端部に面を有し、外面にはスタンプによる雷文を巡らせる。

59は瓦質鉢である。端部は素口縁でシャープな面を有す。内外面ともハケ目調整。

包含層出土土器・陶磁器（図版11、第27図）

1は須恵器提瓶である。上半部を失するが、胴部の径は15cm程度になろう。灰褐色包含層出土。この時期の遺物は少量出土しているが、遺構は見られない。

2～6は土師器小皿である。全て灰褐色土包含層出土。2は口径7.2cm、器高1.1cm、底径5.4cm。3は口径7.8cm、器高1.4cm、底径6.1cm。4は口径8.0cm、器高1.5cm、底径6.3cm。5は口径8.1cm、器高1.3cm、底径6.4cm。6は底径6.2cm。

7～17は土師器坏である。全て灰褐色土包含層出土。7～10は底部片。底径8.2～9.0cm。11は口径12.1cm、器高3.1cm、底径8.1cm。12は口径14.6cm、器高3.2cm、底径10.0cm。13は体部が直線的に伸びる。口径13.8cm、器高3.2cm、底径9.4cm。14は口径16.0cm、器高3.2cm、底径11.8cm。15は口径11.9cm、器高2.9cm、底径6.9cm。16は口縁部下に稜線を有す。口径12.2cm、器高2.8cm、底径7.1cm。17は口径15.2cm。

18～20は青磁碗である。灰褐色土包含層出土。18は無文で釉・器壁ともに厚みがある。口径16.8cm。19は箇運弁の青磁碗。口径19.5cm。20は「金玉滿堂」陰刻のある青磁碗。高台部の豊付は水平面をなす。高台部径6.0cm。

21・22は白磁碗である。21は口縁部が外反し、端部に輪花を配す。釉色はやや青みを帯びる。口径12.8cm。22は比較的高い高台となるもの。釉は高台部までは及ばない。高台部径5.9cm。

23・24は鉢である。23は瓦質。口縁部は厚みを増し、断面三角形に仕上げる。内面横ハケ目、外側はナデで指圧痕が残る。24は土師質。端部が外側に短く折れたような形状をなす。端部はシャープな稜を有す。内面横ハケ目、外側ナデ。25は土師質擂鉢である。口縁部は断面三角形に仕上げる。内面には4本の擂目が見られる。外側はナデ仕上げ。船底に砂粒を含まず精良で黄灰色に焼成される。口径28.6cm。

土製品・石製品（図版11、第28図）

1～6は管状土錐である。2は1号溝出土、4は試掘調査時に出土、6はビット出土、他は灰褐色土包含層出土。2・3は中央部が膨らんだ形となる。1は長さ3.5cm、径1.2cm、孔径3mm。4は孔径が大きく、5mm。6は長さ4.45cm、径1.0cm、孔径4mm。

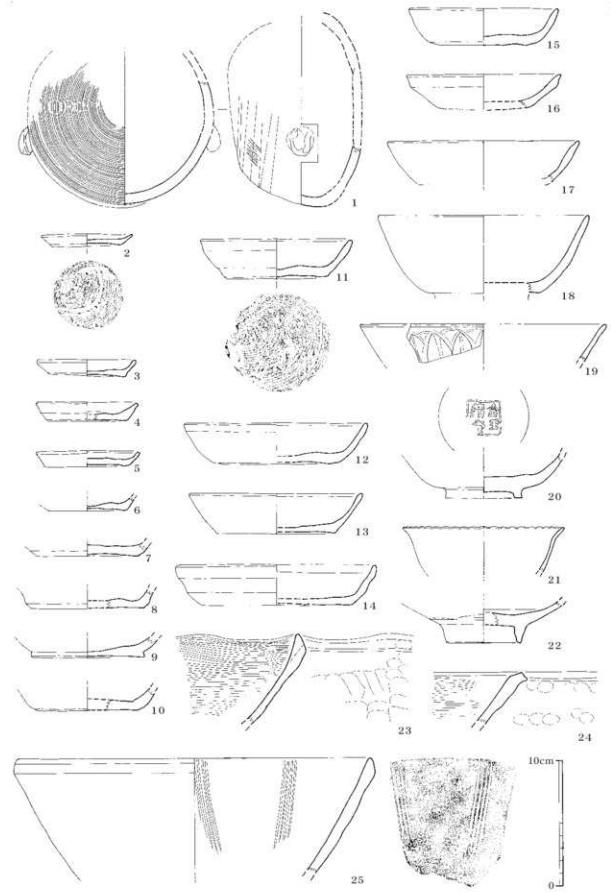
7は鬼瓦で、鼻から口にかけての小片である。他に瓦類は一切出土していないので、どこから搬入されたのであろう。2号土坑出土。

8・9は砥石である。8は繊粒砂岩製の仕上げ砥。ビット出土。9は凝灰岩製の粗砥である。据え置いて使用しており、一面のみ使用される。底面には擦痕が残る。長さ28.5cm。

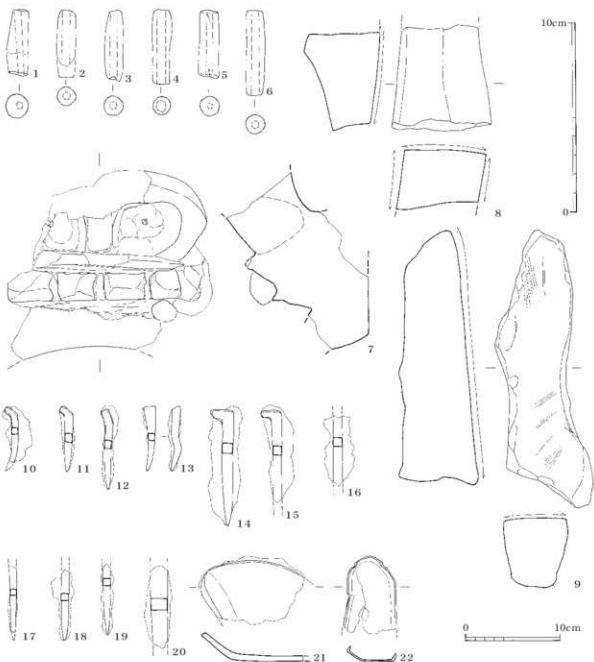
10～19は鉄釘である。10～13は長さ3.5cm～4.5cmの小型品である。厚さは4mm前後。13は頭部の形成が明瞭ではない。10はビット、11は2号溝、12は灰褐色土包含層、13は4号土坑出土。14は短いが完形品。長さ6.2cm、厚さ5.5mm。灰褐色土包含層出土。15～19は折損する。厚さは4mm～6mm程度。18はビット出土、他は灰褐色土包含層出土。

20は棒状の不明鉄製品。長さ4.3cm分が遺存し、厚さ6mm、幅9mmを測る。ビット出土。21も不明鉄製品である。形状は梢円形に近く端部を折り返す。厚さ3mm。灰褐色土包含層出土。

22は銅製品である。周囲を折り曲げており、2ヶ所に縫り込みを入れる。厚さ1.5mm。鍍金は無い。仏具の一種であろうか。遺構面からの出土。



第27図 包含層出土土器・陶磁器実測図（1/3）

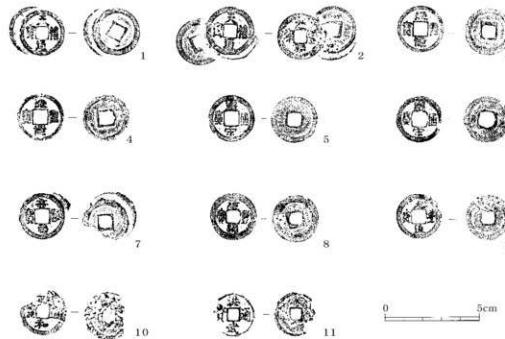


第28図 土製品・金属製品実測図 (9:1/4, 他:1/2)

古錢 (図版7・11、第29図)

6は表土中、11は遺構面、他は遺構面の一箇所から一括して出土した。一括出土品は20枚程度が固まって出土したが、図示した他は細片である。所謂理納錢であろうか。全て中国錢である。

1は2点が接着する。北宋1017年初鋤の天禧通寶。2は3枚が接着する。1点は1と同じ天禧通寶。もう1点は明1368年初鋤の洪武通寶。3は北宋1023年初鋤の天聖通寶(篆書体)。4は3と同じ。5は北宋1039年初鋤の皇宋通寶。6も同じ。7は北宋1056年初鋤の嘉祐通寶。8は北宋1078年初鋤の元豐通寶。9も同じ。10は北宋1111年初鋤の政和通寶。11は2のうちの1点と同じ明1368年初鋤の洪武通寶。



第29図 古銭実測図 (1/2)

5) 小結

下伊良原中ノ坪遺跡で検出した遺構は、縄文時代の土坑1基、包含層1箇所、中世の掘立柱建物跡2棟、土坑5基、溝5条である。

6号土坑は当遺跡唯一、前期森B式土器が出土した遺構である。しかし併存する4の条痕文土器は器形や口縁部形態は後期の特徴として挙げられるものであり、時期比定の判断が難しい。器形や口縁部形態を考慮してこの土器を後期の所産と考え、森B式土器は二次的に流入したものと考えた。

グリッド調査を行った縄文時代包含層では、比較的まとまった量の突帯文期の土器が出土した。京築地域ではこれまでに、この時期の土器がまとまって出土した例はほとんど無く、包含層出土ではあるものの貴重な資料として注目される。

浅鉢等に一部晩期前半まで遡る資料が含まれるもの、ほぼ突帯文単純期に限定される土器群で、深鉢の突帯の形状から新旧二つに分別できる。

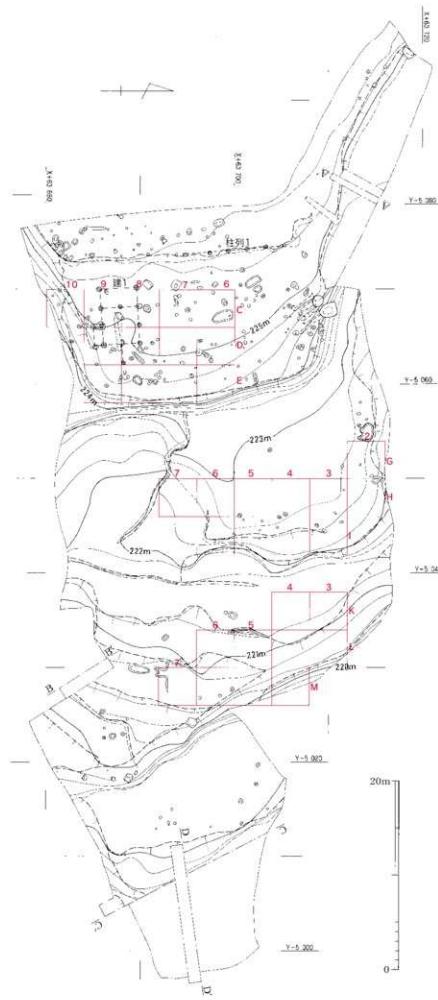
古相のものは指による刻目施文の大振りな突帯を持ち、対して新相のものは爪や貝殻側縫、棒状工具による刻目施文の小さな突帯を持つ。中には第12図44のように口縁端部に直接刻目を施すものや、第11図39・40、第12図45のように屈曲部に直接刻目を施文する例、第12図46・47のように屈曲部に刻目を施さない例もある。口縁部と屈曲部が接合する資料が少ないため一概には言えないが、これらは新相のものに伴う可能性が高い。また、古相・新相を通して、口縁部が外傾するものが多い点、底部を高台状にする点などは、東北部九州或いは西部瀬戸内地域と共通する要素である。更に、第10図11・12、第12図48のように口縁部下に円孔を持つ、いわゆる孔列文土器の影響を受けたとされる土器や、第15図2の無刻目突帯の土器などは、その位置付けに課題の残るものである。

中世の出土遺物の中で、最も量の多いのは土師器小皿と壺である。小皿は形状によって、第25図5のように深みのあるものと、浅く体部が開くものとに分けられ、更に浅いものは口縁部が丸いものと薄く尖るものとの二者に分かれる。深みのある小皿はわずか1点出土しただけで、多くは浅く体部が開くものである。浅いものは口径6.0～9.3cmの範囲にあり、おおよそ7.5cm～8.0cmの範囲に集中する。口縁部形態の違いによる法量差は見られない。

壺は体部が内湾し深みのあるものと、体部が直線的に開くものとに大別される。内湾するもの中には、第25図22や23のように口縁部が開かず直立、或いは内傾するものもあるが、この2点のみである。口径は10.0cm～13.5cmの範囲にあるが、12.5cm前後に集中する。直線的に開くものは、屈曲部に明瞭な棱を有し体部が外反気味に開くものと、屈曲部が丸みを帯びるものがあるようだが、両者の差は明瞭ではない。口径は12.0cm～16.0cmまで見られ、12.0cm～12.5cmと、14.5cm～15.5cmの二つの範囲に集中する。

輸入陶磁器類は全体的に数が少ないが、鎌倉の青磁碗や、内面見込みに「金玉満堂」印刻のある青磁碗など、13世紀以降に出現する青磁碗が出土している。日常雜器類では瓦質や土師質の鉢、擂鉢、スタンプのある火鉢、鍋など、数は少ないが14世紀代の遺跡にみられるセットが揃う。特筆すべきは、第28図7の鬼瓦の出土である。瓦類は他には1点も出土していないので、他所から持つてこられたものであろうが、周辺では当該期の瓦葺建築物は発見されておらず、今のところは出所が不明と言わざるを得ない。

中世の遺構で重要なのは1号掘立柱建物跡である。西側の総柱建物と東側の側柱建物からなる二間取りで、東側は恐らく土間となるであろう。近世に繋がる民家構造が京築地域の山間部においては14世紀に出現していることを確認できたのは貴重な成果である。



第30図 下伊良原原田ノ谷道路構造配置図 (1/400)

2 下伊良原原田ノ谷遺跡

1) 調査の概要 (図版12、第3・30図)

下伊良原原田ノ谷遺跡は、京都府みやこ町大字下伊良原字原田ノ谷1881、1884、1890に所在する遺跡である。祓川の左岸、西の塚地区と呼ばれる小扇状地の最奥部にあり、同川へと注ぐ二本の支流の開析作用によって形成された狹隘な台地上に立地する。標高は223m前後。先述の下伊良原中ノ坪遺跡から400mほど西側にある。調査対象面積は4,803m²、調査面積は約4500m²、調査前の地目は水田、植樹林。

平成10年9月16・17日に、伊良原ダム関連埋文化財事業として最初に試掘調査が行われたのがこの遺跡である。岩屋河内地区代替地への工事用道路建設予定地として当該地に試掘調査が行われ、遺跡の所在が明らかになった。なお試掘調査当時は「西の塚平原遺跡」として登録されたが、その後みやこ町教育委員会との協議の結果、遺跡名については大字・小字をもって名称をすることとしたため、名称を「下伊良原原田ノ谷遺跡」に変更した。調査期間は9月4日～1月26日。

遺構面の標高は、北西端で25.5m、北東端で25.5m、南端で218.5m、を測り、西から東へ向けて傾斜する。本来は緩斜面だったのであるが、後世の棚田造成のため遺跡は四段の階段状になる。遺構の時代は大きく縄文時代と中世に分かれるが、どちらも広い平坦面をもつ西端の段から主に見つかっている。他の3つの段は遺構密度が希薄である。

検出した主要遺構は、縄文時代の包含層3箇所、中世の掘立柱建物跡1棟、柱列1条、土坑2基である。縄文時代の包含層は4mメッシュでグリッド掘削調査を実施した。

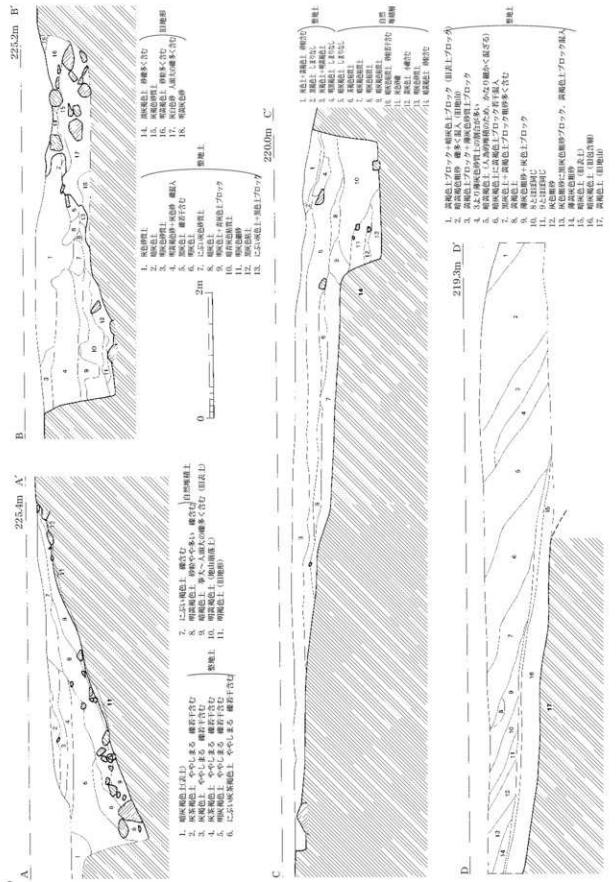
2) 基本層序 (図版13、第31図)

調査区北西端の土層A-A'を見てみると、第9層暗褐色土層の上に厚い整地層が見られ、大幅な盛土を行っていることが判る。この整地層は厚い所では1mにも及ぶ。旧地形では北側へ向けて下降しており、生活面としては不適切な地形だったようである。旧表土の下には明褐色土層があり、この上面が中世の遺構面となるが、遺構はほとんど確認されていない。またこの付近には縄文時代包含層も見られない。

B-B'は調査区南東の土層である。やはり後世に整地されており、第1～13層は整地層である。本来の地形である第14～15層は灰褐色を基調とした色調の層であり、他の調査区で見られるものと同じ中世の包含層である。但しこの付近には中世の遺構形成はほとんど見られず、層中の遺物も僅少である。第16～18層は砂質分の多い層であり、河川の氾濫堆積によって形成された層であることが判る。

C-C'は調査区東端の南北断面図である。第1～4層が整地土、第5～14層が旧地形の層である。第5層暗灰褐色土は中世の包含層であるが、やはり遺物は僅少である。第8～13層は河川の氾濫堆積作用によって形成された層であり、粘土や砂を多く含んでいる。第14層暗黄褐色土は他で見られる縄文時代包含層と同質の土であるが、この土層付近では遺物の包含は見られなかったため掘削は行っていない。

D-D'は調査区東端の東西断面である。厚さ1m以上の整地層が堆積し、その下層には旧表土がある。旧表土下には第16層暗灰褐色土層があり、中世包含層を形成するが、やはり遺物は非常に少ない。その下層の第17層黄褐色土は遺物を含まない地山である。



第31図 下伊良原町ノ谷遺跡基本断面図 (1/60)

第32図は調査区の西側に位置する縄文時代包含層の実測図である。当遺跡の中では最も堆積状況が良い場所であり、また伊良原地区全体に共通する基本土層でもある。図は既に表土掘削を終了した後で作成したもので、上層の中世包含層である灰褐色土層は残っていないが、本来は第1層黄灰色土層の直上に灰褐色土層が堆積する。

土層図を見てみると、最上層に黄灰色を基調とする層の堆積が見られるが、この層の上面が中世遺構面となる。この黄灰色土層はアカホヤの二次堆積層であり、縄文時代前期以降の遺物を包含する。第4層は粘性を帯びた暗黄灰色土であるが、この層中には遺物がほとんど含まれない。第5層暗黒灰色土層は縄文時代早期の包含層であるが、この原田ノ谷遺跡では早期の遺物は僅少であった。第6層灰色土は固く締った粘性の高い土であるが、この層からは遺物は全く出土していない。

この下伊良原原田ノ谷遺跡では、上述の黄灰色土、黒灰色土からなる縄文時代遺物包含層が3つの箇所で認められたため、中世の遺構調査後にグリッド掘削調査を行った。

3) 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代包含層調査（図版13～15）

C6Gr～C10Gr（第32・33図）

調査区の西端にある縄文時代遺物包含層である。南北20m、東西13mの範囲にわたり、黄灰色土層の堆積が見られ、縄文時代遺物包含層を形成している事が判ったため、中世遺構の調査終了後に4mメッシュのグリッド掘削調査を実施した。

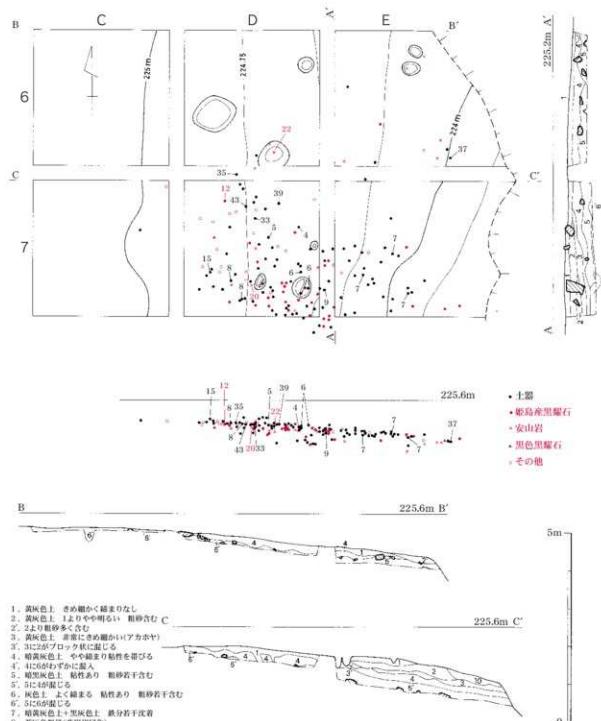
土層図を見てみると、C6・C7Gr以外に第1層黄灰色土が分布する。厚さは20cm程に過ぎないが、この層に最も多く遺物が含まれる。第2層は第1層と同じ色調だが、粗砂を含む点で異なる。この層も多くの遺物が含まれる。第2'層は第2層より更に粗砂が多く含むが、この層になると遺物はほとんど出土しなくなる。堆積は厚い所では80cmにも及ぶ。この第1層～第2層の黄灰色を基調とする層はアカホヤの二次堆積層である。第3層は非常に肌理が細かく黄色味の強い黄灰色土層である。厚さは良好な所でも10cmに過ぎない。この層は土壤分析の結果、アカホヤ純堆積層であることが判明している。遺物は全く出土していない。第4層は第1層～第2層と色調が近い暗黄灰色だが、粘性があり締まっている点で異なる。この層は基本的に無遺物層である。第5層は粘性があり粗砂を若干含んだ暗黒灰色土である。E7Grでこの層の掘削を行ったが、その結果遺物が出土しなかったので、他は掘削していない。

平面図を見てみると、北西から南東へと緩やかに傾斜していることが判る。遺構は数基のピット以外見つかっていない。遺物はD7GrからE10Gr付近に集中して出土している。

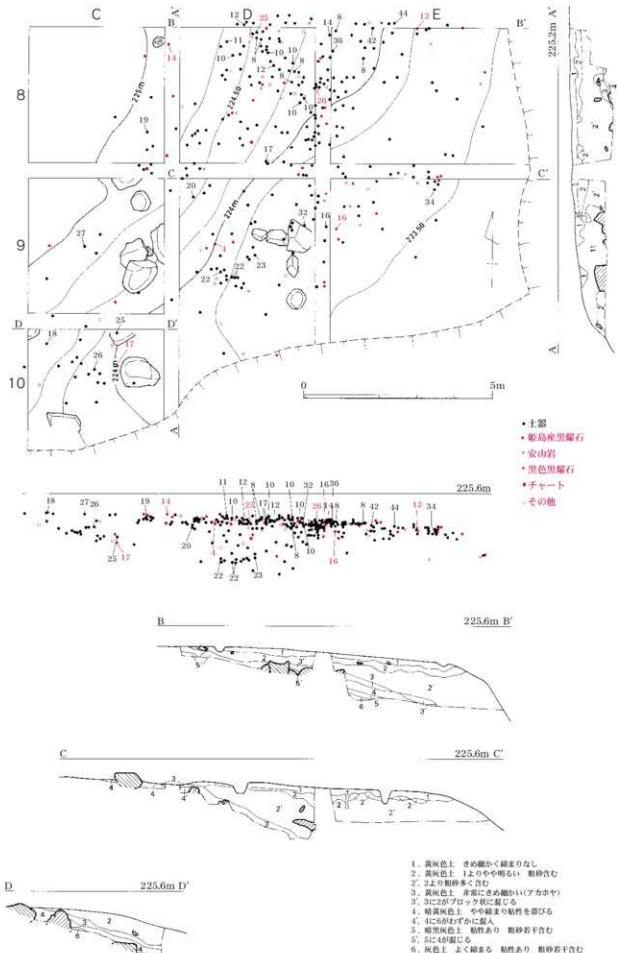
G2Gr～H7Gr（第34図）

調査区の中央付近にある縄文時代遺物包含層である。南北24m、東西8mにわたって黄灰色土層の堆積が見られたため、4mメッシュのグリッド調査を実施した。

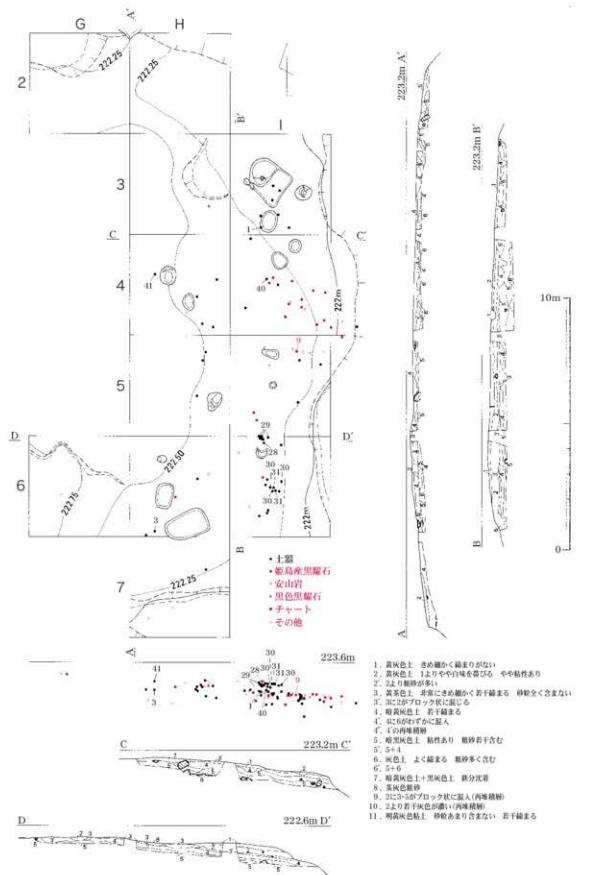
土層図を見てみると、第1・2層の黄灰色土は東半部にしか残っておらず、西側は広く削平された状況であり、調査前から既に第4層暗黄灰色土が露出していた。第4層の下層には第5層暗黒灰色土が堆積する。基本的な層序は先述のC6Gr～C10Grと同様であるが、遺物は少ない。



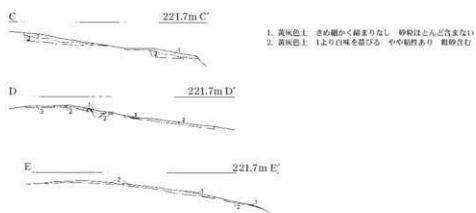
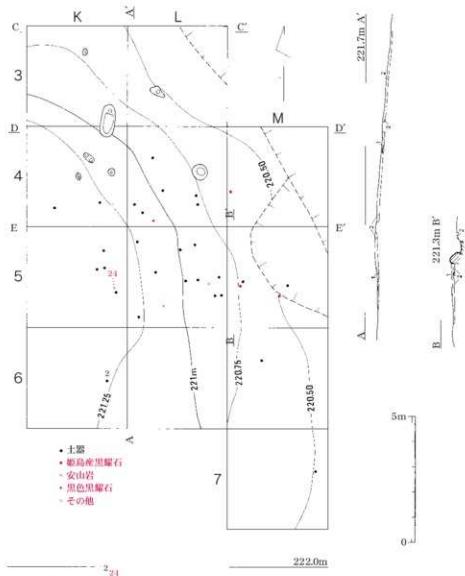
第32図 グリッド実測図① (1/100)



第33図 グリッド実測図② (1/100)



第34図 グリッド実測図③ (1/150)



第35図 グリッド実測図④ (1/150)

K3Gr～M7Gr（第35図）

調査区の西寄りにある縄文時代遺物包含層である。南北20m、東西12mの範囲で黄灰色土層の堆積が見られたため、4mメッシュのグリッド調査を実施した。土層図を確認すると、第1・第2層の黄灰色土層は認められるものの、堆積は薄く、また遺物の出土量も僅少で散漫な分布状況である。

出土遺物

縄文土器（図版18・19、第36～38図）

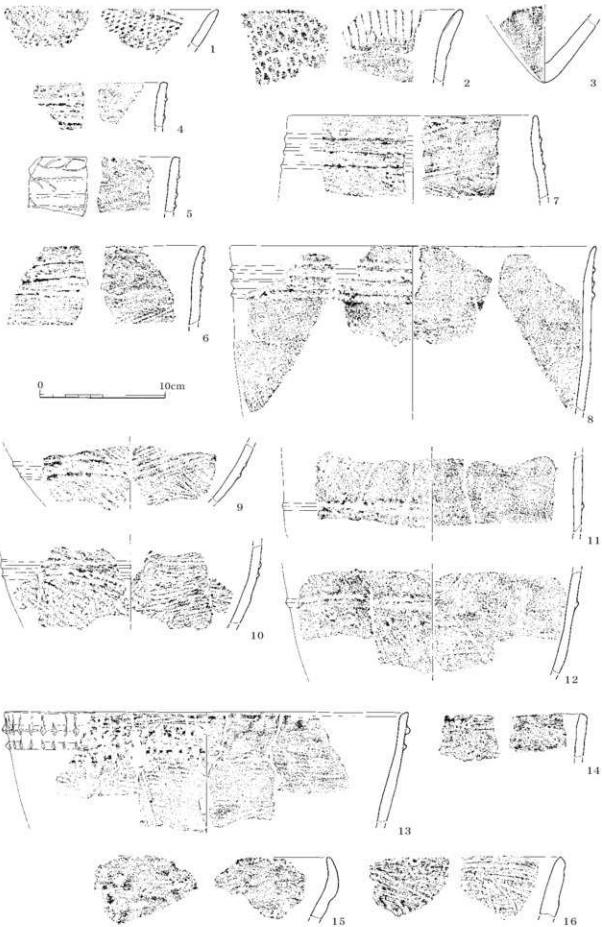
1～3は早期押型土器である。1は外側面に小型の楕円押型文が見られる口縁部片。黄灰色に焼成される。L3Gr出土。2は口縁部がわずかに外折する。外側に継位の楕円押型文、内側には原体条痕が見られる。茶褐色に焼成される。L6Gr出土。3は尖底となる底部片。内外側ともナデ調整。胎土に角閃石を少量含み、黄灰色に焼成される。H6Gr出土。

4～8は前期轟B式土器の口縁部である。4は口縁端部が水平面をなし、外側には二条の細い隆起帯が見られる。D7Gr出土。5もやはり口縁端部が水平面をなす。外側には三条の隆起帯が見られるが、恐らく粘土貼付の際に付いたと思われる、爪による弧状の沈線が連続して認められる。胎土に角閃石を若干含み、黄灰色に焼成される。D7Gr出土。6は口縁部がわずかに外反し、端部を丸くおさめる。外側には三条の隆起帯が貼付される。内側は二枚貝腹縁による条痕調整後ナデ。胎土に角閃石を若干含み、外側にはコゲが付着する。D7Gr出土。7は内傾する口縁部となる。端部は丸みを帯びる。外側には三条の隆起帯を貼付する。調整は外側とも条痕後ナデ。胎土に角閃石を若干含む。口径19.6cm。E7Gr出土。8は刪部上半が直立し、端部付近がわずかに外方へ開く。端部は器壁を薄くして尖り気味に仕上げる。外側には他に比べてやや大きめの隆起帯を三条貼付する。調整は内外側ともナデ仕上げ。暗褐色に焼成される。口径29.0cm。D7Gr・D8Gr・E8Gr出土。

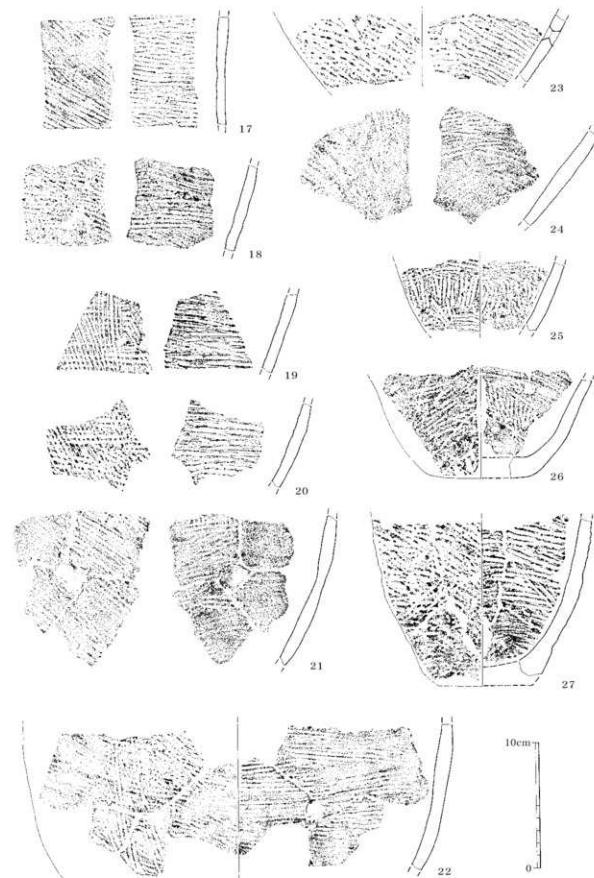
9～12は轟B式土器の刪部片である。9は二条の隆起帯を貼付する。胴下半部が丸みを帯びた器形となり、隆起帯が下がった位置に巡らされるようである。外側とも条痕調整。胎土に角閃石を若干含み黄灰色に焼成される。D7Gr出土。10もやはり下半部が丸みを帯びた器形となるようである。隆起帯は二条認められる。外側とも条痕調整。胎土に角閃石を若干含み明黄灰色に焼成される。D8Gr出土。11は直立する刪部片で、一条の隆起帯を巡らせる。隆起帯の径は23.8cm。胎土に角閃石を若干含み黒褐色に焼成される。外側にはコゲが付着する。D8Gr出土。12は接合しないが11と同一個体の可能性が高い。D8Gr出土。

13は先述の轟B式土器と同時期か、あるいは若干遅る時期に位置付けられる土器である。口縁部はやや開き、端部は内傾する面を有す。外側の口縁部下に二条の隆起帯を巡らせ、その上から雜な刻目を施文する。器壁の調整は外側とも条痕後ナデ。胎土に角閃石を若干含み黒褐色に焼成される。C8Gr・D9Gr出土。

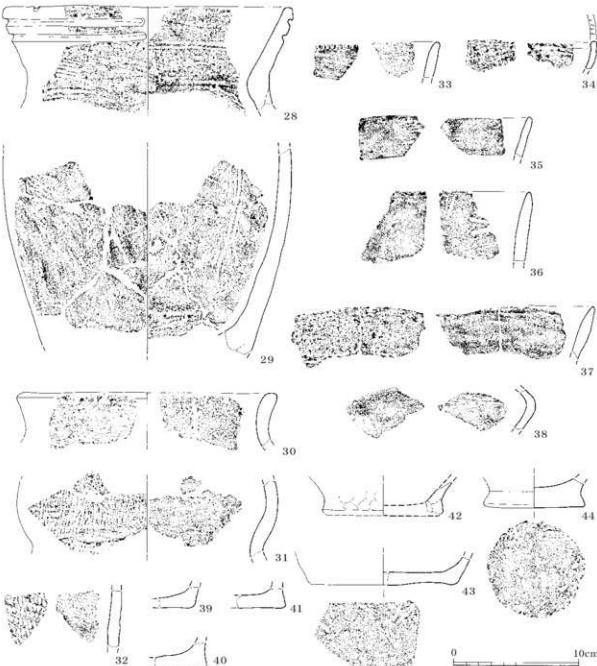
14～16は条痕文土器である。14は口縁部が直立し、端部が面をなす。内外側とも条痕調整後にナデを行う。胎土に雲母を若干含み黄灰色に焼成される。E8Gr出土。15は口縁部が丸く内湾し、端部を薄く仕上げる。調整は条痕後ナデ。胎土に雲母を若干含み茶色に焼成される。後期の土器であろう。D7Gr出土。16は器壁が厚く、端部は外傾する面をなす。調整は内外側とも巻貝条痕。黄灰褐色に焼成される。E9Gr出土。



第36図 グリッド出土縄文土器実測図① (1/3)



第37図 グリッド出土縄文土器実測図② (1/3)



第38図 グリッド出土縄文土器実測図③ (1/3)

17~27は二枚貝条痕調整の脛部片である。大半が前期に属すると思われる。17は傾き不明。内外面に明瞭な条痕調整が見られる。黄褐色に焼成され外面にはコゲが付着する。D8Gr出土。18は胎土に角閃石を多く含む。C10Gr出土。19の色調は灰色を呈す。CSG出土。20は黄灰色を呈し外面にコゲが付着する。D9Gr出土。21と22は接合しないが同一個体である。胎土に角閃石を若干含み色調は灰褐色~黄灰色を呈す。D9Gr出土。23は粗い条痕調整を行う。色調は黄灰色。焼成後穿孔が見られる。D9Gr出土。24は内面の底部に近い付近がナデ消されている。胎土に角閃石を若干含み黄灰色を呈す。D9Gr出土。25は小型品である。外面の条痕の方向が特徴的である。明黄灰色を

呈す。C10Gr出土。26は底部付近の破片である。底径は約8cmで端部に明瞭な稜をもたない器形となるようである。胎土に角閃石を多く含み明黄灰色を呈す。C10Gr出土。27は胴下半部の破片である。底部は接合面で剥離するが、底径は7cm前後となるだろう。胎土に砂粒をあまり含まず色調は明黄灰色を呈す。C9Gr出土。

28と29は接合しないが同一個体である。口縁部は直線的に開き、端部を丸くおさめる。口縁部の外面に二条の幅の広い沈線を巡らすが、全周せず途切れる。端部に刻目が認められるが、破片であるため配置等は不明。胴部はあまり開かず長胴の器形になるようである。調整は全面巻貝条痕調整で、全体的に器壁が厚い。胎土に石英・長石の粗砂を含むが角閃石は含まない。後期の土器である。I6Gr出土。30と31も接合しないが同一個体である。口縁部はあまり開かず、端部は丸くおさめる。胴部は丸味を帯びる。図示した胴部の資料は上下が不明瞭だったので、或いは逆かもしれない。口縁部と胴部の内面はナデ、胴部外面は繩文調整。やはり後期のものであろう。I6Gr出土。32は外面に繩文を施すもの。内面は横方向の条痕調整。色調は灰褐色を呈す。D9Gr出土。

33は口縁端部に小さな刻目を施すものである。明黄灰色を呈し外面にはコゲが付着する。D7Gr出土。34は器壁が薄く、小型品であろう。端部は面をなし、小さな刻目を施す。外面にはヘラ状工具による施文があり、また巻貝側縁の押圧痕も見られる。胎土に雲母を若干含む。E9Gr出土。

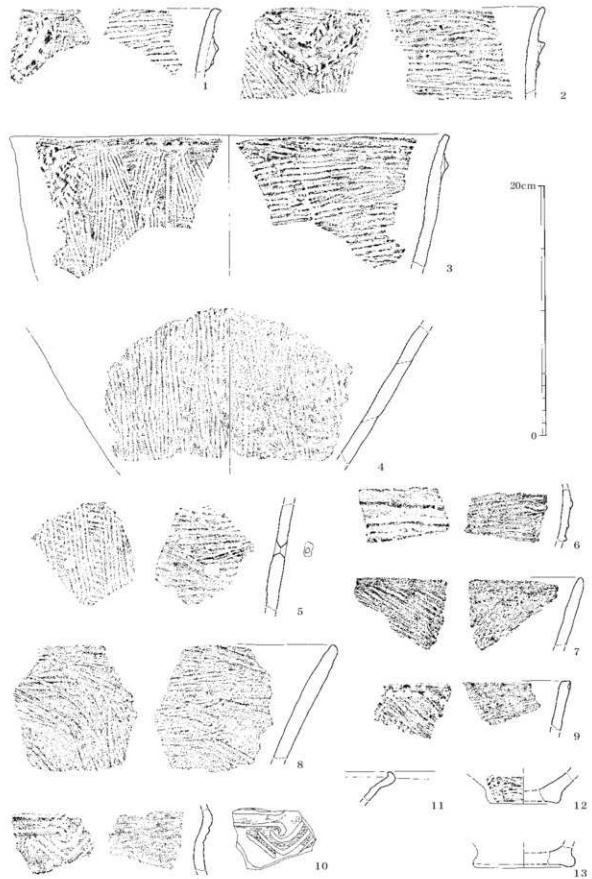
35～37はナデ調整の口縁部片である。35は器壁がやや薄い。外面にはコゲが付着する。D7Gr出土。36は胎土に若干含み黄灰色を呈す。E8Gr出土。37は口縁部下の器壁が厚くなる。胎土に雲母を若干含み灰褐色を呈す。E6Gr出土。38は強く湾曲する破片である。内外面とも丁寧なナデ調整で円滑に仕上げる。胎土に角閃石を若干含む。D8Gr出土。

39～44は平底となる底部である。底面はほぼ平坦か、あるいはわずかに上げ底となり、端部は43を除いて外側に開き、比較的明瞭な稜をなす。43は底端部から不明瞭に胴部へと移行する。39は角閃石を若干含み茶灰色を呈す。D9Gr出土。40は角閃石を若干含み茶灰色を呈す。I4Gr出土。41は茶灰色を呈す。H4Gr出土。42は底径9.6cm。胎土に雲母を含む。E8Gr出土。43は底径11.6cm。胎土に角閃石を含む。D7Gr出土。44は胎土に角閃石を含み茶灰色を呈す。E8Gr出土。

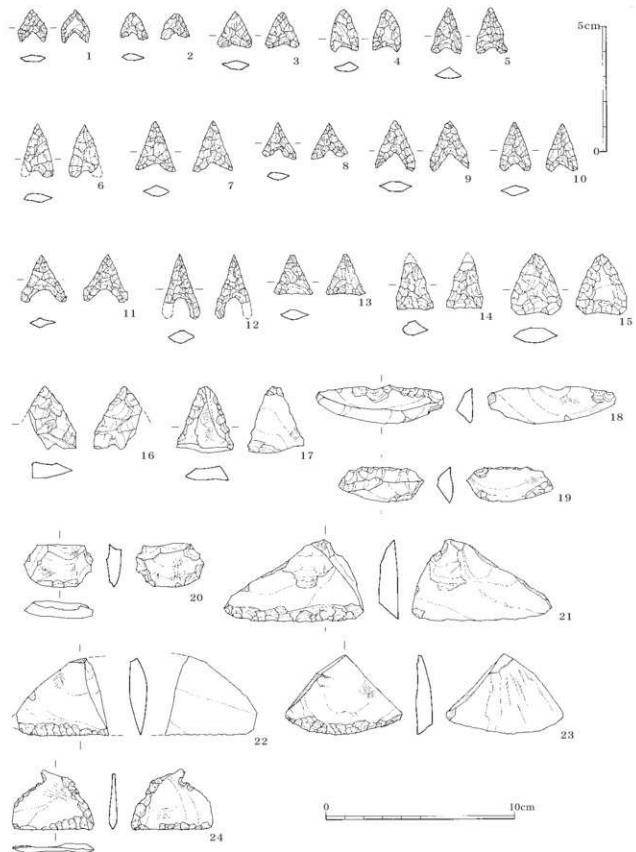
試掘・表土掘削時等出土繩文土器（図版19、第39図）

試掘調査は本調査時のD7Gr付近で行っているので、ここで報告する試掘調査時出土土器は基本的にD7Gr周辺で出土したものである。

1～5は同一固体である。口縁部付近がわずかに外反し、端部は面をなす。外面の口縁部下に二条のV字隆起帯を貼付し、その上から刻目を施す。5には焼成後の穿孔が見られる。調整は内外面とも二枚貝条痕調整。胎土に角閃石を含み薄灰色～黄灰色に焼成される。試掘調査時に出土しており、同一固体と思われる破片がやはりD7Grから出土している。轟B式と同時期頃に位置付けられる土器。6は3条の隆起帯が見られる轟B式土器。胎土に角閃石を若干含み黄灰色～灰色に焼成される。B3遺構面出土。7は条痕調整の土器で、端部を丸くおさめる。胎土に角閃石を若干含み黄灰色を呈す。外面にはコゲが付着する。排土中から採集。8は直線的に外反する口縁部で、内外面とも巻貝条痕調整。胎土に角閃石を含まず雲母を若干含む。色調は暗黄灰色を呈す。表土掘削時に出土。後期の土器である。9は口縁端部を水平に面取りし、口縁部下に巻貝頂部押圧による列点文を施す後期の土器である。色調は黒褐色を呈す。C7遺構面出土。10は小池原上層式頃の土器で、



第39図 試掘・表土掘削時出土縄文土器実測図 (1/3)



第40図 石器実測図① (1~20:2/3, 21~24:1/2)

外面にわずかに赤色顔料の付着が認められる。試掘調査時に出土。11は晩期初頭頃の精製浅鉢。口縁部を丸く内側へと肥厚させる。試掘調査時に出土。12・13は底部片である。12は底径5.6cmと小さな底部である。内外面条痕調整。胎土に角閃石を若干含み黄灰色を呈す。堆土から採集。13はわずかに上げ底になる底部片である。底径8.0cm。胎土に雲母を若干含む。表土掘削時に出土。

石器（図版19、第40・41図）

1～15は石器である。1・2は小型品。1は五角形に近い形状をなす。片面には主剥離面が残る。西北九州産黒曜石製で表土掘削時に出土。2は安山岩製でB3遺構面出土。3～10は基部の抉りが浅く、長三角形のもの。3は2号土坑出土で姫島産黒曜石製。4は粗整形時の剥離面を残す。姫島産黒曜石製でD9Gr出土。5は姫島産黒曜石製で試掘調査時に出土。6は姫島産黒曜石製でB3遺構面出土。7は安山岩製でピット出土。8は安山岩製でC7遺構面出土。9は姫島産黒曜石製でI5Gr出土。10は姫島産黒曜石製でC7遺構面出土。11・12は基部の抉りが深いもの。11は安山岩製でC7遺構面出土。12は西北九州産黒曜石製でE8Gr出土。13～15は平基式のもの。13は安山岩製で暗灰褐色土包含層から出土。14は姫島産黒曜石製でC8Gr出土。15は姫島産黒曜石製でD7Gr出土。

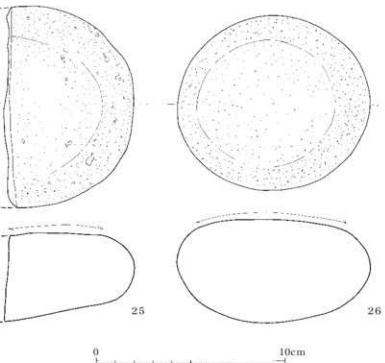
16・17は石器未製品である。16は基部調整の段階で折損したものと思われる。姫島産黒曜石製でE9Gr出土。17も姫島産黒曜石製でC10Gr出土。

18～24はスクレイパーである。18～20は横長剥片の側縁に剥離調整を加えたもの。18は姫島産黒曜石製で東端の中世包含層出土。19も姫島産黒曜石製で暗灰褐色包含層出土。20は安山岩製でD7Gr出土。21～24は安山岩の大きめの剥片の側縁に丁寧な剥離調整を加えて刃部としたものである。

21～23は片面のみ、24は部分的ながら両面から剥離を行なう。21はC7遺構面出土。

22はD6Gr出土。23は試掘調査時に出土。24は不明瞭ながら基部に抉りを加えて石匙状をなすもの。L5Gr出土。

25・26は磨石である。どちらも凝灰岩製。25は片面のみ使用。D8Gr出土。26も片面のみ使用。D8Gr出土。



第41図 石器実測図② (1/2)

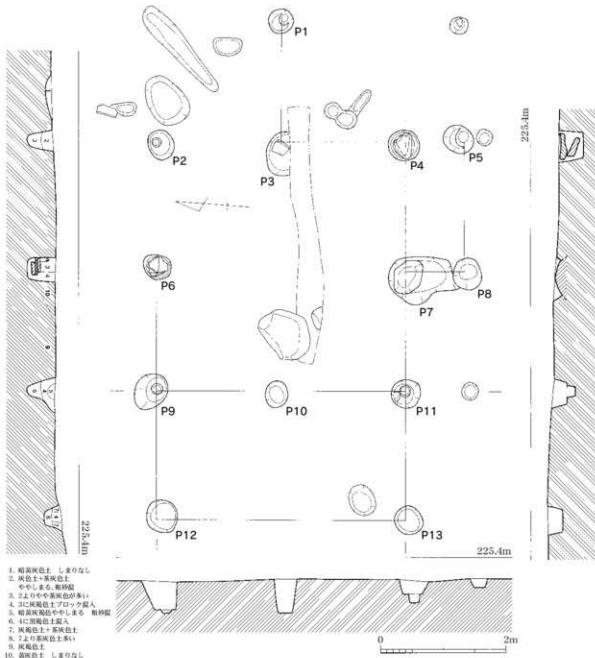
4) 中世の遺構と遺物

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版16、第42図）

調査区南西で検出した掘立柱建物跡である。主軸を東西にとり、東西3間、南北2間の柱間をとる。桁長6.0m、梁長4.0m。柱間の間隔は180cm～210cm。P12とP13の間には柱穴は無く、P3とP10などで棟を支える構造であったようである。またP1は扉あるいは棟支えの柱であろうか、1つだけ単独で配置される。P4とP7の南側には半間分の張り出しがあるが、縁であろうか。

柱穴は直径50cm、深さ20～50cm。土層観察で柱痕が確認できたものもあり、これによると柱径



第42図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

は15cm程度である。P3・4・6では穴底に扁平な石を置いて柱の腐食・沈下を防止する試みが見られる。またP7は自然岩の上に柱を建てていたようである。

図示できる遺物は無い。

柱列

1号柱列（図版17、第43図）

調査区西端で検出した遺構である。6つのピットからなり、南北方向へ直線的に延びる。P1～P5までは柱間間隔はほぼ200cmだが、P5～P6間だけは270cmあるので、或いはP6は別の遺構かもしれない。直径40cm、深さ30～50cm。P1・4・5は穴中に根固め石が見られる。土層観察では柱痕の径は15cm程度。

図示できる遺物は無い。

土坑

1号土坑（図版17、第44図）

調査区西側、1号掘立柱建物跡の北側に位置する土坑である。直径80cmの円形を呈し、深さは30cm、中央へ向かって掃鉢状に深くなる。坑中からは扁平な割石が数個見つかっている。形状は縄文時代の配石炉に似るが、覆土の違いから中世のものと判断した。

遺物は全く出土しなかった。

2号土坑（図版17、第44図）

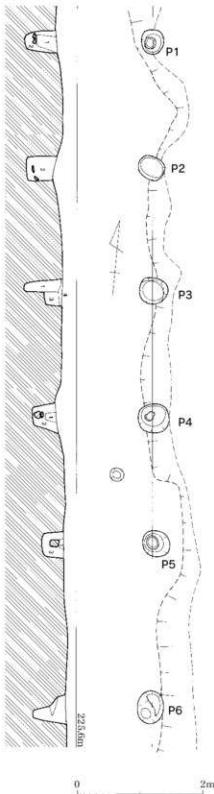
調査区の西側、1号掘立柱建物跡の東側で検出した土坑である。長軸100cm、短軸80cmを測り、北東～南西方向に主軸をとる楕円形を呈す。深さは20cmで、床面は平坦に掘削される。

遺物はわずかに出土したが、図示できるものは無い。

包含層その他出土遺物（図版19、第45図）

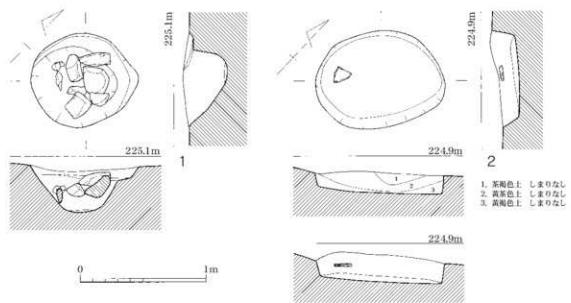
1～5は弥生土器である。下伊良原田ノ谷遺跡では、遺構を伴わないながらも弥生土器が若干出土している。

1は断面台形の突帯を巡らす中期の壺胴部である。外面にはヘラミガキが認められる。試掘調査時に出土。2は中期前半頃の壺口縁部。端部は面をなす。表土掘削時に出土。3は前期末～前半頃に豊前南部で見られる壺。

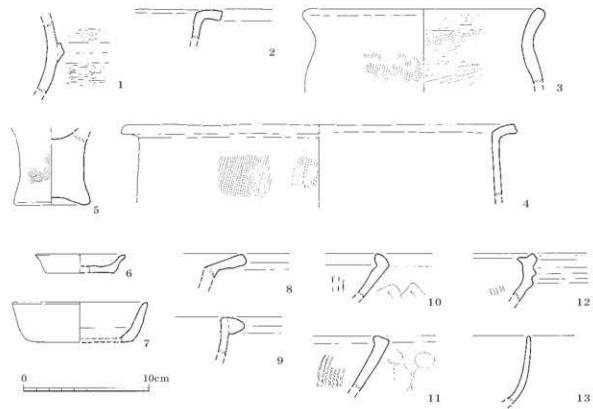


第43図 1号柱列実測図 (1/60)

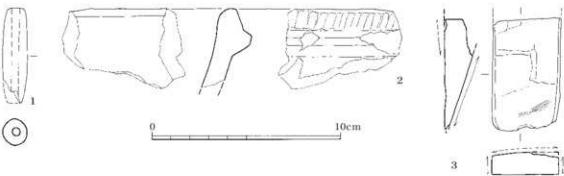
- 1. 断面台形1. 突帯1. しまりなし
- 2. 壺口縁部1. 端部1. しまりなし
- 3. 从ぬ色土. 相模駆じらしまりなし
- 4. 黄灰褐色土. 鹿嶋駆じらしまりなし



第44図 1・2号土坑実測図 (1/30)



第45図 土器・陶磁器実測図 (1/3)



第46図 土製品・石製品実測図 (1/2)

口縁部はあまり開かず、内面にはヘラミガキが認められる。口径19.2cm。東端の包含層出土。4はやはり中期初頭～前半の甕。端部はシャープな面をなす。口径31.4cm。表土掘削時に出土。5は柱状の高い甕底部片で、中期初頭～前半のもの。表土掘削時に出土。

6～13は中世のもの。6は土師器小皿である。口径7.0cm、器高1.5cm、底径5.4cm。試掘調査時に出土。7は土師器杯。口径10.6cm、器高3.2cm、底径6.4cm。8・9は瓦質鍋。8は胎土に粗砂を含まず精良である。表土掘削時に出土。9は暗灰褐色土包含層出土。10・11は土師質擂鉢である。10は堅く焼き締まる。灰褐色土包含層出土。11は排土層から採集。12は偏前系の擂鉢。東側の包含層出土。13は白磁碗で釉は薄茶褐色に発色する。暗灰褐色土包含層出土。

土製品・石製品（図版19、第46図）

1は土師質の管状土錘である。胎土は精良。長さ5.0cm、径1.3cm、孔径0.4cm。暗灰褐色土包含層出土。2は滑石製石鍋である。鶴部の断面は小さな台形となる。外面には吹きこぼれた炭化物が付着する。暗灰褐色土層出土。3は頁岩製の砥石である。肌理が細かく、仕上砥として使用されたものであろう。折損後に再度使用する。東側包含層出土。

5) 小結

下伊良原原田ノ谷遺跡で検出した遺構は、縄文時代の包含層3箇所、中世の掘立柱建物跡1棟、土坑2基、柱列1条である。

縄文土器は大きく早期、前期前半、後期前半頃のものに分けられる。出土状況の水平分布を見ると、早期押型文土器は中央と東側のグリッドから出土し、前期前半の轟B式土器を中心とする土器は西側のグリッドに集中、後期前半の小池原上層式前後の土器は中央のIGCrから出土しており、時期によって偏在する傾向が窺える。垂直分布を見てみると、早期の土器は第5層暗黒灰色土層から出土、その他の土器は第1層～第2層の黄灰色を基調とする層から出土しており、早期と前期以降とで出土層位が異なる。この遺跡では土壤の火山灰分析を行い、第3層がアカホヤ純堆積層、第1～第2層の黄灰色土層はアカホヤ二次堆積層であることが確認できたが、この分析結果とも矛盾しない。なおかつ今回確認できた第5層黒灰色土層と第1層～第2層黄灰色土層は、この伊良原地区ではほぼ全域に分布するので、今後の伊良原ダム関連事業地内の他遺跡の発掘調査を行う上で指標となる。

早期押型文のうち、第36図1は稻荷山式、第36図2は田村式に比定され、時期の異なるものである。出土点数は僅か3点に過ぎないが、京築地域では押型文土器の出土例が少ないので貴重な資料である。

前期前半轟B式土器は、本遺跡で最も多く出土した土器である。確認できる範囲では、口縁部下に3条、胴部に2条の低平な隆起帯を巡らせ、器表の調整は条痕調整の後にナデで仕上げている。底部との接合資料に恵まれなかつたため底部形態は不明だが、同じ西側のグリッド内では平底の底部片が数点出土しており、これらとの関係に注意を払う必要がある。

供伴土器には、口縁部下に雑な刻目を施した2条の隆起帯を巡らせる第36図13の土器や、口縁部下にV字状に2条の刻目のある隆起帯をもつ第39図1～5の土器などがある。これらは同時併存または型式的に若干連りうるものである。他に口縁部形態が不明ではあるが、二枚貝による粗豪な調整を行う条痕文土器片も供伴する。

後期の土器は、出土数が少ないせいもあり、セット関係等を把握するまでには至っていない。第38図28・29や第38図30・31、第39図10がこの時期のものである。

石器もそれほど出土数が多い訳ではなく、大まかな傾向が窺えるに過ぎない。出土位置が明らかなものを見てみると、第40図12の鍬形鎌は明らかに早期押型文に伴うものであり、前期には小型三角鎌が目立つようである。石材には鹿島産黒曜石を用いる傾向にあることも窺える。スクレイバーには安山岩の大型剥片に側縁のみ剥離調整を加えたものを使用する。後期に作る石器は明確ではないが、第40図24は恐らくこの時期のものであろう。

以上のように、下伊良原原田ノ谷遺跡は縄文時代を中心とする遺跡であるが、遺物出土量がそれほど多くなく顕著な遺構にも恵まれなかつたため、十分な情報量を得たとは言い難い。しかしながら一定量の前期土器の出土があったことと、伊良原地区全体に及ぶ鍬層とも言える層位関係を把握出来たことは大きな調査成果となった。

弥生時代以降の遺構・遺物は非常に少ないが、その中でも弥生時代中期の土器が出土したことは少なからず驚きを覚えた。恐らく当時の狩猟採集活動の一端を示す資料であろうが、これまで伊良原地区には弥生時代の遺跡は存在しないと考えていただけに、当時の行動範囲を一考させる資料である。また1号掘立柱建物跡の存在は、その背景にある生業等は不明であるものの、中世後期の人々の山間地進出、それも狭隘な谷奥の平地に居を構えるという事がどのような意味を持つもののか興味深いところである。

3 下伊良原寺ノ谷遺跡

1) 調査の概要 (図版20・21、第3・47図)

下伊良原寺ノ谷遺跡は、京都郡みやこ町大字下伊良原寺ノ谷1723、1724に所在する遺跡である。載川の左岸、西の塚地区と呼ばれる小扇状地の奥にあり、同川へと注ぐ支流によって形成された段丘面上に立地する。標高は207m前後。先述の下伊良原原田ノ谷遺跡から北東へ150m、下伊良原中ノ坪遺跡から250mほど西側にある。調査対象面積は1,645m²、調査前の地目は水田。

平成19年1月11日に、それまで行っていた下伊良原原田ノ谷遺跡の表土反転、掘削作業が終了したため、翌12日に重機を移動して、新たに計画が浮上した岩屋河内地区代替地（B代替地）の沈砂地予定地の試掘調査を行った。試掘調査の結果、中世のピットや溝を多数確認し、本調査が必要である旨伊良原ダム事務所に連絡し、協議の結果、本調査を平成19年1月12日～2月28日で実施することとした。

遺構面の標高は、東端で206.7m、南端で206.6m、西端で206.8mを測り、わずかに南側に向かって傾斜する。遺跡の時代は大きく縄文時代と中世に分かれ、縄文時代については包含層のグリッド掘削を実施したが、遺物はほとんど出土しなかった。

中世の遺構はほぼ全城に及び、特に掘立柱建物跡は数度に亘る建て替えの結果、複雑に重複する。またこれに伴う溝も數度に亘って掘り直されている。

検出した主な遺構は、縄文時代の包含層1箇所、中世の掘立柱建物跡8棟、礎石建物跡1棟、柱列4条、土坑8基、溝14条である。

2) 基本層序 (第48図)

調査区西壁の土層P-P'を見てみると、耕作土、床土の下層に粗砂を多く含んだ暗黄灰褐色や暗灰褐色の砂質土が堆積する。他遺跡の例と同様、この層は中世遺物包含層である。第5層明灰色砂礫層は地山であり、この上面が中世の遺構面となる。

Q-Q'は調査区中央付近のトレンチ壁面の層図である。包含層は既に掘削しており、第6層茶灰色土、第7層黄灰褐色混疊土層の上面が中世遺構面となる。第8層黒灰色土は他の地点では一定の厚さが見られ、縄文時代早期の包含層を形成する層だが、この付近では無遺物である。第9層灰色粗砂層はこの遺跡一帯に厚く堆積する基盤層である。色調は異なるが西壁の第5層に対応する。調査区南端は敷地造成時の掘削を免れた区域で、本来の層が残る。

第49図の土層を見てみると、アカホヤに由来する第2層黄灰色土、第3層暗黄灰色土が厚く堆積し、その下層に粘性を帯び砂礫を含んだ黑灰色土層が見られる。第6層は明黄色砂礫層で、西壁の第5層、中央付近トレンチの第9層に対応する。

3) 縄文時代の遺構と遺物

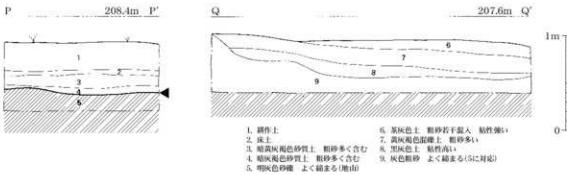
縄文時代包含層調査

A1Gr～B2Gr (第49図)

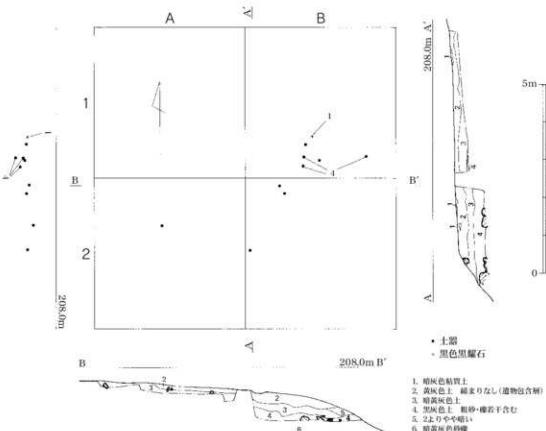
調査区南端にアカホヤに由来する黄灰色土層の堆積があり、中世遺構確認時に縄文時代の遺物が出土したため、4mメッシュでグリッド調査を行った。



第47図 下伊良原寺ノ谷遺跡遺構配置図 (1/200)

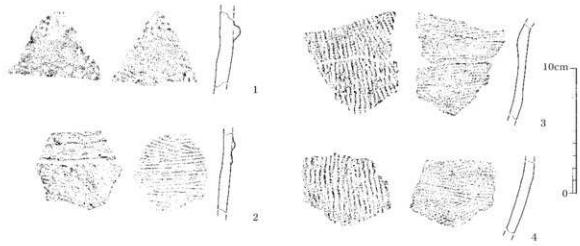


第48図 下伊良原寺ノ谷遺跡基本土層図 (1/40)



第49図 グリッド実測図 (1/100)

土層図を見ると、第2層黄灰色土が約20cmの厚さで堆積するが、これはアカホヤに由来する層である。遺物はこの層中からのみ出土した。第3層は2よりもやや暗い黄灰色土層で、土質等は変わらない。この層には遺物は含まれない。第4層黒灰色土層は粗砂や砾を若干含む。下伊良原原田ノ谷遺跡ではこの層中に縄文時代早期の遺物が含まれていたが、当遺跡では確認されなかった。遺物は少量出土したに過ぎない。土器はB1・B2Grから同一個体片が出土している。



第50図 縄文土器実測図 (1/3)

出土遺物

縄文土器 (図版28、第50図)

ここではグリッド出土遺物以外のものも併せて説明を行う。

1は早期初頭柏原式土器。瘤は直径10mm、高さ5mmで比較的大きなものである。調整は内外面とも薄い二枚貝条痕。器壁は厚く、10mmを測る。南側の灰褐色包含層出土。

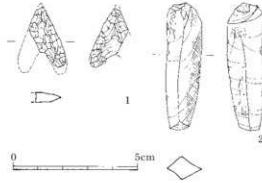
2は前期森B式土器。二条の隆起帯が見られる。

内外面とも明瞭な二枚貝条痕調整が見られる。中世遺構面出土。

3・4は同一個体である。内面に横方向の二枚貝条痕、外面は縦方向の粗い縄文。B2Gr出土。他に同一個体が数点出土している。

石器 (図版28、第51図)

1は西北九州産漆黒曜石製の石鎚。抉りが深く、丁寧な作りである。中世遺構面出土。2は漆黒曜石製の継長剥片。B1Gr出土。側縁に使用による微細剥離が見られる。



第51図 石器実測図 (2/3)

4) 中世の遺構と遺物

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図版21・22、第52図)

調査区の南西側に位置する掘立柱建物跡である。2号掘立柱建物跡と重複しており、1号掘立柱建物跡の方が新しい。他のビットや柱穴の土層を観察する限り数度の建て替えがあったと思われるが、確実に確認出来たのは1号と2号の2棟だけである。

主軸は地形に沿っており北東—南西方向を向く。柱間は桁行4間、梁行3間で、柱間は1間約200cm、桁長8.0m、梁長6.0m。P13-P14間の柱が欠けた構造となる。東側に半間分の縁を設ける。

P19、P24の南東側には2間分の柱穴が続いており、縁を延ばした構造となる。またP25はP1-P10の柱筋に沿っており、建物の構成要素の一部だった可能性もある。この部分まで含めると、桁長11.0m、梁長7.0mを測る。なお、P26は深さ10cmに過ぎず柱穴とはならないと判断した。

柱穴は平面円形を基本とし、径40cm~100cmと大きさにややばらつきがある。深さは50cm~60cmを測るが、中にはP5のように80cmに達するものもある。柱痕は径20cm~25cmで、P5・P7・P8などは柱が腐食し空洞化したままであった。またP5やP23など穴底に扁平石を据え置いたものもある。

図示できる遺物は無い。

2号掘立柱建物跡（図版22・23、第52図）

調査区の南西側に位置する掘立柱建物跡である。1号掘立柱建物跡と重複しており、こちらの方が古い。主軸方向を地形に沿って北東-南西にとり、3間四方の構造をとる。一辺の長さは6.2m。柱間は190cm~240cmと不揃いである。1号掘立柱建物跡と同じくP40-P41間の柱が欠落する。北側には軸に沿って3間分の柱列が見られるが、南北方向の柱筋が通らないので縁ではなく扉を想定している。

柱穴は平面円形を基本とし、径40cm~70cmを測る。1号掘立柱建物跡と比較すると若干小さい。深さは40cm~50cmを測る。柱痕が残るものでは直径20cmを測る。

出土遺物（図版28、第53図1）

1は備前焼の擂鉢である。内面には9本で1単位の擂目が見られる。外面暗灰色、内面紫灰色を呈す。

3号掘立柱建物跡（図版21、第54図）

調査区の西側に位置する掘立柱建物跡である。主軸を地形に沿って北東-南西方向にとり、桁行2間、梁行1間の小規模な建物となる。2号溝と重複しており、3号掘立柱建物跡のほうが新しい。柱間は210cmで統一され、桁長4.2m、梁長2.1mを測る。

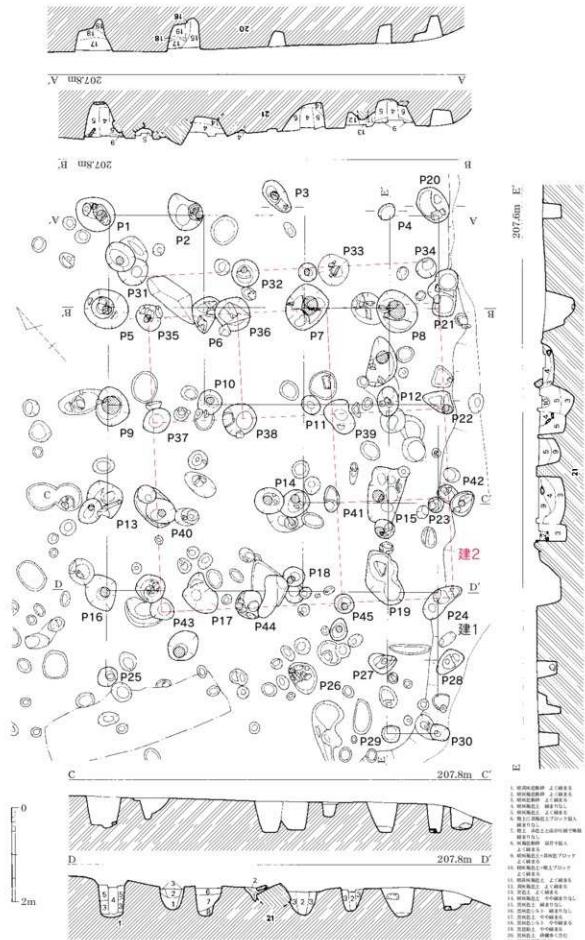
柱穴は径40cm~60cm、深さ20cm~50cmで、P1~P3とP6に柱痕が残る。柱痕の径は約20cm。P4~P6は内部に根固め石が見られる。

出土遺物は無い。

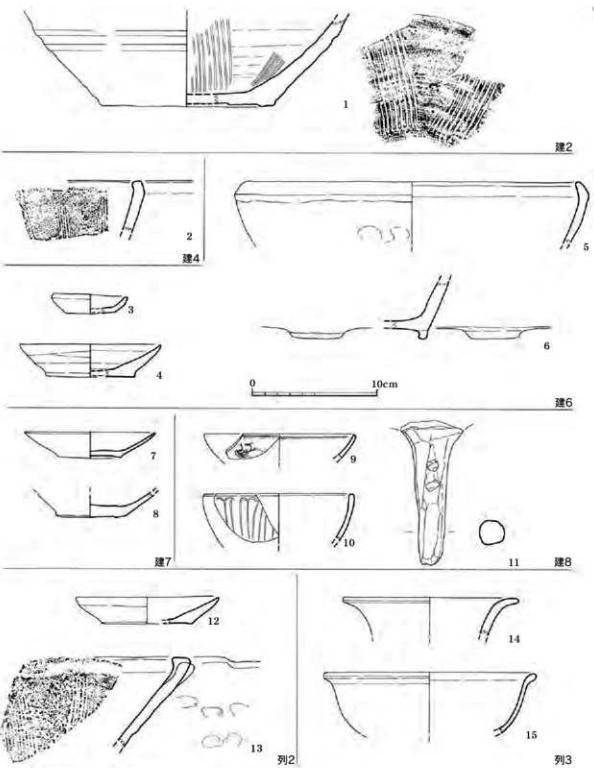
4号掘立柱建物跡（図版21・23、第55図）

調査区の北端に位置する掘立柱建物跡である。5号掘立柱建物跡と1号礎石建物とが重複する。この3棟はほぼ同規模のものであり、基本的に同じ目的の下で建て替えられたものである。柱穴が直接重複している訳ではないので、重複の先後関係は傍証に過ぎないが、後述するように1号礎石建物跡が礎石跡に埋め戻され整地されており、その後に4・5号掘立柱建物跡が建てられていること、また1号礎石建物跡と4号掘立柱建物跡が主軸方向を揃えており、近接した時期が想定されることから、建築時期は1号礎石建物跡-4号掘立柱建物跡-5号掘立柱建物跡の順を考えている。

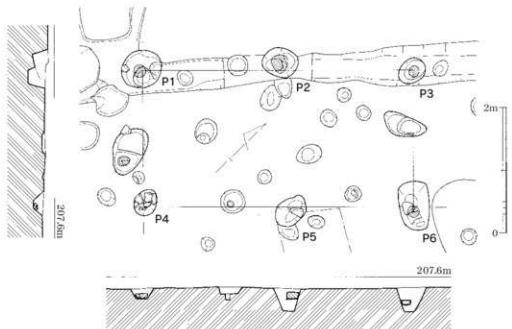
主軸を地形に沿って北東-南西方向にとり、桁行2間、梁行1間の小規模な建物となる。後述する6号掘立柱建物跡の桁筋と柱筋を通していることから、同時期の建物跡であることが推察される。



第52図 1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/80)



第53図 挿立柱建物跡・柱列出土器・陶器実測図 (1/3)



第54図 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

桁長4.7m、梁長3.6m。P3-P5間にはP4、P7-P9間にはP8があり、またP4-P8間にはP6が配置される。更にこのP6の西側には小さな焼土ピットが3つ見られる。

柱穴は平面円形で、直径40cm~60cm、深さ40cm~50cm。穴の内部には根固め石が見られるものもある。

出土遺物 (図版28、第53図2)

2は土師質の擂鉢。内面には4本1単位の擂目が見られる。色調は黄褐色を呈す。

5号掘立柱建物跡 (図版21・23、第55図)

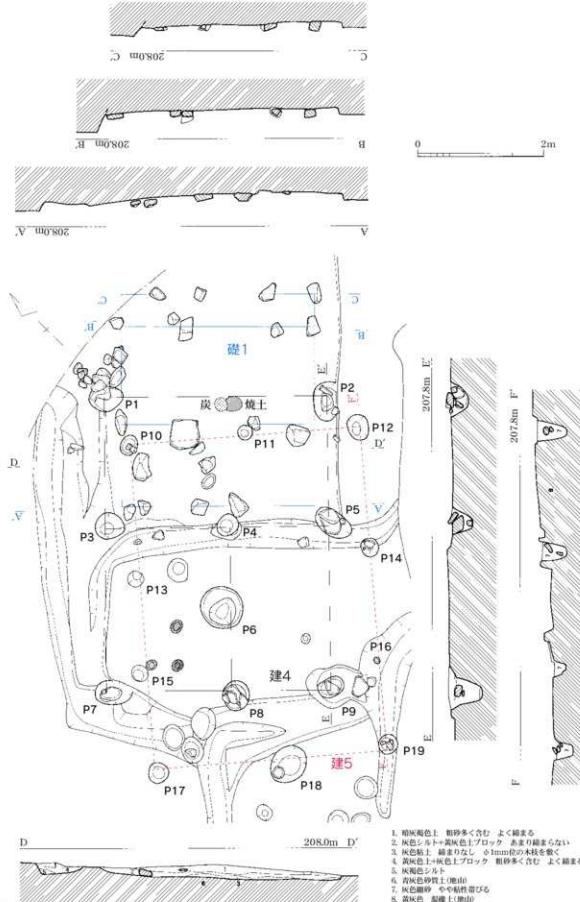
調査区の北端に位置し、4号掘立柱建物跡、1号礎石建物跡と重複する建物跡である。この3棟の建物跡の中では最も新しく位置付けられる。主軸を地形に沿って北東-南西方向にとり、桁行3間、梁行2間、柱間は160cm~210cmと揃っていない。桁長5.2m、梁長3.7mを測る。後述する8号掘立柱建物跡の桁筋と柱筋を通してのことから、同時期の建物跡と推察される。

柱穴は平面円形で、直径30cm~40cm、深さは20cm~50cm。内部には根固め石があるものもある。

図示出来る遺物は無い。

6号掘立柱建物跡 (図版21・24、第56図)

調査区中央に位置する掘立柱建物跡である。7号掘立柱建物跡、8号掘立柱建物跡と重複しており、規模や柱配置に差はあるものの、基本的に同じ建物配置設計の下に建て替えが行われたものである。柱穴の重複関係から建物の先後関係を導き出すことは出来ないが、6号掘立柱建物跡と7号掘立柱建物跡に付随する2号柱列の北東側が8号掘立柱建物跡に付随する4号溝に切られることか



第55図 4・5号掘立柱建物跡、1号礎石建物跡実測図 (1/60)

ら、少なくともこの3つの建物跡の中では8号掘立柱建物跡が最も時期が新しいものである。また1号掘立柱建物跡、4号掘立柱建物跡と筋が描っており、同時併存の可能性が高いものである。

建物は構造上二つに分かれており、西側は主軸方位を北東—南西にとる3間×4間の建物で、西側P5—P8間に1間分の張り出し部が付く。この建物の東側、P13—P18に付属して、2間×3間の主軸方位を北東—南西にとる建物がある。更にこの建物の東側P22—P24間に半間分の張り出しがあり、縁になると想われる。総合すると、建物規模は6.5間×4間となる。柱間の間隔は、西側の張り出し部で185cm、北側は210cm、東側の張り出し部で120cm。合計すると、東西方向に14.2m、南北方向に9.1mの大型掘立柱建物となる。ただしP9などは大きく筋をえた位置にあり、この建物に伴うもののか不安な面も残る。

柱穴は平面円形を意図して掘削されており、直径は40cm～100cm、深さは平均40cm。柱穴の内部には根固め石が見られるものもあるが、底面に扁平石を据えたものは見られなかった。柱穴によつては柱根が遺存しているものもあった。

なお、柱根の残るものについては樹種同定を行い、P4はイボタノキ属、P6はイスノキ、P8はクリ、P16はムクノキ、P26はサクラ属という結果を得た。全て広葉樹であり、針葉樹を使用することが多い当時の建築材にあって、この一帯の植生を顯著に反映したものと言える。またP26の部材においてはAMS法によるウイグルマッチング年代測定を行い、最外年輪で1538—1575calADの測定結果を得た。

出土遺物（図版28、第53図3・6）

3は土師器小皿である。口径5.8cm、器高1.5cm、底径4.0cm。4は土師器坏。底端部は明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。口縁部は薄く尖る。口径11.2cm、器高2.5cm、底径7.0cm。5は瓦質鉢である。口縁部は若干肥厚し内側へと短く屈曲する。口径26.6cm。6は土師質火鉢の底部片である。胎土に角閃石を多く含む。

7号掘立柱建物跡（図版21・24、第56図）

調査区中央に位置する掘立柱建物である。6号掘立柱建物跡、8号掘立柱建物跡と重複しており、8号掘立柱建物跡よりも古いと思われるが6号掘立柱建物跡との先後関係は明確ではない。

建物は主軸方位を北西—南東にとり、桁行4間、梁行2間の建物となる。P32—P34間にP33の棟持柱があり、西半部だけが総柱となる。また東端の柱列は筋が描わないとこがあり、復元に不安を憶える。柱間の間隔は、200cm～300cmとばらつきがある。桁長9.0m、梁長5.7m。

柱穴は径30cm～70cm、深さ50cm前後。根固め石を持つものも多く見られる。また中には柱根が遺存するものも見られる。P34の樹種同定を行った結果、オニグルミであるとの結果を得た。

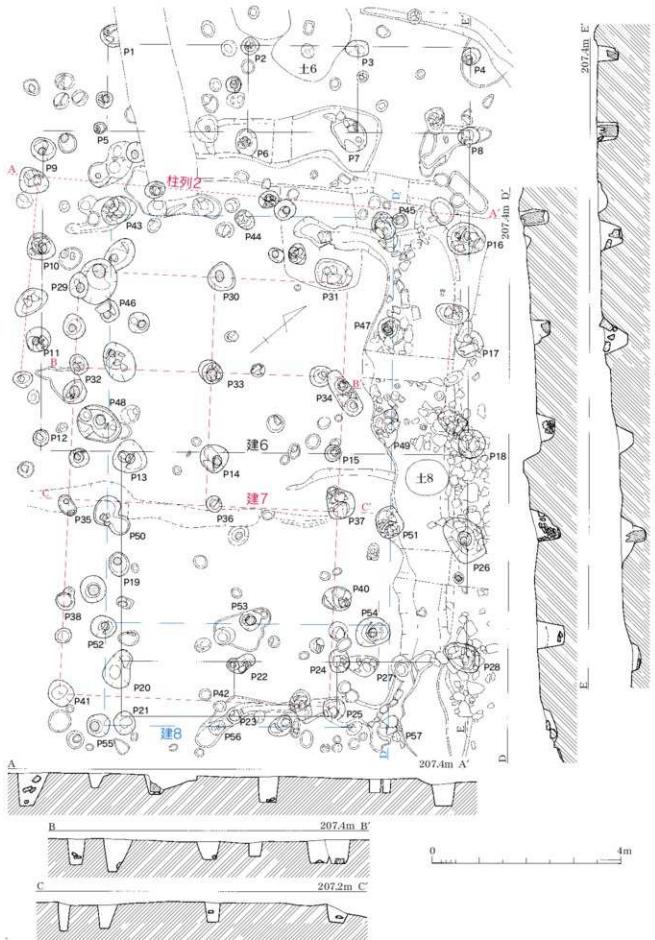
なお、この建物跡の西側を取り囲んで2号柱列がコ字状に配置される。

出土遺物（図版28、第53図7・8）

7・8は土師器坏である。どちらも底端部がシャープな棱を有し体部が直線的に開く。7は器壁が非常に薄い。口径10.3cm、底径5.0cm。8は底径5.4cm。

8号掘立柱建物跡（図版21・24、第56図）

調査区中央に位置する掘立柱建物跡である。先述するように、6号掘立柱建物跡、7号掘立柱建



第56图 6~8号掘立柱建筑、2号柱列实测图 (1/80)

物跡と重複しており、の中では最も時間が遅るものである。5号掘立柱建物跡と筋を揃えており、同時期の可能性が高い。

主軸方位を北西—南東方向にとり、桁行5間、梁行2間の建物となる。P52—P54間にP53がある。柱間の間隔は210cm～240cmを測り、多少ばらつきがある。桁長10.8m、梁長6.0m。

柱穴は径50cm～80cm、深さ50cm前後。根固め石を持つものが多く見られる。また中には柱根が遺存するものもある。P45の樹種同定を行った結果、サクラ属であるとの結果を得た。

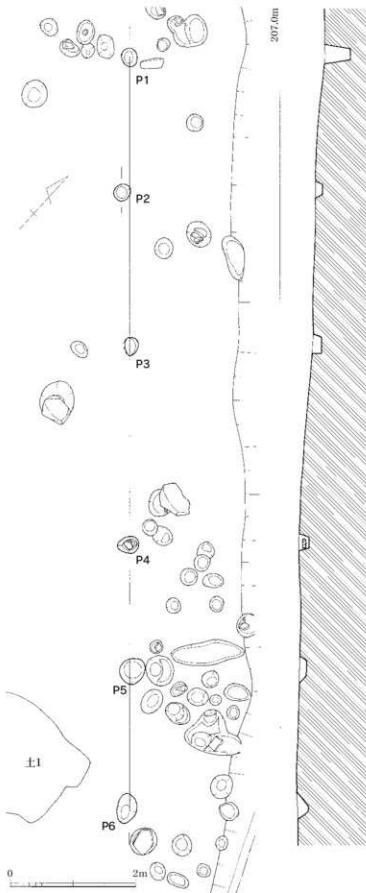
出土遺物(図版28、第53図9～11)

9は外面に唐草文をもつ蓮子形の染付碗。口径12.0cm。10は細連弁文の青磁碗。口径12.0cm。11は瓦質三足鍋の足部であろう。側面の二ヶ所に刺突による孔が見られる。

礎石建物跡

1号礎石建物跡(図版21・23、第55図)

調査区の北端に位置し、4号掘立柱建物跡、5号掘立柱建物跡と重複する建物跡である。北方向に縁を持ち、桁長3.4m、梁長3.1mの規模になる。礎石には20cm～40cmの不整形の割石を使用しており、扁平石はほとんど使われていない。礎石を設置するに当たっては柱穴状の掘り込みを行わず、敷地の範囲を広く平坦に掘り下げ礎石を置いただけのものである。



第57図 1号柱列実測図(1/60)

建物のほぼ中央に当たる所には焼面と炭の広がりが確認され、炉として使用されたことが推察される。

なお、この礎石建物は廃絶後に埋め戻して整地を行っている。地表面に径1mm程の小枝を敷きつめ、灰色シルトと黄灰色土で覆い、その上に粗砂を多く含んだ暗灰褐色土を敷いて締め固めている。小枝は湿気抜きを意図したものであろう。なお、この整地層中からは遺物は出土していない。

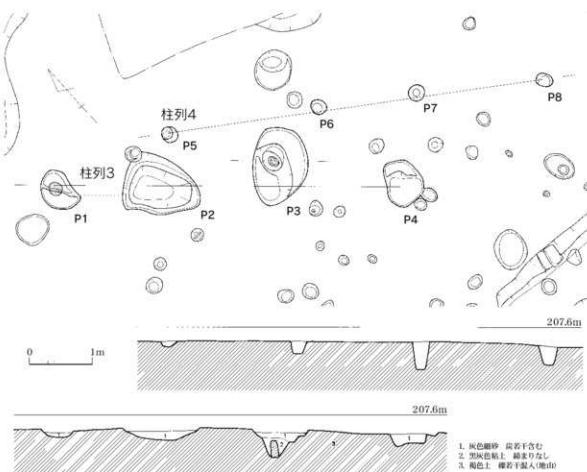
柱列

1号柱列（図版21、第57図）

調査区南端に位置する柱列である。計6つの柱穴があり、筋を描えて直線的に並ぶ。主軸を北東—南西にとり、柱穴の間隔は220cm～310cm。柱穴の径は20m～40cm、深さは15cm～50cm。穴内部に根固め石を持つものもある。図示できる出土遺物は無い。

2号柱列（図版21・24、第56図）

調査区中央に位置する柱列である。先述の7号掘立柱建物跡の西側に位置し、この建物の西側を取り囲むようにコ字状に配置されることから、この7号掘立柱建物跡に付属する埠として機能したものと考えられる。



第58図 3・4号柱列実測図 (1/60)

柱間の間隔は190cm～260cm。柱穴の径は40cm～60cm、深さは50cm前後。柱穴の内部は根固め石があるものがあり、また柱根が残るものも見られる。そのうちP58については樹種同定を行い、サクラ属との測定結果を得た。

出土遺物（図版28、第53図12・13）

12は土師器壺である。底端部は明瞭な稜を有し体部は直線的に開く。口径11.2cm、器高2.1cm、底径7.2cm。13は瓦質捕鉢である。内面の描目は10本一単位の描目が見られる。

3号柱列（図版21、第58図）

調査区北東側に位置する柱列である。P1～P4の4つの柱穴からなり、北西～南東に直線的に並ぶ。柱穴の位置も筋が通らず径も不揃いであることから柱列とすることに躊躇したが、P3で柱根が出土したこともあり、柱列として報告する次第である。P1は直径70cm、深さ10cm。P3は直径120cm、深さ40cm。

出土遺物（図版28、第53図14・15）

14は土師質焼成で、花瓶であろうか。口縁部は大きく開き端部は丸くおさめる。口径14.0cm。15は無文の青磁碗。口縁部は端反りとなり端部が肥厚する。口径16.8cm。

4号柱列（図版21、第58図）

調査区北東側に位置する柱列である。P5～P8の4つの柱穴からなり、北西～南東に直線的に並ぶ。直径30cm、深さ10cm～50cm。

土坑

1号土坑（図版25、第59図）

調査区南側に位置する土坑である。平面形は円形を呈し、直径約200cmを測る。中央には巨石が一個あり、そのため穴底まで完掘は出来なかった。この土坑は整地の際、巨石を埋めて平坦面を確保するために掘削されたものと思われる。覆土には焼土や炭が含まれる。

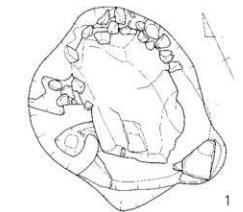
図示できる遺物は出土していない。

2号土坑（図版25、第59図）

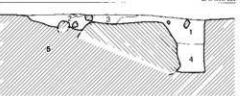
調査区西端に位置する土坑である。不整形を呈し、長軸210cm、短軸160cmを測る。床面はほぼ平坦に掘削されており、深さは20cm。覆土は灰褐色土で粗砂やマンガンを多く含む。遺物は全く出土していない。

3号土坑（図版25、第59図）

調査区西側に位置する土坑である。4号土坑と重複しており、3号土坑が4号土坑を切る。平面形は梢円形を呈し、長軸160cm、短軸90cm。坑底は長軸110cm、短軸70cmの大きさで平坦面をなし、深さは40cm、壁の立ち上がりは緩やかである。内部からは円礫がいくつか見つかったが、規則的に配置された状況ではない。覆土は灰褐色土を基本とし、炭が若干含まれる。



206.9m



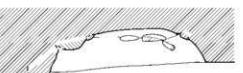
1. 黄褐色土+灰色粘質土 粗砂若干含む
2. 黑褐色土(地山)
3. 黑褐色土(地盤)
4. 灰褐色粘質土 粗砂若干含む
5. 黄褐色土 粗砂若干含む(地山)



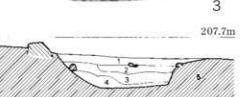
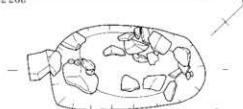
207.7m



1. 深褐色土 粗砂多く含む マンガン多い
2. 黑褐色土 粗砂若干含む
3. 深灰褐色粗砂 粗砂多く含む(地山)



207.7m



1. 姫茶褐色土 黄褐色人
2. 姫茶褐色土 粗砂多く含む 黄褐色人
3. 黑褐色土 黄褐色人
4. 灰褐色土 粗砂多く含む
5. 灰色粗砂(地)

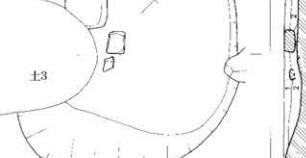
3 207.7m



0 2m

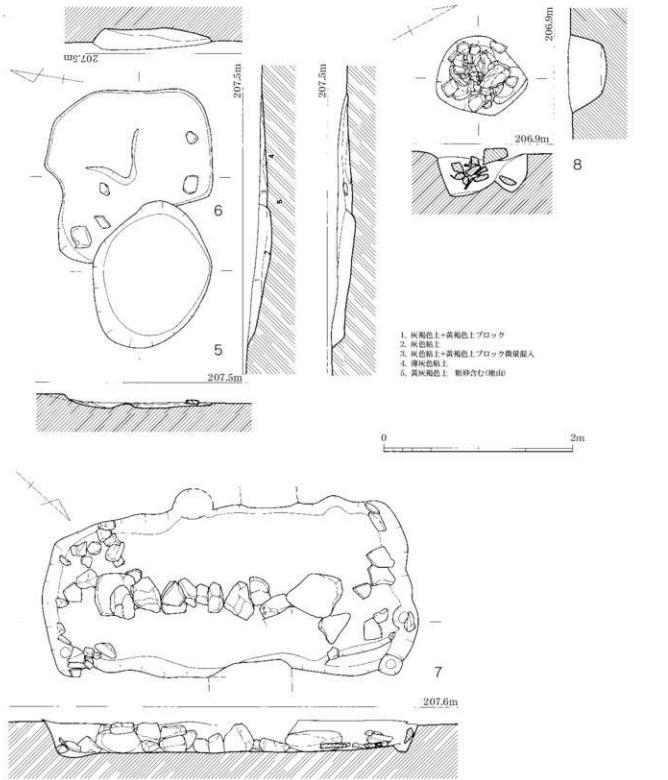


207.6m

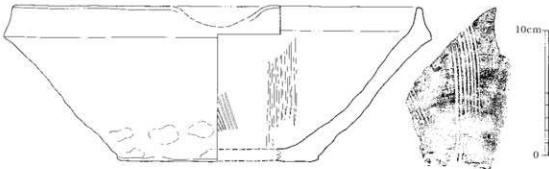


1. 姫茶褐色土 黄褐色人
2. 姫茶褐色土 粗砂多く含む 黄褐色人
3. 姫茶褐色土 粗砂多く含む 黄褐色人
4. 灰色粗砂(地)

第59図 1~4号土坑実測図 (1/40)



第60図 5~8号土坑実測図 (1/40)



第61図 土坑出土陶器実測図（1/3）

4号土坑（国版25、第59図）

調査区西側に位置する土坑である。3号土坑と重複しており、これに切られる。平面形は隅丸方形で、長軸280cm、短軸240cmを測る。坑底はほぼ水平で、深さは20cm。覆土は灰褐色土を基本とし、炭が混入する。

5号土坑（国版26、第60図）

調査区中央やや西寄りに位置する土坑である。6号土坑と重複しており、これを切る。平面形は梢円形を呈し、長軸160cm、短軸120cm。床面はほぼ水平で深さは20cm。覆土は灰褐色土。

6号土坑（国版26、第60図）

調査区中央やや西寄りに位置する土坑である。5号土坑と重複しており、これに切られる。平面形は不整形形を呈し、長軸180cm、短軸170cmを測る。床面はほぼ水平で、深さは10cm程度に過ぎない。覆土は灰色粘土を基本とする。

7号土坑（国版26、第60図）

調査区中央に位置する土坑である。7号掘立柱建物跡、8号溝と重複しており、これらに切られる。平面形は長方形を呈し、長軸390cm、短軸180cmを測る。床面はほぼ水平で、深さは30cm。坑底の中央からは、土坑の主軸に沿って列状に配置した石列が見つかっている。遺存状況が良くないので確かなことは言えないが、東側に面を合わせて並べているように見える。覆土は灰褐色土。
出土遺物（第61図）

1は備前焼播鉢である。口縁部は薄く上方に立つ。内面の播目は7本を一単位とする。口径32.6cm、器高12.2cm、底径16.0cm。

8号土坑（国版26、第60図）

調査区中央に位置する土坑である。8号溝と重複しており、これに切られる。平面形は直径80cmの円形をなす。深さは40cm。北側には直径30cmのピットが1基ある。坑の内部は疊で充填されていた。

溝

1号溝（第62図）

調査区西端で検出した溝である。長さ12m、幅は1.3m前後。北側は削平のため消滅し、西側は調査区外へと続く。山側から浸入する水が敷地内に入るのを防ぐために敷地の山際に掘削されたものである。深さは20cm。この1号溝に直行して数条の小溝が延びており、2号溝に繋がっているが、1号溝の水を2号溝を通じて排水するためのものであろう。

2号溝（第62図）

調査区の北東側で検出した溝である。北東—南西方向に40cm~70cmの幅で14mほど直線的に延びており、北側は南東方向へと直角に折れて3mほど延びる。幅は1m。先端は4号溝に切られる。深さは南側で10cm、北側で20cm。7号掘立柱建物跡を囲むようにして掘削されており、この建物と同時期であろう。覆土は暗灰褐色土で粗砂が多く含まれる。

3号溝（第62図）

調査区北側で検出した溝である。北東—南西方向に1mの幅で6mほど延びており、南端は4号溝に切られ、北端は13号溝に接続する。この接続部は掘り直しが行われたようである。排水目的以外にも、4・5号掘立柱建物跡や1号礎石建物のある敷地と3・4号柱列がある敷地とを区する区画溝としての機能も果たしている。深さは20cm。

出土遺物（第63図1）

1は土師質の花瓶である。口径17.0cm。

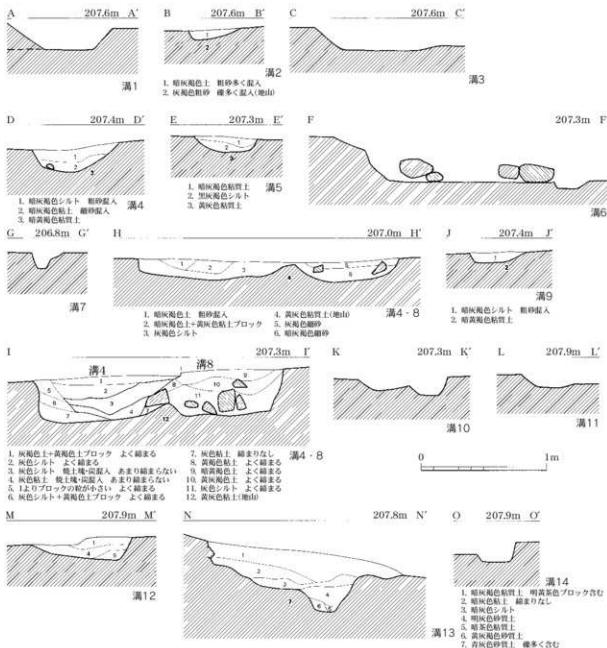
4号溝（第62図）

調査区北側で検出した溝である。北西—南東方向へ幅1mで15mほど延びる。西側は南西方向へ3mほど延び、東端は谷部へ注ぎ込む。深さは30cm。後述する8号溝と重複しており、8号溝埋没後に掘削されたものである。また9号溝と軸を描えて延びており、これを切ることから、9号溝の掘り直しでもあることを判る。I—I'断面を見ると、覆土は粘土やシルト質の土層であり、當時灌水していたことが窺える。また第3・4層は炭や焼土を多量に含んでおり、恐らく火災により家屋が焼失したであろうことが推測される。また少なくとも掘り直しが行われたことも判る。

6号掘立柱建物跡を囲むように掘削されており、この建物跡と同時期であろう。溝内からは多数の甕が見つかったが、底面からは浮いた状態であり埋没過程で投げ込まれたものであろう。

出土遺物（図版28・29、第63図2~13）

2・3は染付甕である。2は口縁部内外に一条の圈線を巡らせる。3は内面見込みに蓮華を描く。軸は高台置付以外に施釉される。高台径5.0cm。4は土師質で、恐らく蓋であろう。全面ナデ調整。径19.0cm。5は常滑燒窯の嗣部片である。須恵質で明灰色を呈し、輪轍目が明瞭にられる。6・7は瓦質鉢。6は口縁部が内側に肥厚する。7は体部が直線的に開き、端部を面取りする。口径31.0cm。8は土師質焼成で、器台状のものであろうか。口径13.0cm。9は瓦質擂鉢である。口縁部付近が上に立ち上がり、端部はわずかに肥厚する。10は土師質土鍋である。口縁部が外側に短く屈曲し玉縁状に肥厚する。口縁部と内面はナデ、外表面はヘラケズリ。外表面には部分的にコゲが付着



第62図 1~14号溝断面実測図 (1/30)

する。11は土師質火鉢である。胴部は直立し、口縁部は短く水平に開き、端部は上方に立ち上がる。胴部の外面には多重沈線を巡らせる。胎土に砂粒をほとんど含まず色調は黒色を呈す。口径36.0cm。12は瓦質の火鉢である。胴部は丸味を帯び口縁部が短く立ち上がり、内面に棱をもつ。口縁端部は外側に肥厚する。口縁部内外面ともナデ、胴部内面は横ハケ目、外面は横ミラミガキ。外面の口縁部下に部分的に刻目を施す。口径24.6cm。13は瓦質花瓶である。体部は小さな球形で、脚部は長く伸びる。体部外面には沈線とスタンプによる文様帶がある。器壁は厚く、1cmを超える部分もある。体部径6.0cm、裾部径9.3cm。

5号溝（第62図）

調査区中央付近で検出した溝である。北東—南西方向に延びており、幅70cm、深さ20cm、長さ9m。北端は4号溝に切られる。8号掘立柱建物跡を囲むように掘削されており、この建物跡と同時期であろう。

出土遺物（第63図14）

14は土師器壺の底部である。底径7.0cm。

6号溝（第62図）

調査区中央付近で検出した溝である。東西方向へ7mほど延びており、西側は9号溝に切られ、東端は谷部と繋がる。幅は50cm～2mと一定しない。深さは30cm。溝底からは30cm前後の円礫が10数個見つかった。

出土遺物（第63図15）

15は近世の擂鉢である。口縁部の肥厚は小さく、器壁も全体的に薄い。

7号溝（第62図）

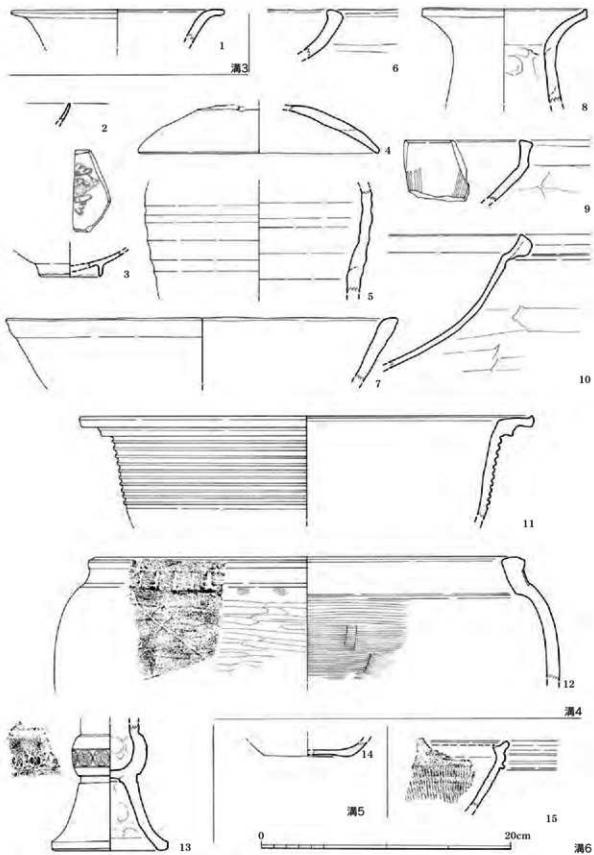
調査区東側で検出した溝である。北東—南西方向に延びており、長さ5m、幅40cm、深さ20cm。南端は4号溝に接続する。

8号溝（図版27、第62図）

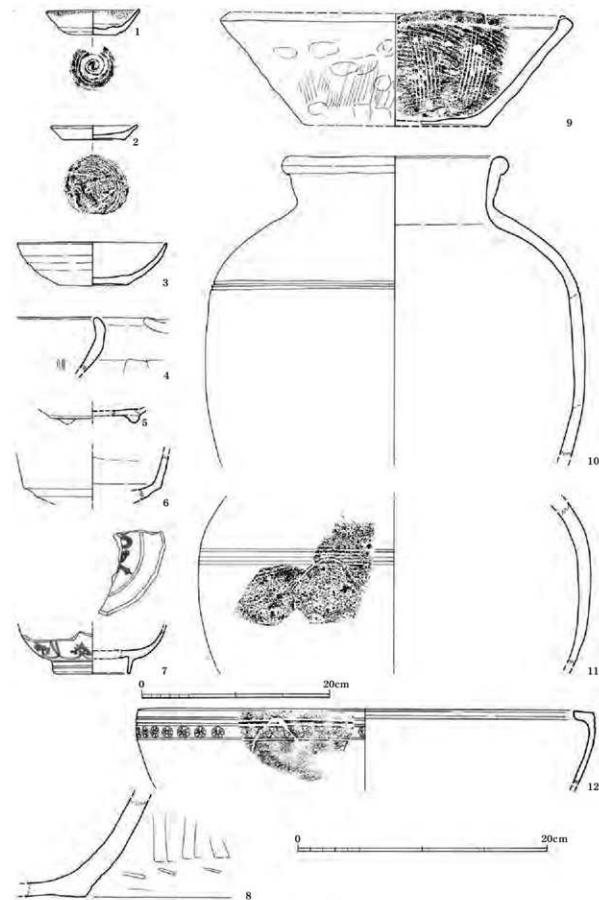
調査区中央付近で検出した溝である。4号溝と重複しており、これに切られる。北西—南東方向へ12mほど延びており、西端は直角に折れて南西方向へ2mほど延びる。また東端から2mの位置に、南北方向へと2mほど延びる小溝が接続する。幅は一定しないが、北西—南東溝の中央付近で2m、東端で1m、西端の南西方向に延びる溝で50cm。深さは最深部で40cm。北西—南北溝の中央付近からは礫が多数見つかったが、埋没過程で投げ込まれたものであろう。覆土は暗黄褐色土や灰色シルトからなり、比較的縮まっている。7号掘立柱建物跡を囲むように掘削されており、これと同時期であろう。

出土遺物（図版28・29、第64図）

1・2は土師器小皿である。1はやや深みのある小皿、底部には橈轆ヘラケズリが見られ、また口縁部内面には油煙が付着する。口径7.6cm、器高2.0cm、底径3.7cm。2は口径6.9cm、器高1.2cm、底径5.0cm。3は土師器壺である。口径11.8cm、器高3.4cm、底径5.2cm。4は土師質擂鉢である。器壁は薄く、口縁部は内側へ湾曲する。色調は黒色～黒灰色を呈す。5は土師質香炉の底部片。丸く小さな足が付く。6は青磁香炉か。屈曲部に凹線を巡らせたような形状が特徴的である。内面は露胎となる。7は高台部が高く、端反りになるとと思われる染付碗。内面見込みと外側に唐草文を描く。8は備前焼窯の底部か。外側には工具による縱方向のナデ痕跡が見られる。9は瓦質擂鉢である。端部は内側に肥厚し、内側の口縁部下には一条の沈線を巡らせる。擂目は8本一単位。口径28cm、器高8.8cm、底径14.4cm。10・11は備前焼の壺で、接合しないが同一個体である。口縁部は短く直立し、端部は外側に丸く肥厚する。肩部には二条の沈線が巡らされる。11にはヘラ書き弧文が見られる。口径18.0cm、肩部径30.0cm。12は土師質の火鉢である。器壁は薄く、口縁部を内側



第63図 3～6号溝出土土器・陶器実測図(1/3)



第64図 8号溝出土土器・陶磁器実測図 (12:1/4、他1/3)

に屈曲させる。外面の口縁部下には沈線とスタンプ文による文様帯を巡らせる。口径48.6cm。

9号溝（図版27、第62図）

調査区中央付近で検出した溝である。北西—南東方向に延びており、幅50cm、長さ13m、深さ10cm。西端と東端が4号溝に切られる。4号溝と軸を描えていることから、4号溝に先行して掘削され、9号溝の掘り直しとして4号溝が掘削されたことが窺える。

出土遺物（図版29、第65図1～6）

1は土師器小皿である。口径6.6cm、器高1.3cm、底径4.8cm。2は外面を全面青色で塗る磁器碗。口径6.6cm。3は白磁碗の底部。高台部のみ露胎となる。高台径4.6cm。4染付碗の底部である。内面見込と高台部外面に團文を巡らせる。高台径5.2cm。5は瓦質火鉢である。口縁部は直立し、上端部はわずかに外傾する面をなす。外面の口縁部下には二条の小さな突帯を巡らせ、その間に梅花文のスタンプを行う。6は無文の瓦質火鉢である。内外面とも横方向の粗いヘラミガギが見られる。口径99cm。

10号溝（第62図）

調査区北東で検出した溝である。北西—南東へと10mほど延び、東側は南西方向へと折れて3mほど延びる。南側は6号溝に切られる。北側は13号溝と重複し、土層観察では先後関係は認められなかったので、同時併存の可能性も十分考えられる。深さは15cm程度。3・4号柱列のある敷地を取り囲んでおり、この敷地の排水兼区画溝として機能していたものであろう。

11号溝（第62図）

調査区北端で検出した溝である。北東—南西方向に5mほど延び、南側は南東へと折れて2mほど延びる。北端は調査区外へと続き、南端は2号溝に切られる。幅40cm、深さ10cm。4号掘立柱建物跡を閉むように掘削されていることから、これと同時期であろう。

12号溝（第62図）

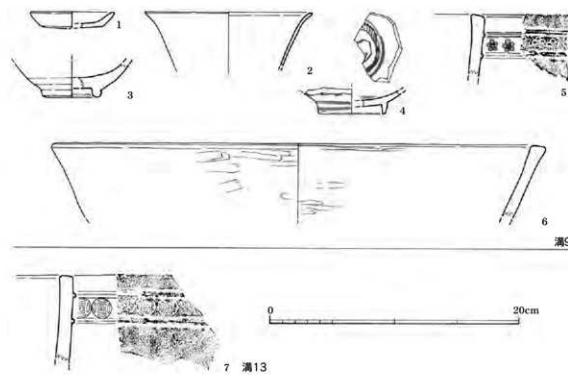
調査区北端で検出した溝である。北西—南東方向に5mほど延びる。北端は11号溝に切られ、南端は3号溝に切られる。幅は40cm～70cm、深さ20cm。1号礫石建物跡の排水兼区画溝として掘削されたものであろう。

13号溝（図版27、第62図）

調査区北端で検出した溝である。北西—南東方向へと延びており、長さ16m、幅1.6m、深さ50cm。西端は調査区外へと続き、東端は谷部へと接続する。覆土は粘質土やシルトが堆積しており、周囲はかなり湿润な状態であったことが窺える。

出土遺物（図版29、第65図7）

7は瓦質火鉢である。口縁部は直立し、上端部は水平面をなす。外面の口縁部下には二条の小さな突帯を巡らせ、その間にスタンプを行う。



第65図 9・13号溝出土土器・陶器実測図（1/3）

14号溝（第62図）

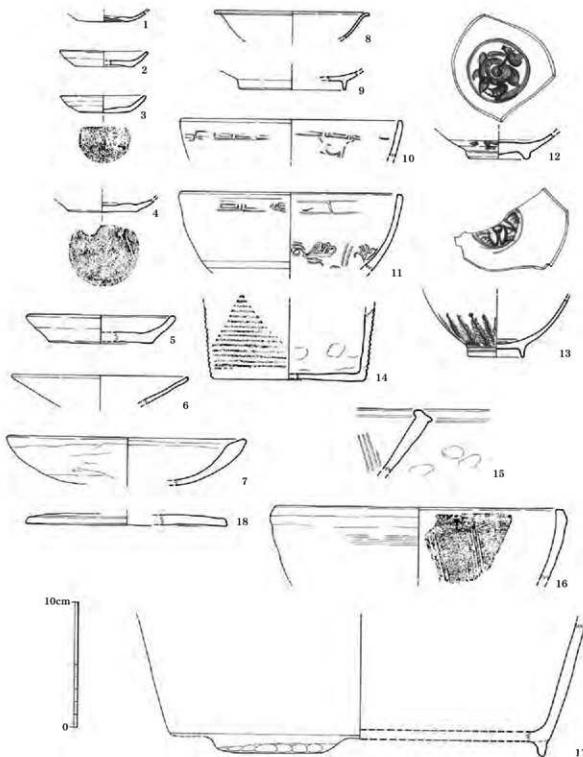
調査区北東端で検出した溝である。北西-南東方向へと延びており、長さ 6m、幅30cm、深さ 15cm。西側は13号溝に切られ、東側は削平のため途切れる。

ピット出土遺物（図版29、第66図）

1～4は土師器小皿である。1は器壁が非常に薄い。底径4.1cm。2は口径7.0cm、器高1.2cm、底径4.6cm。3は口径6.8cm、器高1.4cm、底径4.2cm。4は底径5.6cm。5・6は土師器壺である。5は口径11.8cm、器高2.2cm、底径8.4cm。6は器壁が薄く、体部が直線的に開く。口径14.0cm。7は或いは蓋かもしれない。口縁部がかなり肥厚する。内面ナデ、外縁横ヘラケズリ。口径19.0cm。

8・9は白磁である。8は端反りの白磁碗。口径12.4cm。9は低く径の大きな高台となる。高台豊付のみ露胎。径8.6cm。10・11は同一個体の青磁碗である。口縁部下には内外面とも雷文帯を施文し、内面には草花文を施文する。口径17.6cm。12・13は染付碗である。12は低平な高台をもつ。内面見込みには牡丹を描く。発色が悪く施文は青黒色を呈す。高台豊付のみ露胎となる。高台径2.2cm。13は蓮子碗。外面に芭蕉葉文、内面見込みは蓮花文か。高台部豊付は露胎となる。

14は瓦質に近い土師質の香炉である。外面は多量沈線を巡らせる。底径12.4cm。15は土師質擂鉢である。口縁部は内外につまみ出される。16は瓦質の擂鉢。擂目は5本一単位か。外面にはナデ消す前の横ハケ目が残る。小片であり復元に不安が残るが、口径23cm。17は瓦質火鉢である。内外面ともナデ調整。底径30.2cm。18は土師質の蓋である。円盤状を呈す。径16.0cm。



第66図 ピット出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

包含層等出土遺物 (図版29、第67図)

1は土師器小皿である。口径6.8cm、器高1.2cm、底径4.6cm。2～6は土師器坏である。2は底径7.2cm。3は深みのある体部となる。底径6.8cm、口径は11cm程度になろう。4～6は体部が大きく開く坏である。4は器壁が非常に薄い。口径11.0cm、器高2.2cm、底径4.6cm。5は口径

12.4cm、器高2.8cm、底径6.2cm。6も器壁が薄い。口径16.1cm、器高3.0cm、底径8.6cm。

7・8は白磁である。7は口縁部壊反りとなるもの。8は無高台の小皿であろう。体部下半から底部まで露胎。底径3.6cm。9は小型の天目茶碗である。口径10.0cm、器高4.0cm、底径3.6cm。10は外面に雷文帯を巡らせる青磁碗である。口径17.2cm。

11は鉄袖の流し掛けを行なう陶器蓋である。ツマミの径は2.0cm。12は土師質香炉の底部片。底径9.0cm。13は瓦質で、壺であろうか。ナデやヘラケズリの棱線が残る粗製品である。14は須恵質で壺か。15・16は土師質の鉢である。15は外面にナデの棱線が残る。16は口縁部が肥厚し上端が水平面をもつ。内面ナデ、外面ヘラミガキ。17・18は擂鉢である。17は須恵質焼成で内面には横位のハケ目が見られる。擂目は7本一単位。底径10.0cm。18は土師質だが外面に炭素を吸着させて黒色とする。口縁部の器壁がやや厚く、内端をつまみ出している。擂目は5本一単位である。胎土に角閃石が多い。口径33.4cm。19は備前焼の壺である。口縁部は丸く肥厚する。胴部の内面には工具痕が残る。

20~26は火鉢である。20は瓦質で口縁部は素口縁となる。外面に横方向のヘラミガキが見られる。21は口縁端部を外側に肥厚させる。土師質に近い瓦質焼成。22は土師質焼成。口縁端部内面と外面の口縁部下に低い突帯を巡らせ、外面は製造撲文のスタンプを施す。23は外面に二条の突帯を巡らせ、その間に雷文のスタンプを施す。24は底部片。丸味を帯びた足である。25は土師質焼成で浅い鉢形のものである。口縁部を強く内側に湾曲させる。端部は面をなす。口径35.0cm。26は土師質焼成で端部を内外へとつまみ出す。外面の口縁部下には菊花文のスタンプを行う。口径47.0cm。

土製品・石製品・金属製品（図版29、第68図）

1は管状土錐である。長さ5.5cm、径1.25cm、孔径3mm。灰褐色土包含層出土。2は土鉢である。大きさは3cm程度。孔径4mm。ピット出土。

3・4は砥石である。3は泥石製で2面使用。8号溝出土。4は片岩製で3面使用。上面は使用による減りが顕著である。4号溝出土。

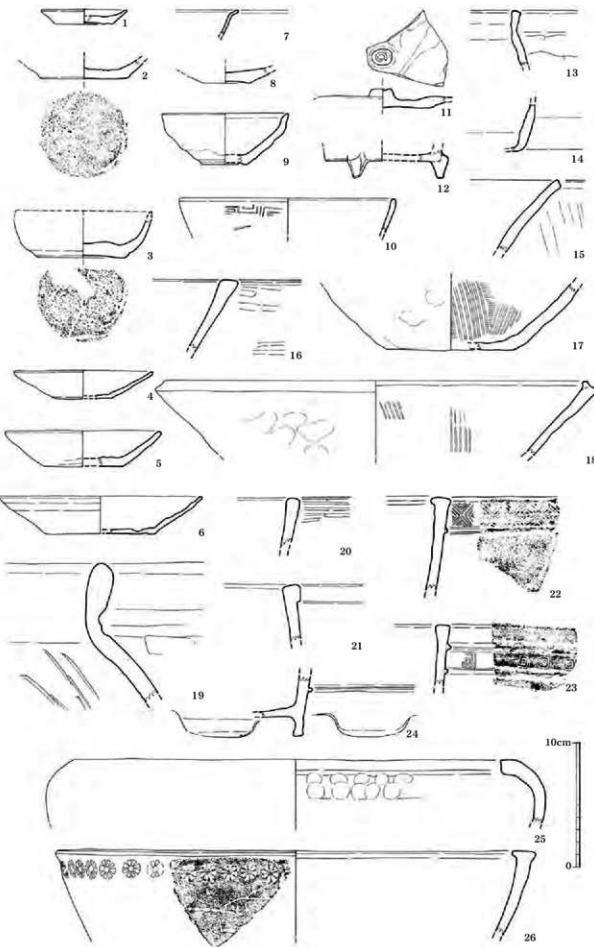
5・6は石臼である。5は茶白の上白である。二方向に把手孔があり、孔の周囲には方形の隆起部を持つ。擂目は完全に消滅する。全体的に風化が著しく工具痕はほとんど見られない。直径21cm、高さ14cm。9号溝出土。6は上白片である。擂目は完全に消滅する。8号溝出土。

7は青銅製品である。長さ5.5cm、断面は楕円形に近い。ピット出土。8~18は鉄釘である。8は完形品で長さ5.5cm。4号土坑出土。9・10・12・16・17はピット出土。11は6号溝出土。13は4号土坑出土。14・15は灰褐色包含層出土。18は鉄鏃または刀子の茎部であろうか。6号溝出土。19は形状が鉄釘に近いが、長さ12cmと長過ぎる。ピット出土。20は扁平な断面の棒状鉄製品。遺構面出土。

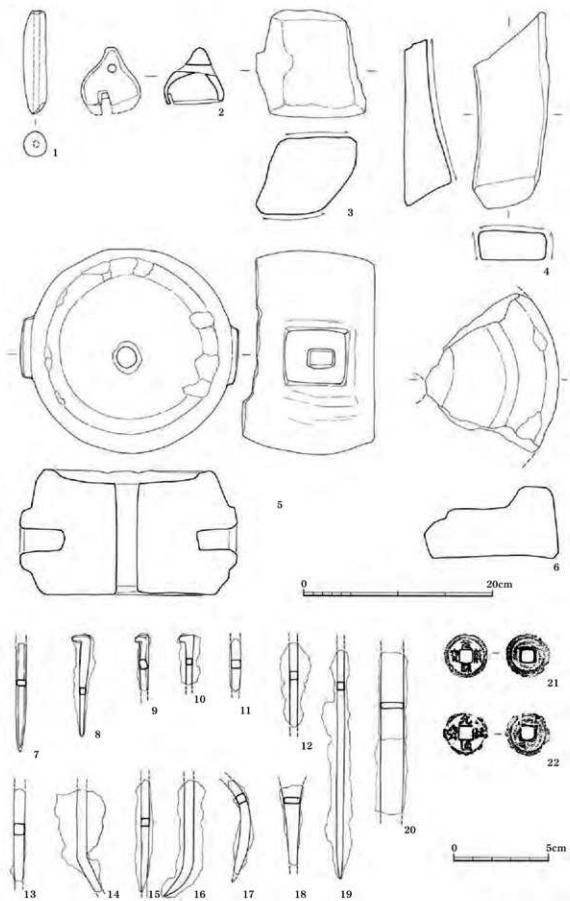
21・22は銅鏡である。どちらも北宋1023年初鑄の天聖元寶。21は篆書体、22は行書体。

柱材（図版30、第69図）

1は6号掘立柱建物跡P4から出土した柱材である。現存で長さ30.2cm、直径11.0cm。腐食が進んでいるので、本来はもっと径の大きな部材だったと思われる。基部には加工痕が残る。樹種同定



第67図 包含層等出土土器・陶磁器実測図 (1/3)



第68図 土製品・石製品・金属製品実測図 (5・6:1/4、他:1/2)

結果はイボタノキ属。2は6号掘立柱建物跡P6出土。長さ27.8cm、径21.5cm。外側の腐食や全体的な収縮が著しい。樹種同定結果はイヌノキ。3は6号掘立柱建物跡P16出土。長さ24.0cm、径23.0cm。腐食が著しく、本来の径の半分以下しか遺存しない。樹種同定結果はムクノキ。4は6号掘立柱建物跡P26出土。長さ43.1cm、径19.2cm。腐食が進み中央部は空洞化するが、外皮が遺存していたためAMS法によるウイグルマッチング年代測定を行った。その結果、最外年輪（1年輪目）で1538–1575calAD (63.2%)、17年輪目で1523–1604calAD (89.1%) の測定結果を得た。樹種はサクラ属。基部に加工痕が残る。5は7号掘立柱建物跡P34出土。長さ21.2cm、径22.1cm。腐食が進み中央部が空洞となる。外側は部分的に残っており、加工痕が認められる。樹種同定の結果はオニグルミ。6は2号柱列P58出土。長さ28.5cm、径30.4cm。腐食が進む。樹種同定の結果はサクラ属。7は8号掘立柱建物跡P45出土。長さ54.6cm、径23.6cm。基部に加工痕が残る。樹種同定の結果はサクラ属。8は6号掘立柱建物跡P8出土。長さ40cm、径24.2cm。基部に加工痕が残る。腐食が進み中心部はほとんど残っていない。樹種同定の結果はクリ。

5) 小結

下伊良原寺ノ谷遺跡で検出した遺構は、縄文時代の包含層1箇所、中・近世の掘立柱建物跡8棟、礎石建物跡1棟、土坑7基、柱列4条、溝14条である。

縄文時代の遺物は非常に少ないが、それでも早期初頭柏原式土器、前期前半轟B式土器の出土が見られた。特に柏原式土器は伊良原地区では比較的多く出土する土器であり、当時の人々の行動範囲を検討する上で重要な資料となる。

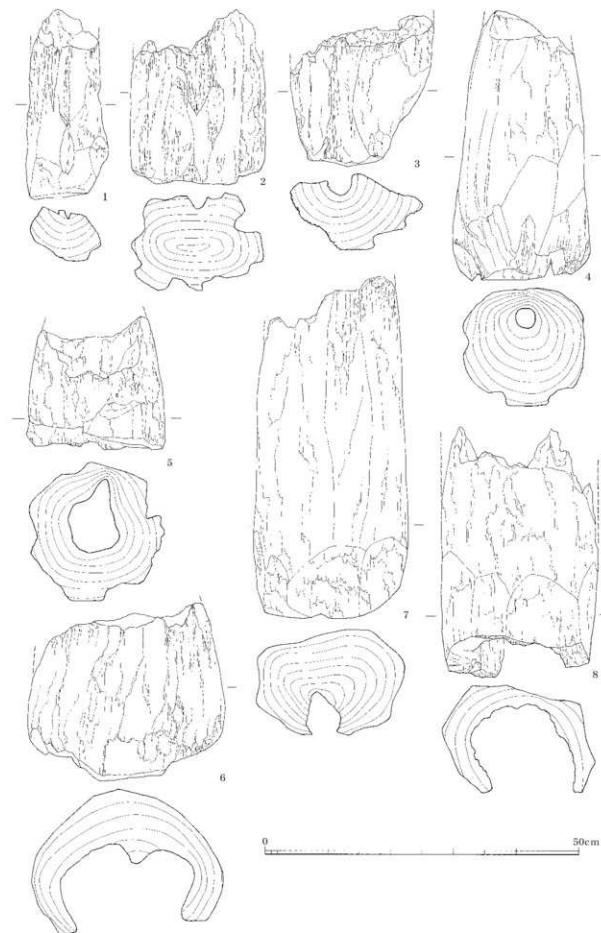
下伊良原寺ノ谷遺跡の主要となる遺構は、中世後期～近世初頭の建物群と区画溝である。山間の狭小な平坦地にはおよそ相応しくない大型の掘立柱建物跡群の存在に、調査開始時には多少困惑を感じたが、『京都都誌』に記された記述から瑞應寺という寺院跡であることが判明した。残念ながら原史料は現存しないが、以下に『京都都誌』に記載された内容を転載する。

瑞應寺 伊良原村大字下伊良原にあり、もと大寺なりき、貞享年中より、小倉安国寺の末寺となる、この寺の末寺として、鎌河内の道象寺、帆柱の法泉寺、城井馬場の淨三寺、道場寺、伊良原の楞嚴院などありしといふ

『祥雲山瑞應寺開闢記』

開闢不詳、伝云、當寺往古者大伽藍、而法幢亦頗繁榮也、雖然侵為洪水、殿堂周廡為鳥有矣唯存者、本尊釈迦如來像（安阿弥之作也）內佛彌陀如來像、並今上皇帝尊牌三座而已、其境至今在祥山處（後山創寺境内也至今俗号寺山）南限綿河之堀、北窮道路、前面逼巨川、而稱寺田今成穗藪里民為田畠也焉（又元和八年之頃所記之由書略存于今也）曾忠真公及自播陽移焉於當國、長宣公被領此地、依於大河之込、建立釈迦堂一宇、喜捨玄米三石、而被充香花之供、于時白川愚睡者、白官移寺於天神林處、則今之寺是也、又云、當寺有旧末四十九院焉、然今及敗壞、難悉悉、略以伝聞之處記左者也、貞享元年安國寺久山和尚弟子梵州僧住職、于時請安國二世久山和尚、為中興開山、自爾安國寺為末寺也

建物の配置は三つの場所に分かれる。一つは1・2号掘立柱建物跡のある場所、二つ目は4・5



第69图 柱根实测图 (1/6)

号掘立柱建物跡、1号礎石建物跡のある場所、三つ目は6～8号掘立柱建物跡のある場所である。

1・2号掘立柱建物跡は規模や細部構造は異なるが、どちらも方形を意識した構造を採っており、同一の意図を反映して建築されたものである。切り合い等の時期差を示す直接的な根拠に欠けるため先後関係を把握するには至らなかったが、後述する他の建物群の先後関係から、1号掘立柱建物跡が先行し、2号掘立柱建物跡に建て替えられたという順序が考えられる。当時の寺院建築様式を直接当てはめることは出来ないが、後世の事例を参考にして、寺院として本質的な役割を果たす本堂としての機能を想定している。

4・5号掘立柱建物跡、1号礎石建物跡は、主軸方向や建物規模からやはり同一の意図をもって建築されたものとすることができる。先後関係は、1号礎石建物跡の礎石を埋め込むように整地された後に4号掘立柱建物が建てられていること、4号掘立柱建物の位置を意識して掘削された4号溝や11号溝を無視して、或いは埋没後にこれを切って5号掘立柱建物が建てられていることから、1号礎石建物跡－4号掘立柱建物跡－5号掘立柱建物跡の順序が想定される。建物の性格を推察するのは難しいが、やはり後世の事例から薬師堂や付属僧坊など、寺院の従的役割を備えた建物であったと思われる。

6～8号掘立柱建物跡もまた、細部の構造等で差異はあるものの、主軸方向や建物規模から同一の意図で建築されたものと考えることができる。先後関係では、まず7号掘立柱建物及び2号柱列が建築され、この7号掘立柱建物の区画溝である8号溝を切って、6号掘立柱建物の区画溝である4号溝が掘削されていること、先述の5号掘立柱建物跡の柱筋と8号掘立柱建物跡の柱筋とが揃っていることから、この8号掘立柱建物跡を最も新しい時期に置くことができる等を考慮すると、7号掘立柱建物跡－6号掘立柱建物跡－8号掘立柱建物跡の順序が想定される。また、6号掘立柱建物跡と1号掘立柱建物跡、8号掘立柱建物跡と1号掘立柱建物跡の柱筋が揃うことから、これらをそれぞれ同時期のものと考えた。それゆえ、1号掘立柱建物跡－2号掘立柱建物跡の順序を想定した次第である。なお、証拠はないが、建物の規模や構造からこれら6～8号掘立柱建物跡は寺院の庫裡に相当するのではないかと考えている。

溝は全周するものは無く、地形の山側である西北側と北東側にのみ掘削される。これは山側から侵入する雨水を走り敷地外へと逃がす役割を果たしたものである。1号溝や13号溝は敷地の最外縁に掘削され、寺域全体の排水溝として機能する。その他の溝は各建物の区画と排水の双方を目的として機能したものである。

敷地の使用として不明確なのが、3号溝・4号溝・13号溝に区画された領域である。ここには3・4号柱列以外、顕著な遺構は無い。柱列の目的は不明であるが、ここでは庭としての機能を想定しておきたい。

こうした明確な区画の意図を持った敷地使用、大型の建物群の存在には、文献にも記載されるように「当寺往古者大伽藍、而法像亦頗繁榮也」という姿を想像させるが、その一方で、この時代においてもまだ掘立柱の建造物であること、また樹種同定の結果から使用された木材は全て広葉樹であることなどは、やはり山間部の一寺院としてのイメージを払拭できない。

出土遺物は15世紀から17世紀のものが出土しており、特に16世紀代のものが目立つようである。土師器小皿や壺は個体数が非常に少ない。日常雑器である鉢や火鉢には瓦質焼成や土質質焼成のものが見られる他、備前焼の描鉢が少なからず見られる。同じように備前焼の壺や壺も出土しており、

日常雑器に占める備前焼の割合が16世紀にはかなり増加していることが判る。第63図13の花瓶の出土などは遺跡の性格を反映したものと言えるだろう。

輸入陶磁器のうち、青磁は第66図10・11のように口縁部内外面に雷文帯を持ち、内面に草花文を施すものがある。15世紀代を中心に流通したものである。他に数は少ないものの、明代の染付磁器も若干出土している。第64図7は高台の形状から端反り碗と思われるもので15世紀前半に主に流通し、第66図13は蓮子碗で15世紀後半～16世紀前半頃のものである。近世に属するものは非常に少ないが、第63図6の擂鉢は17世紀後半頃のものとして挙げられる。

総じて遺物量は少なく、時期毎のセット関係などを捉えられる状況ではないものの、遺跡の存続時期を15世紀～17世紀と判断するだけの材料には恵まれた。これは文献に記載される時期とはほぼ合致する結果である。

引用文献

美術古文化懇話会 1975 「京都都誌（復刻版）」（原本は以東尾四郎編 1919）

4 上伊良原川上遺跡

1) 調査の概要 (図版31・32、第4・71図)

上伊良原川上遺跡は、京都府みやこ町大字下伊良原字川上110に所在する遺跡である。載川の右岸、中村地区と呼ばれる小扇状地の先端部にあり、載川の開析作用によって形成された低位河岸段丘面上に立地する。標高は203m前後。調査対象面積は1,413m²で、試掘調査の結果に従い北側の谷部を除く他の全面の発掘調査を実施した。調査面積は約1,100m²、調査前の地目は水田。

中村地区代替地（C代替地）造成工事に先行して、汚水の河川への直接流入を防ぐために当該地に沈砂地を造成する計画が浮上したため、平成18年10月6日に試掘調査を行った結果、遺跡の存在が確認された。本事業につい

ても平成18年度着工予定であったため、急遽本調査を実施することとなった。11月8日に重機を搬入して表土掘削を開始し、11月20日に終了、その後12月5日にそれまで行っていた下伊良原原田ノ谷遺跡の人力掘削作業がほぼ終了したので、同日夕方に器材を川上遺跡へ移動し、翌6日から川上遺跡の人力掘削作業等を開始した。調査は南側から北に向かって順次進め、幸い遺構密度は希薄であったため順調に調査は進み、19日からは北側の縄文包含層のグリッド掘削を開始、27日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を実施、年末も押し迫った12月28日に全ての作業を終え、器材を原田ノ谷遺跡に移動して上伊良原川上遺跡の発掘調査を終了した。調査期間は平成18年11月8日～12月28日。

遺構面の標高は、南東端で202.5m、南西端で202.0m、北東端で202.5m、北西端で201.5mを測り、全体的に東から西に向かって傾斜している。見つかった遺構と遺物は、一部中世のピット等が見られるものの大半は縄文時代のものである。北端では縄文時代の包含層を確認したため4mメッシュによるグリッド掘削調査を実施した。

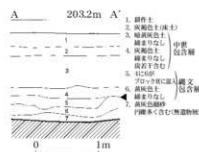
検出した主な遺構は、縄文時代包含層1箇所、堅穴住居跡1棟、土坑5基、溝1条である。



上伊良原川上遺跡

2) 基本層序 (図版32、第70図)

A-A'は、調査区西壁の中央付近の土層である。最上層には水田耕作土、下層に水田床土があり、その下層には暗黄灰色土層・灰褐色土層が堆積する。第3層暗黄灰色土層には遺物はほとんど含まれないが、第4層灰褐色土層は炭を若干含み、中世遺物を包含する。この層は伊良原地区一帯で広範に見られる中世包含層である。第6層は縄文時代遺物を包含する黄灰色土層であり、



第70図 上伊良原川上遺跡
基本土層図 (1/60)



第71図 上伊良原川上道路遺構配置図（1/300）

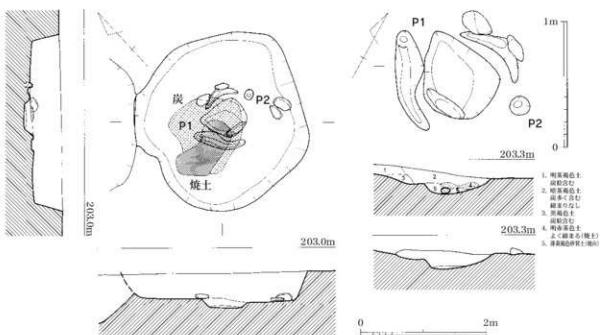
この層の上面を中世遺構面と認定して遺構確認作業を行った。また第6層は調査区北側にのみ認められ、中央から南側一帯はこの層は削平されて残っておらず、下層の第7層黄灰色細砂層が露出している。この第7層は無遺物層であり、従って第6層が残る北側部分にのみグリッド掘削調査を実施した。

3) 遺構と遺物

竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版33、第72図）

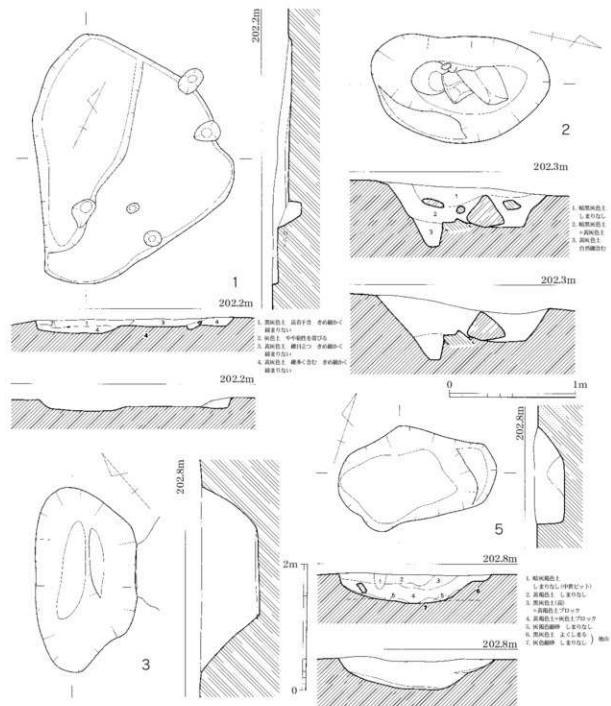
調査区中央付近で検出した竪穴住居跡である。3号土坑と重複するが、残念ながら先後関係は把握



第72図 1号竪穴住居跡・炉跡実測図（1/60、1/30）



第73図 1号竪穴住居跡出土繩文土器実測図（1/3）



第74図 1～3・5号土坑実測図 (1・3・5: 1/60, 2: 1/30)

掘出来なかった。直径2.8mのややいびつな円形を呈す。深さは45cm。

床面はほぼ水平に掘削され、壁の立ち上がりは比較的急である。覆土は明茶褐色で、遺構確認面から既に多量の炭や焼土が認められた。床面上の東側では2個の円窓が見つかったが、使用痕等は認められなかった。

床面の中央には炉を設ける。この炉は直径70cm前後の円形で、深さは20cm。

炉の北東側には長さ60cm、幅15cm、南西側には長さ80cm、幅20cmの浅い溝を、炉を囲むように掘り窪めている。これは相対的に炉の周囲を土手状に高くする意図のもとに掘り窪められたものと思われる。

また、北側に2個、南側に1個の扁平な円礫が直立した状態で出土しており、本来は炉の周囲を礫で取り囲んでいた可能性もある。なお炉の周辺には焼土や炭が多量に堆積していた。

炉の両側にはP1、P2の主柱穴が配置される。どちらも直径15cm、深さ20cm程度の小さなものであり、貧弱な主柱を用いた簡易な構造の堅穴住居であったと推察される。

遺物は非常に少なく、大半は第73図の同一個体片であった。

出土遺物（図版35、第73図）

1は晩期の深鉢である。屈曲部から上位は緩やかに外反しながら直立する。口縁端部は指施文による刻目が見られる。図上では全面施文として復元したが、口縁部が一部しか残っていないかったので本来全周していたかどうか判らない。

器表は外面とも横方向の二枚貝条痕調整を行う。色調は黄灰褐色～黒灰褐色を呈す。口径42.6cm。晩期中頃～後半のものであろう。

土坑

1号土坑（図版34、第74図）

調査区北端で検出した土坑である。長軸4.0m、短軸3.2mを測る不整形を呈す。深さは西側が一段深くなっている、この西側で15cm、東側で10cmを測る。覆土には炭が含まれる。遺物は少量しか出土しておらず図示できるものはない。

2号土坑（図版34、第74図）

調査区北端で検出した土坑である。長軸1.4m、短軸0.85mを測る楕円形をなす。深さは30cm。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。南東側にはテラスがあり、ここまで深さは20cm、坑底の南側には20cmの深さのビットがある。覆土には円礫が数個含まれ、また坑底にも大きめな円礫が1個据え置かれた状態で見つかっている。覆土は上層が暗黒灰色土、下層が黄灰土の混入した暗黒灰色土、ビットの覆土は黄灰色を呈す。遺物はほとんど出土していない。

3号土坑（図版33、第74図）

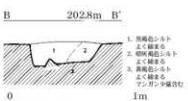
調査区の中央付近で検出した土坑である。1号堅穴住居跡と重複するが先後関係は不明。長軸3.0m、短軸1.6m、深さは90cm。底面は小さく、長軸1.5m、短軸0.5m。東側にはテラスがあり、テラスまでの深さは40cm。壁は緩やかに立ち上がる。遺物はほとんど出土していない。

4号土坑

先述の1号堅穴住居跡を当初は4号土坑としていたが、調査中に堅穴住居跡であることが判ったため遺構名を変更した。したがって4号土坑は欠番とする。

5号土坑（図版34、第74図）

調査区中央付近で検出した土坑である。長軸25m、短軸16m、深さは40cm。東側にテラスがあり、ここまで深さは10cm。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土には炭が多量に含まれる。



溝

1号溝（第75図）

調査区東端で検出した溝である。地形に沿って北東—南西方向へと延びており、長さ31m、幅1.5m、深さは20cm。覆土は上層が黒褐色シルト、下層が暗灰褐色シルトで、よく締まっている。遺物はほとんど出土していない。

第75図 1号溝断面図
(1/30)

縄文時代包含層調査

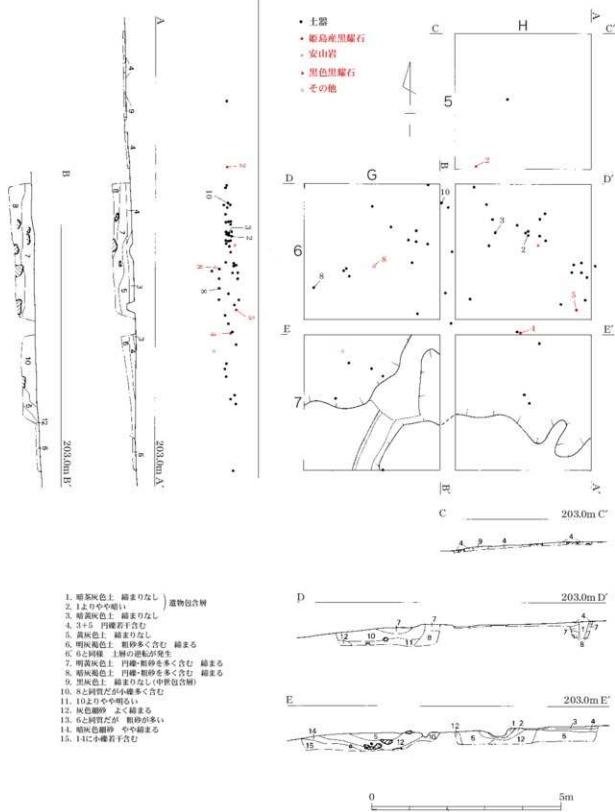
K4Gr～G7Gr（図版32・33、第76・77図）

調査区北側で確認した縄文時代遺物包含層である。中世遺構確認中に縄文土器等が散見されたため、中世の遺構調査後に4mメッシュでグリッド掘削調査を行った。

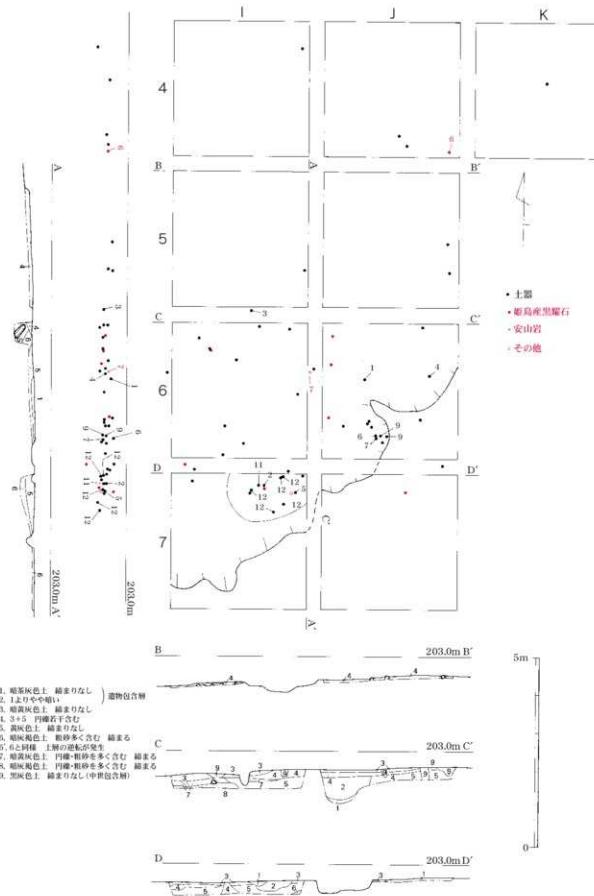
土層を見てみると、第1・2層の暗茶灰色土、第3層黄灰色土から主として遺物が出土しているが、他の層中からも少量出土している。また層の堆積も複雑であり、層の逆転が発生しているところもある。これらのことから、この包含層は二次堆積によるものであることが判る。このことは時期の異なる遺物が同一層中から出土していることからも窺える。

出土遺物（図版35、第78・79図）

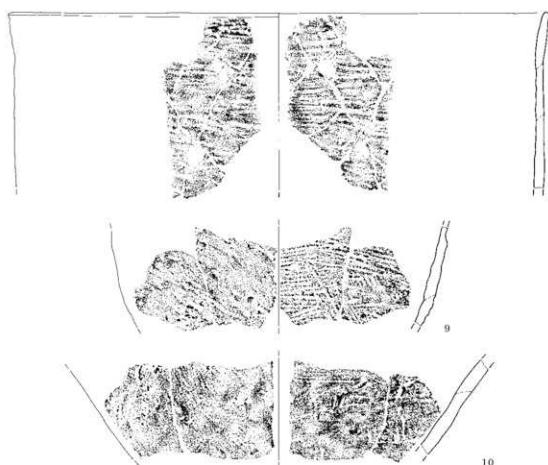
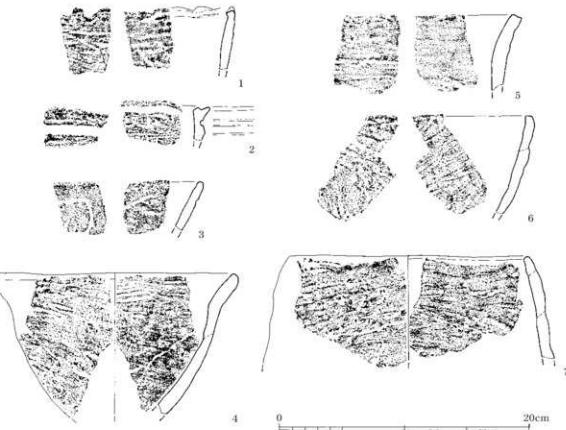
1は口縁端部に指による刻目をもつ後期初頭西和田式の深鉢。内外面横方向の貝殻条痕調整である。色調は黃灰色を呈す。J6Gr出土。2は口縁部に太い凹線を横方向に巡らせる。後期前半前後のものであろう。風化が著しく調整不明。色調は茶褐色を呈す。I7Gr出土。3は鋭い沈線を施す後期前半頭のもの。ナデ調整である。胎土に角閃石を多く含み暗茶褐色を呈す。IGr出土。4～8は条痕調整の深鉢縁部である。4は口縁部が開いた器形となる。器壁は粗い条痕の後に雑なナデを行う。色調は暗褐色を呈し、外側面に炭化物が付着する。口径19.4cm。J6Gr出土。5は外反しながら開く口縁部のもので、端部は面をなす。調整は横方向の条痕後指によるナデを行う。器壁は厚い。胎土に角閃石を若干含み黃灰色を呈す。I7Gr出土。6は内外面とも条痕調整後に指ナデを行い、作りに粗さが目立つものである。J6Gr出土。7は口縁部が内傾するものである。端部は面をなす。内外面指ナデ。色調は暗褐色を呈す。J6Gr出土。8は口縁部が縮まらず直立する。器壁は薄い。内外面とも横方向の条痕調整。胎土に角閃石を多く含み、色調は茶褐色を呈す。外面には炭化物が付着する。口径43cm。G6Gr出土。9・10は胴部片である。9は内面二枚貝条痕、外面指ナデを行う。色調は黄茶色を呈す。J6Gr出土。10は内面二枚貝条痕、外面条痕後ナデ調整を行う。胎土に角閃石を多く含み色調は黃灰色を呈す。外面に炭化物が付着する。H6Gr出土。11・12は底部片である。11は裾が張り、底面はわずかに上げ底となる。胴部は内外面とも条痕調整、底面はナデ調整を行う。底径14.0cm。G6Gr・I7Gr出土。12もやはり裾が張り底面は若干上げ底となる。胎土に角閃石を若干含み黃灰色を呈す。底径10.6cm。I7Gr出土。



第76図 グリッド実測図① (1/100)



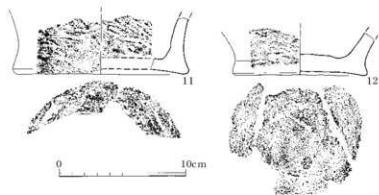
第77図 グリッド実測図② (1/100)



第78図 グリッド出土縄文土器実測図① (1/3)

ピット出土縄文土器（図版35、第80図）

1は早期初頭柏原式土器である。直線的に開いており、外面に長さ8mm、幅5mm、深さ5mmの刺突文と、径8mm、高さ4mmの瘤文をもつ。調整は内外面とも深い二枚貝条痕調整。色調は器表が明茶灰色、断面黒灰色を呈す。2は外面に山形文を施する押型文土器。内面はナデ。胎土に角閃石を若干含み暗黄灰色を呈す。3は条痕ナデ調整を行う小片。色調は暗黄灰色を呈す。



第79図 グリッド出土縄文土器実測図② (1/3)

石器（図版35、第81図）

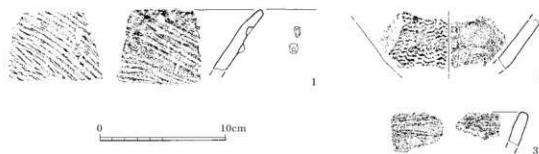
1～3は抉りの深い石鏃である。1は正三角形に近い形状になると思われる。西北九州産黒色黒曜石製。H5Gr出土。2は基部の抉りが丸く大きなもの。黒色黒曜石製。遺構面出土。3はやや綫長の三角形になる。安山岩製。遺構面出土。4は基部の抉りが浅いもの。正三角形に近い形状である。姫島産黒曜石製。H6Gr出土。5は平基鐵で綫長の形状をなす。姫島産黒曜石製。H6Gr出土。6は先端が尖っておらず、恐らく未製品であろう。基部は平基となる。姫島産黒曜石製。J4Gr出土。

7は安山岩製のスクレイバーである。刃部の調整は粗い剥離のみ。L6Gr出土。8は頁岩製磨製石斧である。側縁から頂部にかけて大きな剥離が見られる。G6Gr出土。

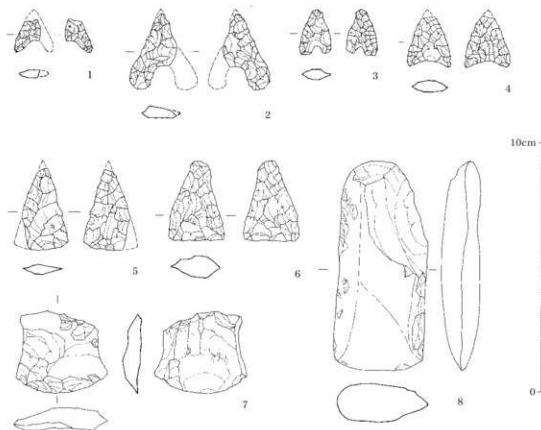
4) 小結

上伊良原川上遺跡で検出した遺構は、縄文時代晩期の堅穴住居跡1棟、土坑4基、溝1条、縄文時代の包含層1箇所である。

堅穴住居跡は直径2.8m、中央に炉があり、炉の両側に2本の主柱穴をもつものである。出土遺物



第80図 ピット出土縄文土器実測図 (1/3)



第81図 石器実測図 (2/3)

は晩期中頃～後半に位置付けられる。近隣の類似例として、篠上町松丸D遺跡2号竪穴住居跡がある。この竪穴住居跡は直径1m～5.6mと規模の面では隔たりがあるが、中央に炉があり、その両側に2本の主柱穴を持つ点で構造上類似する。時期も晩期中業であり、ほぼ同じ時期である。篠上町では近年の発掘調査により、やはり円形プランで中央に炉を有し二本主柱の晩期竪穴住居跡が数例発見されており、本遺跡で検出した竪穴住居跡もその一例として挙げられる。詳細は更なる類例を待って検討すべきであろうが、縄文時代晩期の竪穴住居形態の一例として、このように円形プランで中央に炉を配し、二本主柱の構造を探るものがあり、地域的なまとまりが見いだせる可能性を指摘しておきたい。

ピットから出土した縄文時代早期柏原式土器や押型文土器は、本遺跡に隣接し平成19年度に発掘調査を行った上伊量原複遺跡で数多く見つかっており、評価についてはその報告にて行う予定である。

北側の包含層から出土した縄文土器は、出土量が少ない上に大半が条痕文土器であり、時期が明確に判断できるもの少ない。少なくとも後期の段階で人々の生活痕跡が認められるという点を述べるに留めたい。

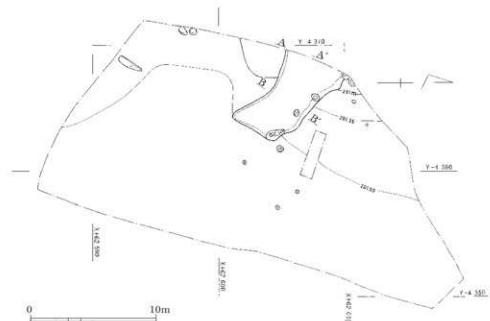
5 上伊良原下ノ段遺跡

1) 調査の概要 (図版36、第4・82図)

上伊良原下ノ段遺跡は、京都郡みやこ町大字下伊良原字下ノ段103に所在する遺跡である。截川の右岸、中村地区と呼ばれる小崩状地の先端部にあり、截川の開析作用によって形成された低位河岸段丘面上に立地する。標高は203m前後。先述の上伊良原川上遺跡とは小川を挟んで南接する。調査対象面積は662m²で、試掘調査の結果に従いほぼ全面にわたる発掘調査を実施した。調査面積は約600m²、調査前の地目は水田。

中村地区代替地（C代替地）造成工事に先行して、汚水の河川への直接流入を防ぐために当該地に沈砂地を造成する計画が浮上したため、平成18年10月6日に試掘調査を行った結果、川上遺跡とともに遺跡の存在が確認された。本事業についても平成18年度着工予定であったため、年度内に本調査を完了することとなった。下伊良原寺ノ谷遺跡の表土掘削が終了した後の1月23日より重機を下ノ段遺跡に搬入し、表土掘削作業を開始、1月29日には表土掘削作業を終了した。その後、寺ノ谷遺跡の遺構掘削作業がようやく一段落いた2月13日から作業員の一部を割いて下ノ段遺跡に割り当て、人力掘削を開始した。予想以上に遺構密度が低かったため15日にはほぼ掘削を終了し、16日に清掃後写真撮影、17日には作団作業も終了し、器材を寺ノ谷遺跡に移動して調査を終了した。調査期間は平成19年1月23日～2月19日。

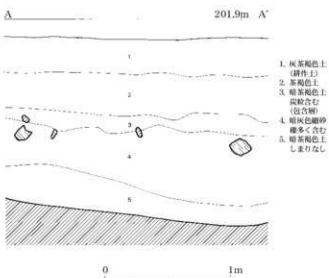
遺構面の標高は、南東端で201.6m、北東端で201.6m、北西端で200.8mを測り、全体的に東から西に向かって傾斜している。見つかった遺構は、落ち込み1基と数個のビットのみである。遺物には縄文時代のものと中世のものが見られる。



第82図 上伊良原下ノ段遺跡遺構配図 (1/300)

2) 基本層序 (図版36、第83図)

A-A' は調査区西壁の中央付近の土層である。最上層は耕作土であり、その下層には遺物包含層である茶褐色土が厚く堆積する。遺物の量は非常に少ない。第3層の炭を含んだ暗茶褐色土は落ち込みとして報告する層の覆土であり、縄文時代と中世の遺物を包含する。第4層暗灰色細砂及び第5層暗茶褐色土は無遺物層である。



3) 遺構と遺物

落ち込み (図版36、第84図)

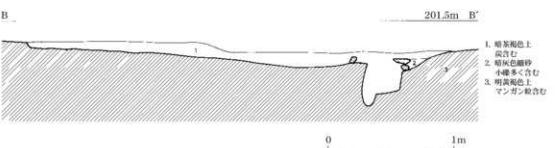
調査区西側で検出した遺構である。長軸7m、短軸3.5mの範囲で暗茶褐色土の堆積が見られ、遺物も認められたのでこれを落ち込み状の遺構として掘削を行った。断面土層図を見てみると、10cm前後の厚さで薄く堆積しており、地形に沿って形成されているようである。従って、人為的な掘削ではなく自然地形の落込みに堆積した包含層と判断した。

遺物は少量出土しているが、縄文時代のものと中世のものとがある。このことからも、この遺構は二次堆積によるものであることが窺える。

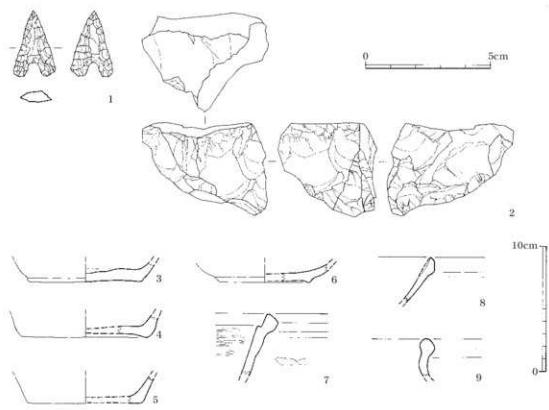
出土遺物 (図版36、第85図)

1は姫島産黒曜石製の石鎌である。基部には深い抉りがあり、整った長三角形の丁寧な作りである。落ち込み出土。2は赤色チャートの石核である。頂部の打面整形後、不規則な剥離を行う。ビット出土。

3～5は土師器坏である。全て落ち込み出土。3は底径9.0cm、4は底径10.0cm、5は底径9.0cm。6は土師器碗である。高台は断面三角形で低平なものとなる。径7.0cm。落ち込み出土。7は土師質鍋である。口縁部は肥厚し、段をもって外側に屈曲する。内面横ハケ目、外面ナデ。外



第83図 上伊良原下ノ段遺跡基本土層図 (1/30)



第85図 出土遺物実測図 (1・2:2/3, 3~9:1/3)

面にはコゲが付着する。落ち込み出土。

8は玉縁の白磁碗である。遺構面出土。9は鉄釉の近世陶器壺である。口縁部は丸く肥厚する。
遺構面出土。

4) 小結

上伊良原下ノ段遺跡では、落ち込みとした包含層以外顕著な遺構は認められなかった。包含層出土遺物も縄文時代から中世まで混在しており、二次堆積によるものであることが明らかである。縄文時代と中世に人々の生活痕跡が認められることを付記しておくに留めたい。

IV 自然科学系の分析

1 下伊良原原田ノ谷遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1) 自然科学分析の概要

下伊良原原田ノ谷遺跡の発掘調査では、溝式土器包含層の下位において鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）と見られる層厚10.3mm程度の火山灰（テフラ）層が確認された（写真参照）。そこで、この火山灰の特性を把握し、給源を確認する目的で火山灰分析（屈折率測定、火山ガラス分析）を行った。また、当時の植生や環境を推定する目的で植物珪酸体分析を行った。調査対象となった地点は、E-8グリッド北壁である。

2) 火山灰（テフラ）分析

1. 試料

分析試料は、E-8グリッド北壁の火山灰層（3層下部）から採取された試料10の1点である。試料採取箇所を植物珪酸体分析結果の模式柱状図に示す。

2. 前処理

湿式用の篩（2～4φ）を用いて、水洗しながら各粒径ごとに箇分けをした。2～3φ（0.250～0.125mm）と3～4φ（0.125～0.063mm）の粒子について超音波洗浄を行い、その火山灰粒子を分析対象とした。

3. 火山ガラスの形態分類

(1) 方法

火山ガラスの形態分類の計測は、100倍の偏光顕微鏡下でカウント数が500個以上に達するまで行った。火山ガラスの形態分類は、吉川（1976）や町田・新井（1978）の分類があるが、ここでは気泡（bubble）の大きさ、ガラスの厚さや気泡の形状などを指標に基づいて定めた遠藤・鈴木（1980）の分類基準に従った。以下にその基準を示す。

A型：気泡の曲率半径が大きく火山ガラスの壁が薄い平板状の火山ガラス

A'型：気泡と気泡の接合部が気泡の壁の平板上にXやY字状の稜を持つ火山ガラス

B型：平板状であるが、火山ガラスの壁が異常に厚く屋根瓦状、カマボコ状やフレーク状の火山ガラス

C型：A、A'型に比べて小さな曲率を持つ火山ガラスで透明なガラスの壁に幾つかの気泡が集まってきた火山ガラス

D型：C型とほぼ同じ曲率で、その気泡が管状に細長く引き伸ばされ、透明な火山ガラスに数本の平行した稜を持つ火山ガラス

E型：D型よりも管が細長く繊維を束ねた形を示す火山ガラス

F型：最も曲率半径が小さく、不定形の多数の気泡を持った軽石状の火山ガラス

(2) 結果

試料10は、ほとんどが火山ガラスで構成されており、僅かに斜方輝石と单斜輝石が含まれている。火山ガラスの形態的特徴は、AやA'型のバブルウォールタイプの火山ガラスが約80%を占め、残りをC、DおよびE型の軽石タイプの火山ガラスが占める（第86図）。また、茶色の火山ガラス（写真参照）が1%未満と僅かに含まれるのが特徴である。

4. 火山ガラスと斑晶鉱物の屈折率測定

(1) 方法

テフラに含まれる火山ガラス（n1）と斜方輝石（γ）について、温度変化屈折率測定装置（古澤地質社製、MAIOT2000）を用いて屈折率測定を行った。火山ガラスについては3～4φ（0.125～0.063）の粒子、斜方輝石についてはハンドピッキングで取り出した2～3φ（0.250～0.125）の粒子を押しつぶして割った粒子を測定に用いた。

火山ガラスの屈折率測定法において、水和されている完新世テフラの火山ガラスは、400°Cで12時間加熱することにより、より正確に簡便に測定できる（中村、2002）。ただし、脱水した火山ガラスの屈折率は、脱水しないガラスよりも屈折率が0.010～0.015低くなるため、比較するためのテフラ毎のデータベースの構築が望まれる。本報告では両者の屈折率測定を行った。

(2) 結果

屈折率測定の結果、火山ガラス（n1）では1.508-1.512、脱水火山ガラス（n1）では1.494-1.501、斜方輝石（γ）では1.703-1.711（1.708-1.711）などの値が得られた（第87図）。

5. 考察

E-8グリッド北壁の3層から採取された試料10について火山灰分析を行った。その結果、1) 大半がバブルウォール型火山ガラスで構成され、僅かに茶色の火山ガラスを含む、2) 斑晶鉱物として極僅かに斜方輝石と单斜輝石を含む、3) 火山ガラスの屈折率は鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の測定値と調和的で、脱水した火山ガラスもその値より0.011～0.014低い、4) 斜方輝石の屈折率はK-Ahに比べて低い値を示すものの、最頻値のrangeは調和的であることなどから、この火山灰は約7,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah；町田・新井、1978、1992）に由来すると考えられる。

鬼界アカホヤ火山灰の年代は、従来は放射性炭素年代測定結果から約6,300年前とされていたが、近年の研究の進展により、実際の年代（曆年代）は約7,300年前と推定されている（町田・新井、2003）。

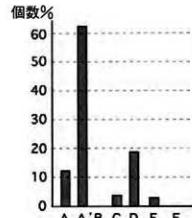
文献

- 遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層、考古学と自然科学、J. 13, p.19-30.
町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰、第四紀研究、17, p.143-163.
町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、東大出版会、276p.
町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺、東京大学出版会、p.58-63.

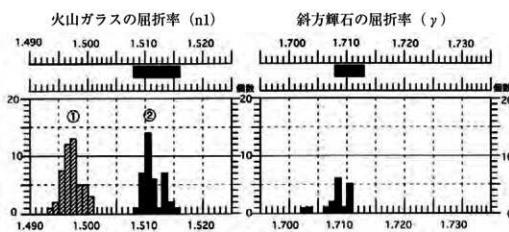
中村有吾・片山美紀・平川一臣（2002）水和の影響を除去した北海道の完新世テフラガラスの屈折率、第四紀研究、41、p.11-22。
吉川周作（1976）大阪層群火山灰層について。地質学雑誌、82、p.497-515。

第1表 下伊良原原田ノ谷遺跡の火山灰ガラス分析結果
試料10

形態	火山ガラスの形態分類							その他			屈折率		
	A	A'	B	C	D	E	F	合計	斜方輝石	單斜輝石	その他	火山ガラス(η_1)	斜方輝石(γ)
個数	61	312	0	19	93	15	0.00	500	1	1	28	未処理	脱水処理*
個数 %	12.20	62.40	0.00	3.80	18.60	3.00	0.00	100.00				15080-15157	14938-15005 (1.775-1.7114)



第86図 火山灰ガラスの形態ごとの頻度分布



ヒストグラム①：400°C12時間脱水処理した火山ガラス

ヒストグラム②：未処理の火山ガラス

*最上部は町田・新井（1992）のK-Ahの屈折率の範囲

第87図 火山灰ガラスおよび斜方輝石の屈折率



下伊良原原田ノ谷遺跡E8Grの土層断面



資料10のテフラ



A型の火山ガラス



A'型の火山ガラス



C型の火山ガラス



D型の火山ガラス



E型の火山ガラス



茶色の火山ガラス



斜方輝石



単斜輝石

下伊豆原原田ノ谷遺跡におけるテフラ（試料10）の顕微鏡写真

3) 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネ科をはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

2. 試料

分析試料は、E-8グリッド北壁から採取された計11点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約 $40\mu\text{m}$ のガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による $20\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10–5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

（1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族A（チガヤ属など）、Bタイプ

〔イネ科—タケ亜科〕

チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

下位の5層（試料14、15）では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、樹木（その他）なども認められた。4層（試料11、12）では、ミヤコザサ節型が増加しており、ヨシ属、イネ科Bタイプ、および樹木（照葉樹）のブナ科（アカガシ亜属）、マンサク科（イスノキ属）が出現している。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山, 1999）。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬, 1986）。

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層の3層（試料9、10）では、ウシクサ族Aやミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。2層下部（試料8）では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属なども認められたが、樹木起源は検出されなかった。2層中部（試料6）から2層（試料3）にかけては、ミヤコザサ節型がやや増加し、樹木（照葉樹）のクスノキ科、樹木（その他）などが出現している。1層（試料1）では、クスノキ科が増加し、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、マンサク科（イスノキ属）なども出現している。

おもな分類群の推定生産量によると、4層ではミヤコザサ節型が優勢であり、4層や1層ではヨシ属も比較的多くなっている。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

下位の5層の堆積当時は、ササ属（おもにミヤコザサ節）を主体としてキビ族、ウシクサ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、周辺には何らかの樹木が生育していたと推定される。鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）直下の4層の堆積当時は、ササ属（おもにミヤコザサ節）を主体としてウシクサ族なども生育するイネ科植生であり、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られると考えられる。また、遺跡周辺ではカシ類（アカガシ亜属）やイスノキ属などの照葉樹林が成立していたと推定される。

花粉分析の結果によると、九州における照葉樹林の発達開始時期は、南部九州では約8,500年前、北部九州では約8,000年前と推定されている（畠中・野井・岩内, 1998）。今回の植物珪酸体結果から、本遺跡周辺でも比較的早い時期に照葉樹林が分布拡大していたことが明らかになった。今後、周辺地域で同様の検討を行うことにより、照葉樹林の存在や分布拡大の様相が解明されるものと期待される。

なお、ササ属については、これらの森林の林床植生として分布していた可能性も考えられる。ササ属は常緑であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカ類などの草

食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。遺跡周辺にこれらのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

その後、鬼界アカホヤ火山灰の堆積によって当時の植生は一時的に大きな影響を受けたと考えられるが、轟式土器を包含する2層の時期には、ササ属（おもにミヤコササ節）を主体としたイネ科植生が回復していたと考えられ、クスノキ科などの照葉樹を含む森林植生もある程度回復していくと推定される。轟式土器を包含する1層の時期には、シイ属、カシ属、クスノキ科、イスノキ属などが生育する多様性のある森林植生が成立していたと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

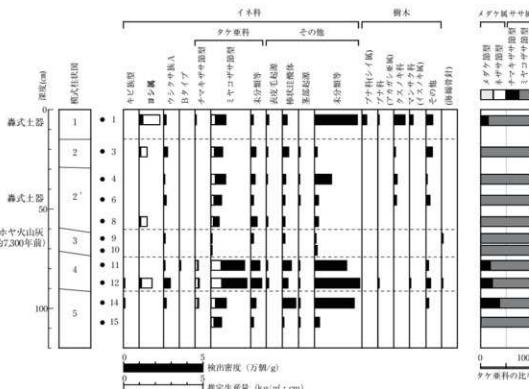
タケ亜科のうち、メダケ属（メタケ節やネザサ節）は温暖、ササ属は寒冷の指標とされており、一般に約1万年前の気候温暖化を境にササ属からメダケ属へ植生変遷している（佐瀬ほか、1987、杉山、2001など）。今回の分析では、K-Ah（約7,300年前）の上層においてもササ属が優勢となっているが、このことの原因として、比較的早い時期に森林植生が成立したことにより、メダケ属の生育に適した開地が存在していなかったことなどが想定される。

文献

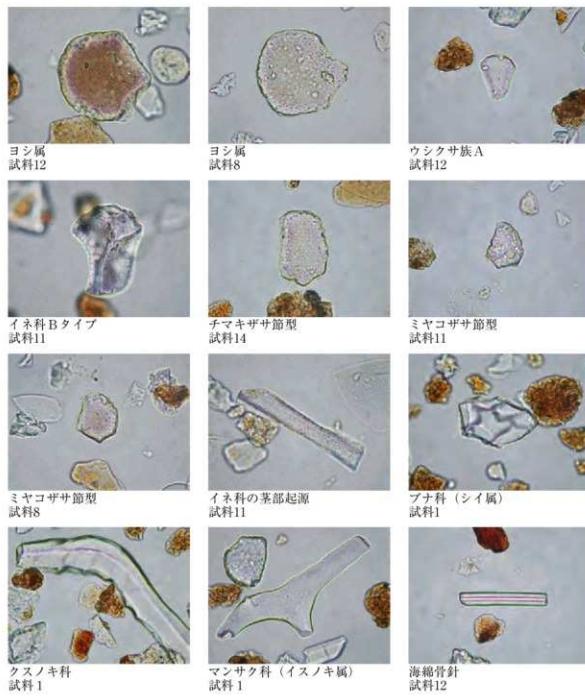
- 近藤健三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体、その特性と応用。第四紀研究、25：p.31-63。
佐瀬隆・細野衛・宇津川徹・加藤定男・飼村正治（1987）武藏野台地成層における関東ローム層の植物珪酸体分析。第四紀研究、26, p.1-11。
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究、38(2), p.109-123。
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オバール）。考古学と植物学、同成社、p.189-213。
杉山真二（2001）テフラと植物珪酸体分析。月刊地球、23, p.645-650。
高槻成紀（1992）北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学—。どうぶつ社。
畠中健一・野井英明・岩内明子（1998）九州地方の植生史。図説日本列島植生史、朝倉書店、p.151-161。
藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究(I)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分法－。考古学と自然科学、9, p.15-29。

第2表 下伊良原原田ノ谷遺跡における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	検出密度(単位: >100個/g)													
		1	3	4	6	8	9	10	11	12	14	15	E8Gr北壁		
イネ科	Gramineae												7	8	
キビ穀型	Panicoid type												7	8	
ヨモギ	Polygonaceae	21	8			8							13		
シラクサ族	Athyriogynaceae A type	14	23	6	15		8						40	15	
ビリバ科	B-type												7		
タケ科	Bambusoideae														
チマキササ群型	Sasa sect. Sasa etc.	7											21	27	23
ミコロイデア群型	Sasa sect. Crassinodi	96	75	94	68	53	8	8	215	229	98	68			
木根起原	Others	14	20	25	15	38	15				55	67	30	15	
木子根等															
木の根の子科															
衣冠毛起原	Husk hair origin	14	8	6		8					7	13			
棒状毛起原	Rod-shaped	28	38	19	15	15	15	15			55	34	83	8	
茎部起原	Stem origin			8	6	8					7	7	8	8	
木子根等	Others	268	15	106	23	23	8	15	201	283	248	30			
樹木起源	Arborescent														
ツバキ科(8)	Camelliopsis	28													
ツバキ科アガシ属	Ostrya subgen. Cyclobalanopsis	7												7	
クヌクス科	Lauraceae	69	8	19	15										
マンサク科(イヌノキ属)	Dipterocarpaceae	21											7		
その他	Others	41	38	6	23						14	27	15		
(海綿骨材)	Sponge												8	7	
植物珪酸体総数	Total	626	248	288	180	143	53	23	589	761	526	128			
植物珪酸体の検定生産量(単位: kg/m²cm)															
ホルム分類群の検定生産量															
ホルム分類群の検定生産量	試料の検定生産量を10倍にして算出														
リシ属	Phragmites	1.39	0.47			0.47							0.83		
チマキササ群型	Sasa sect. Sasa etc.	0.05											0.16	0.20	0.17
ミコロイデア群型	Sasa sect. Crassinodi	0.29	0.23	0.28	0.20	0.16	0.02	0.02	0.02	0.02	0.04	0.09	0.29	0.20	
タケ科の比(%)															
タケ科	Pleiothrix sect. Nipponocalamus														
キササ群	Pleiothrix sect. Nezasa														
チマキササ群型	Sasa sect. Sasa etc.	15											19	23	37
ミコロイデア群型	Sasa sect. Crassinodi	85	100	100	100	100	100	100	81	77	63	100			



第88図 下伊良原原田ノ谷遺跡、E8Gr北壁における植物珪酸体分析結果



— 50 μ m

下伊良原原田ノ谷遺跡の植物珪化体 (プランクト・オパール)

2 下伊良原寺ノ谷遺跡のウイグルマッチングによる年代測定

バレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薰・小林紘一

Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

1)はじめに

下伊良原寺ノ谷遺跡より検出された寺院跡柱材について、加速器質量分析法（AMS法）によるウイグルマッチング年代測定を行った。

2) 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第3表のとおりである。測定試料は、最外年輪1年輪と内側の17年輪目の2試料である。

試料は調整後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 15SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代、ウイグルマッチング法による最外試料の曆年代を算出した。

3) 結果

第4表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代範囲を、ウイグルマッチング結果を、図1にウイグルマッチング結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、曆年較正、ウイグルマッチング法の詳細は以下の通りである。

曆年較正

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。それぞれの曆年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

ウイグルマッチング法

試料の年代を得るまでの問題は¹⁴C年代値から暦年較正を行う際に較正曲線に凹凸があるため单一の測定値から高精度の年代を決定するのが難しいという点である。ウイグルマッチング法では複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと、較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって高精度で信頼性のある年代値を求めることができる。

測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の¹⁴C年代値から暦年較正を行い、得られた確率分布を年輪幅だけずらしてすべてを足し合わせることにより最外年輪の確率分布を算出する。この確率分布より年代範囲を求める。

4) 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行い、PLD-11709、PLD-11710を用いてウイグルマッチング法により最外試料の暦年代を求めた。

ウイグルマッチング法により最外試料の暦年代を求めた結果、 1σ 暦年代範囲において1538-1575 calAD(63.2%)であった。この年代範囲は、木材の伐採年代として戦国時代（室町後期）の年代を示す。なお、より確からしい年代範囲として、 2σ 暦年代範囲において1523-1604 calAD(89.1%)であった。

参考文献

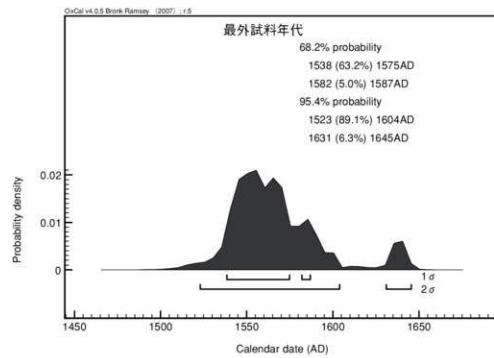
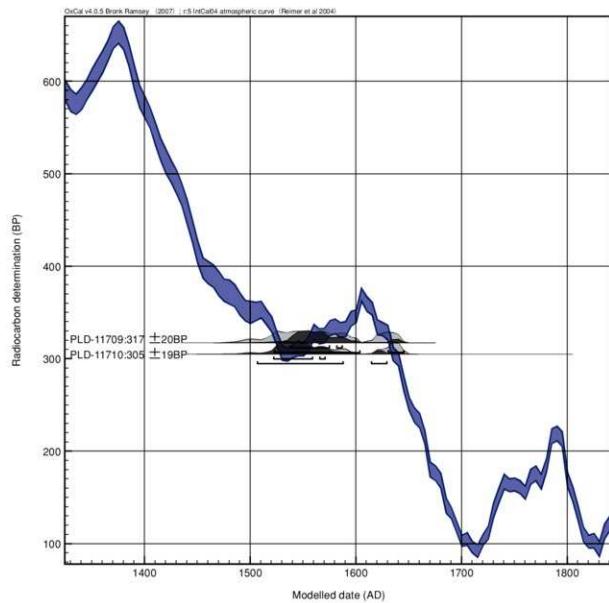
- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- Bronk Ramsey, C. van der Plicht, J. and Weninger, B. (2001) ‘Wiggle matching’ radiocarbon dates. Radiocarbon, 43(2A), 381-389
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代. 3:20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmeli, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration: 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

第3表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11709	遺構:寺院跡P109 その他:ウイグル試料	試料の種類:生材 (サクラ属, 1年輪目) 試料の性状:最外年輪 態:wet	超音波洗浄 酸:アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-11710	遺構:寺院跡P109 その他:ウイグル試料	試料の種類:生材 (サクラ属, 17年輪目) 状態:wet	超音波洗浄 酸:アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス

第4表 放射性炭素年代測定、曆年校正、ウイグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年校正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
PLD-11709	-29.86 \pm 0.14	317 \pm 20	315 \pm 20	1522AD (48.1%) 1576AD 1582AD (6.5%) 1591AD 1622AD (13.6%) 1639AD	1492AD (75.4%) 1603AD 1615AD (20.0%) 1644AD
PLD-11710	-28.85 \pm 0.16	305 \pm 19	305 \pm 20	1523AD (53.1%) 1573AD 1630AD (15.1%) 1644AD	1514AD (71.3%) 1600AD 1616AD (24.1%) 1648AD
				最外試料年代	1538AD (63.2%) 1575AD 1582AD (5.0%) 1587AD
					1523AD (89.1%) 1604AD 1631AD (6.3%) 1645AD



第89図 ウィグルマッチング結果

3 下伊良原寺ノ谷遺跡出土木柱の樹種同定

小林克也・藤根久（パレオ・ラボ）

1)はじめに

下伊良原寺ノ谷遺跡では、中世から近世の大規模な寺院跡が確認された。本堂や講堂としての機能が考えられる大規模な建物跡が2棟、その周辺に数棟の小規模な建物跡が数棟確認されている。ここでは、建物群の柱穴より出土した柱材8点について樹種同定を行い、建材の選択性について考察した。なお、柱材1点（P109）についてフィグルマッチング法による放射性炭素年代測定が行われ、戦国時代の年代が与えられている（放射性炭素年代測定の項参照）。

なお、切片採取は藤根、同定および本文作成は小林・藤根が行った。また同定に当たり、森林総合研究所の能城修一氏に御教示を得た。

2) 試料と方法

試料は、寺院跡の柱材8点である。材組織の切片採取では、直接木材から直接片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の3断面を採取し、ガムクローラーで封入して永久プレパラートを作製した。同定は、これらのプレパラートを光学顕微鏡下で40～400倍で検鏡し、現生標本と対比して行った。なお、プレパラートは、福岡県教育委員会に保管されている。

3) 結果

同定の結果、広葉樹のオニグルミ、クリ、ムクノキ、イスノキ、サクラ属、イボタノキ属の6分類群が産出した。サクラ属が最も多く3点、イスノキ属、オニグルミ、クリ、ムクノキが1点ずつ産出した。同定結果を表1に記す。

以下に、同定された材の記載を記し、図版に1分類群1点の光学顕微鏡写真を示す。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* Makino クルミ科 図版1 1a-1c (P134)

単独または2～4個の道管が放射状に複合して散在する散孔材である。道管は晩材部にかけて径を減じる。軸方向柔細胞が接線状にみられる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、1～3列となる。

オニグルミは北海道から九州まで広く分布し、河岸や湿润な平地の肥沃なところに育成する落葉高木の広葉樹である。材の堅さ、重さは中庸で、削切等の加工は容易である。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 2a-2c (P60)

年輪始めに大きめの道管が並び、晩材部にかけて径を減じ、斜線状または火炎状に配列する環孔材である。道管は單穿孔を有する。放射組織は單列同性である。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(3) ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch. ニレ科 図版1 3a-3c (P123)

中型の道管が单体または2～4個複合して塊状になる散孔材である。軸方向柔細胞は帶状～連合

翼状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は異性で、1～4列になる。

ムクノキは温帯の日当たりのよい適潤地を好み、海に近い所に比較的多い落葉高木の広葉樹である。材の強さは中庸であるが、韌性があり削製しにくい。

(4) イヌノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科 図版2 4a-4c (P22 1/2)

小型の道管が単体または2～4個複合し、まれに塊状になる散孔材である。放射方向柔細胞は接線方向に網状に連なる。穿孔は階段穿孔を有する。放射組織は異性で、2～3列になる。

イスノキは熱帯中南部に分布する、常緑高木の広葉樹である。材は極めて重硬で強度も大きく、切削加工は困難である。

(5) サクラ属 *Prunus* バラ科 図版2 5a-5c (P109)

小型の道管が単体または2～5個不定方向に複合して散在する散孔材である。道管は晚材部にかけて径を減じる。道管は單穿孔を有し、内腔にはらせん厚壁が顕著にみられる。放射組織は異性で、1～5列となる。

サクラ属にはヤマザクラやオオシマザクラなどがあり、落葉高木の広葉樹である。材は中庸からやや重硬で、粘りがあり強韌である。切削加工も困難でない。

(6) イボタノキ属 *Ligustrum* モクセイ科 図版2 6a-6c (P125)

年輪始めに中型の道管が並び、晚材部にかけて小型の道管が単体で放射方向に配列する半環孔材。道管は單穿孔を有する。放射組織は異性で2列である。

イボタノキ属にはイボタノキやミヤマイボタなどがあり、温帯から暖帯に分布する落葉または半落葉低木の広葉樹である。

4) 考察

当遺跡の柱材には広葉樹が利用されていた。産出した樹種はオニグルミ、クリ、ムクノキ、イスノキ、サクラ属、イボタノキ属で、サクラ属がやや多かった。サクラ属の中でも代表的なヤマザクラは、強韌で耐朽性も高く、加工も容易であるという性質から、最近まで使用してきた樹木である。また、クリやムクノキなども耐朽性の高い樹木であり、当遺跡としては柱の用材として、耐朽性の高い樹種を利用していたことが考えられる。

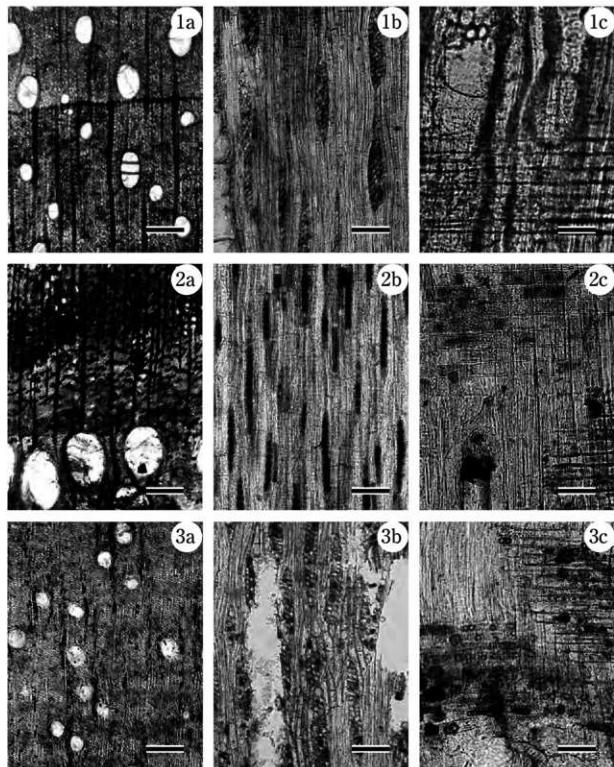
16世紀中頃～17世紀初頭の全国的な建築材の利用傾向をみると、ヒノキ属、スギ属を始めとして針葉樹の使用が顕著に認められる（山田、1993）が、本遺跡では利用されていなかった。これは、遺跡周辺において生育していなかったと考えられる。

引用文献

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史、植物生史研究特別第1号、242p.

第5表 下伊良原寺ノ谷遺跡出土柱材の樹種同定結果

試料No.	遺構番号	種類	樹種	年代測定番号
1	P22 1/2	柱材	イスノキ	
2	P60	柱材	クリ	
3	P123	柱材	ムクノキ	
4	P121	柱材	サクラ属	
5	P126	柱材	サクラ属	
6	P125	柱材	イボタノキ属	
7	P134	柱材	オニグルミ	
8	P109	柱材	サクラ属	PLD-11709,PLD-11710



1a-1c.オニグルミ(P134) 2a-2c.クリ(P60) 3a-3c.ムクノキ(P123)

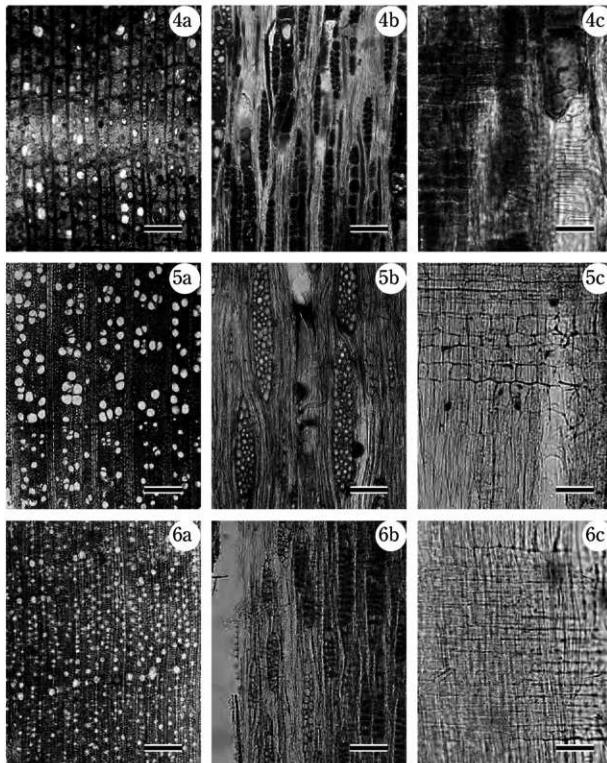
a:横断面(スケール=250μm)

b:接線断面(スケール=100μm)

c:

放射断面(スケール=50μm)

下伊良原寺ノ谷遺跡出土木柱の光学顕微鏡写真(1)



4a-4c.イスノキ (P22 1/2) 5a-5c.サクラ属 (P109) 6a-6c.イボタノキ属 (No.P125)
a:横断面 (スケール=250μm) b:接線断面 (スケール=100μm) c:放射断面 (スケール=50μm)

下伊良原寺ノ谷遺跡出土木柱の光学顕微鏡写真 (2)

V おわりに

伊良原ダム建設に伴う発掘調査は、平成18年7月より始まった。遺跡の発見から本調査の開始までは永い日数が経過したが、本調査の開始と併行して一齊に各地区の関連工事が開始され、工事側との日程調整を行いつつ平成18年度は5箇所の発掘調査を行った。

短期間での調査ながら、これまでほとんど遺跡の存在が知られていなかった伊良原地区で、今回報告する五つの遺跡を始め、平成19年度以降も続く発掘調査によって、伊良原の歴史が次第に明らかになっていくことは間違いない。これは非常に大きな成果である。

今回報告した五つの遺跡でも、貴重な成果があった。下伊良原中ノ坪遺跡では、京築地域ではこれまでに良好な出土資料に恵まれなかった突帯文土器が多く出土した事、また14世紀の民家建築を想定できる遺構を確認できたことが挙げられる。下伊良原原田ノ谷遺跡では、量的に少ないものの縄文時代前期前半の遺物に恵まれたことと、火山灰分析の結果も含めて縄文早期包含層と前期以降の包含層との分離が可能となったことである。この成果は今後の伊良原地区の遺跡を調査する上で重要な判断材料となり得る。下伊良原寺ノ谷遺跡では、これまで位置が不明であった瑞応寺の跡であることが確認された。建物の配置や規模は文献に記されるように大寺院としての様相が垣間見えるものの、一方では柱材に広葉樹を使用した簡素な掘立造であったことも明らかになった。上伊良原川上遺跡では縄文時代晚期の堅穴住居跡を検出し、この時期の堅穴住居跡の類例に貴重な一例を加えることができた。上伊良原下ノ段遺跡では顕著な成果は無かったが、平成19年度に発掘調査を行った上伊良原複遺跡と関連する出土遺物に恵まれた。

この18年度の発掘調査を皮切りに、伊良原ダム建設に伴う発掘調査は当分の間続く予定である。今後の発掘調査の継続により、明らかになる点も少なくないものと期待したい。

図 版



1 下伊良原中ノ坪遺跡
遠景（南上空から）



2 下伊良原中ノ坪遺跡
遠景（東上空から）



1 調査区北東端土層（南から）



2 調査区南東端土層（西から）



3 6号土坑（南から）



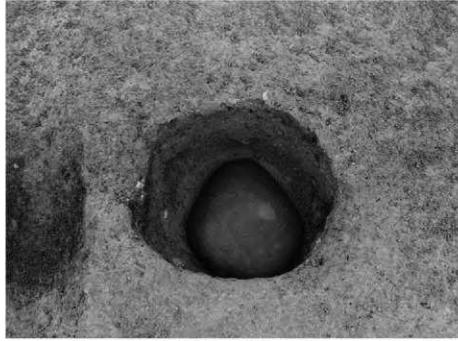
1 純文グリッド（西から）



2 A1Gr北壁（南から）



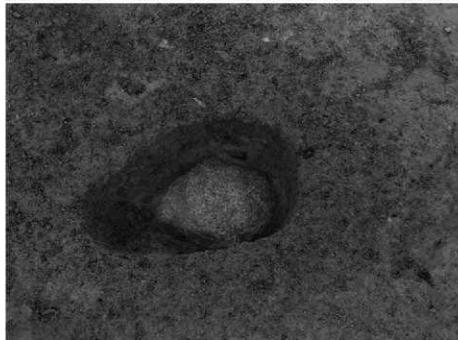
3 1号掘立柱建物跡（西から）



1 1号掘立柱建物跡P13（南から）



2 1号掘立柱建物跡P14（南から）



3 1号掘立柱建物跡P17（南から）

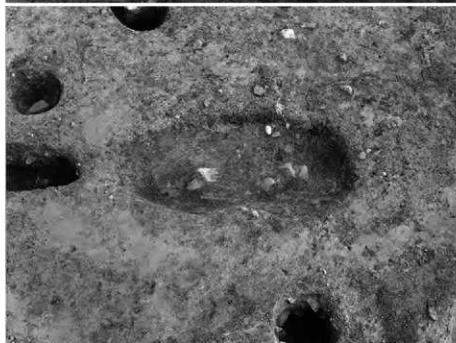




1 2号土坑（東から）



2 3号土坑（南から）



3 4号土坑（西から）



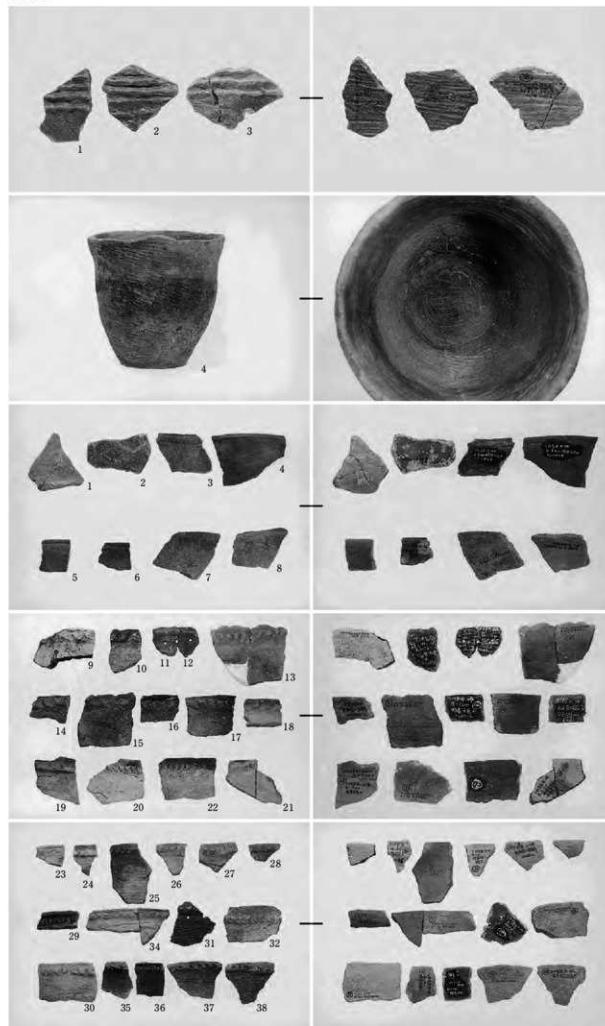
1 5号土坑（南から）



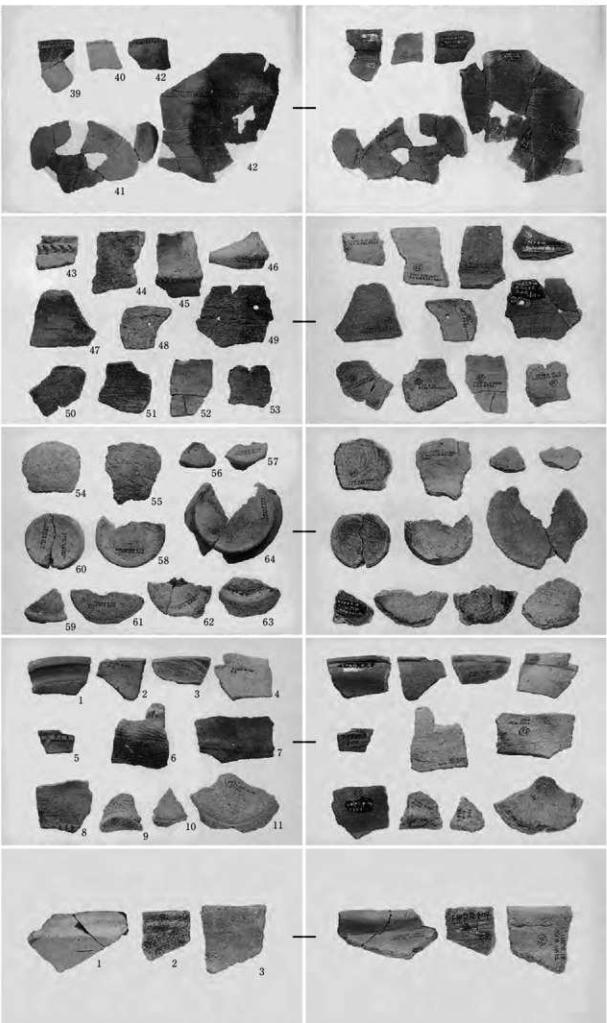
2 1号溝土層（北から）



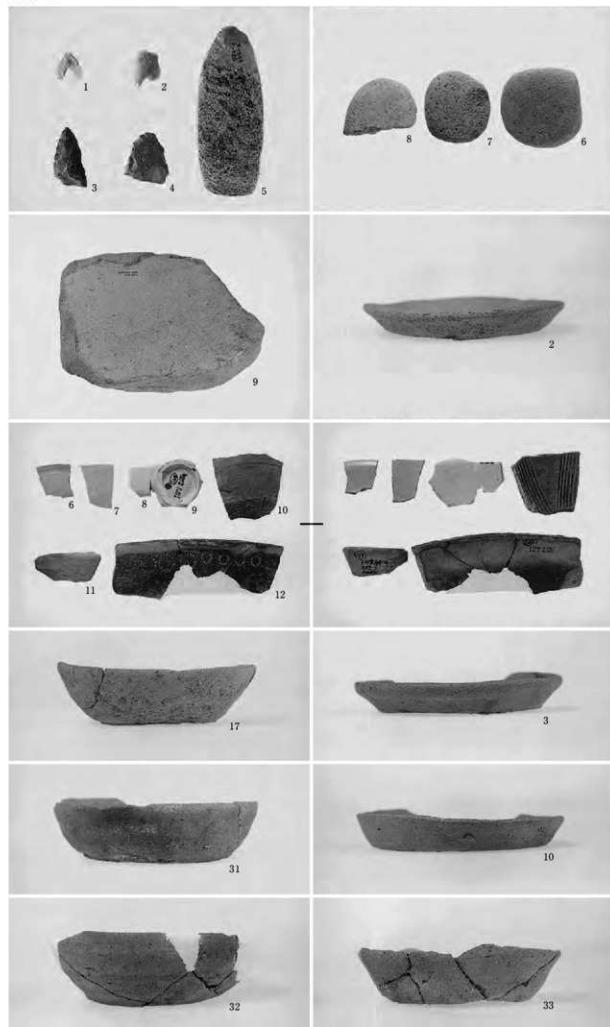
3 古銭出土状態（西から）



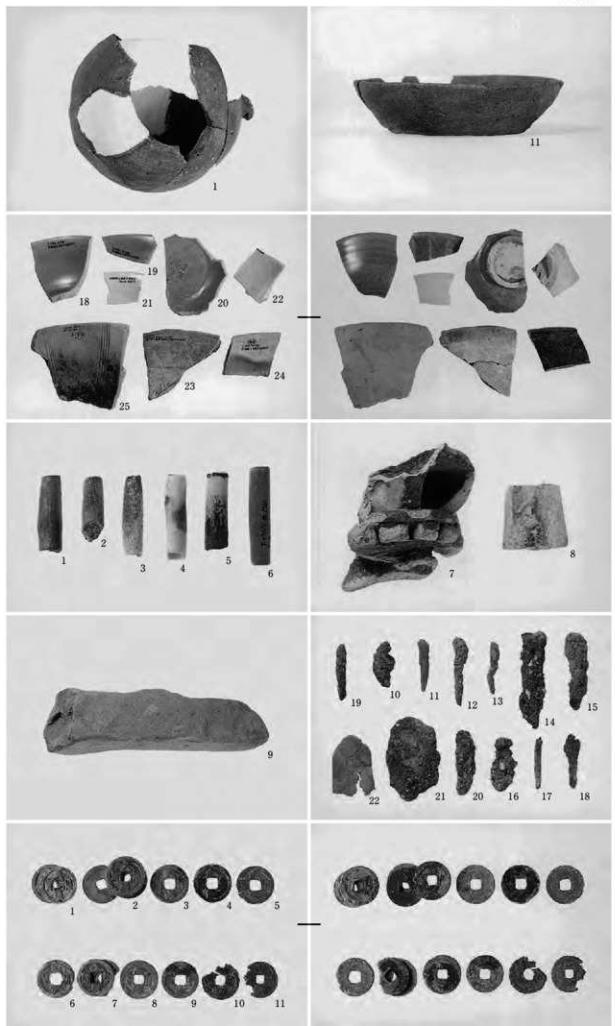
縄文土器①



縄文土器②



石器、掘立柱建物跡・土坑・ピット出土土器・陶磁器



包含層出土土器・陶磁器、土製品、石製品、金属製品、古銭



1 下伊良原原田ノ谷遺跡
全景（東上空から）



2 下伊良原原田ノ谷遺跡
全景（西上空から）



1 調査区南東土層（西から）



2 繩文グリッド（上空から）



3 E8・E9Gr遺物出土状態（南から）



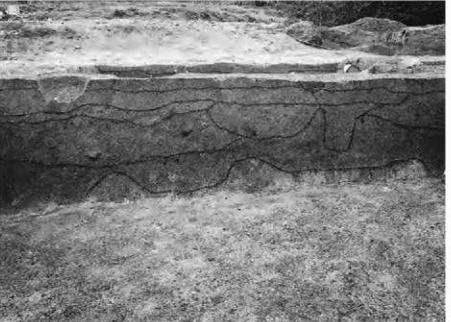
1 E8Gr遺物出土状態（東から）



2 E7Gr北壁（南から）



3 E7Gr西壁（東から）





1 調査区西側中世遺構面（南から）



2 1号掘立柱建物跡（西から）



3 1号掘立柱建物跡 P 6（南から）



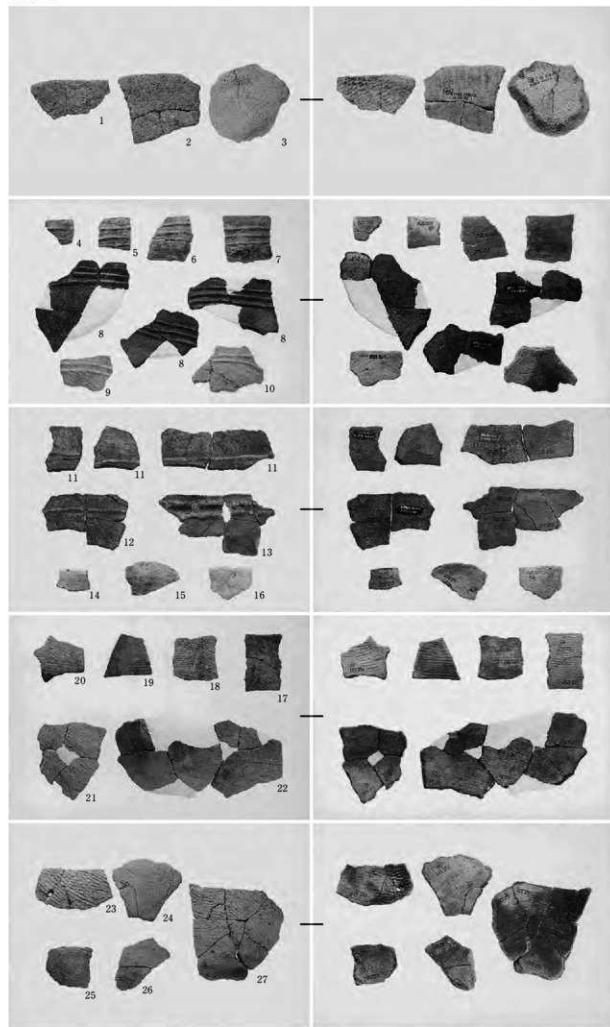
1 1号柱列（南から）



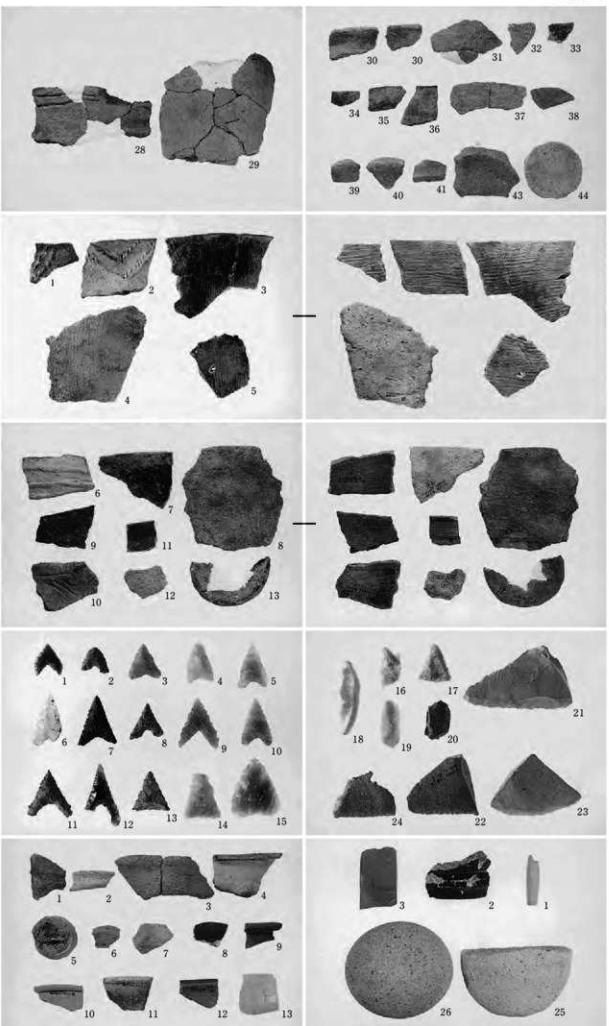
2 1号土坑（南から）



3 2号土坑（南東から）



繩文土器



縄文土器、石器、土器、陶磁器、土製品、石製品



1 下伊良原寺ノ谷遺跡
遠景（西上空から）



2 下伊良原寺ノ谷遺跡
遠景（東上空から）

1 下伊良原寺ノ谷遺跡
全景（上空から）



2 下伊良原寺ノ谷遺跡
北半部全景（上空から）

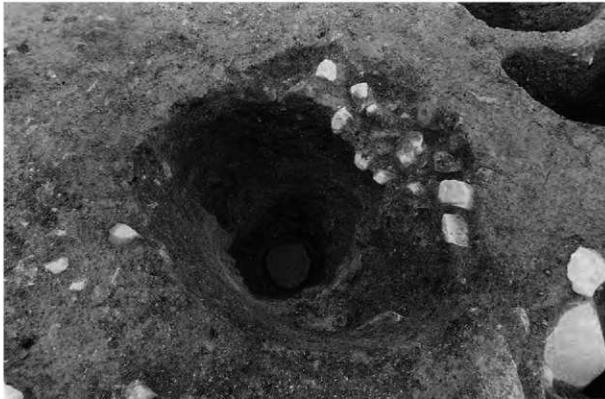




1 1・2号掘
立柱建物跡
(北から)



2 1号掘立柱
建物跡P8
断面 (北から)



3 1号掘立柱
建物跡P5
(南から)



1 2号掘立柱
建物跡P32
(東から)



2 1号礎石
建物跡
(西から)



3 1号礎石
建物跡
(東から)



1 6～8号
掘立柱建物跡
(西から)



2 6号掘立柱
建物跡P6
(西から)



3 2号柱列P58
(北から)



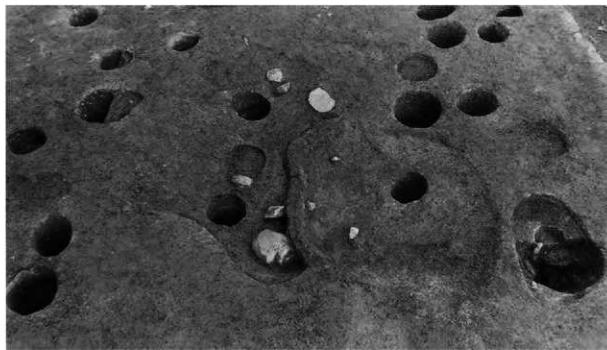
1 1号土坑
(北から)



2 2号土坑
(北から)



3 3・4号土坑
(南から)



1 5・6号土坑
(西から)



2 7号土坑
(東から)



3 8号土坑
(西から)



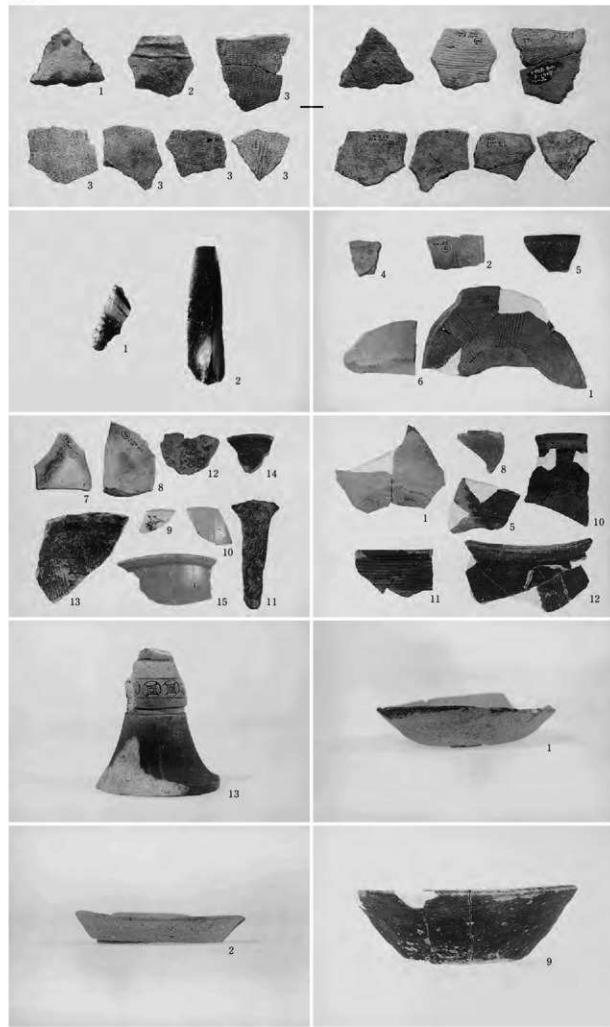
1 8号溝断面
(西から)



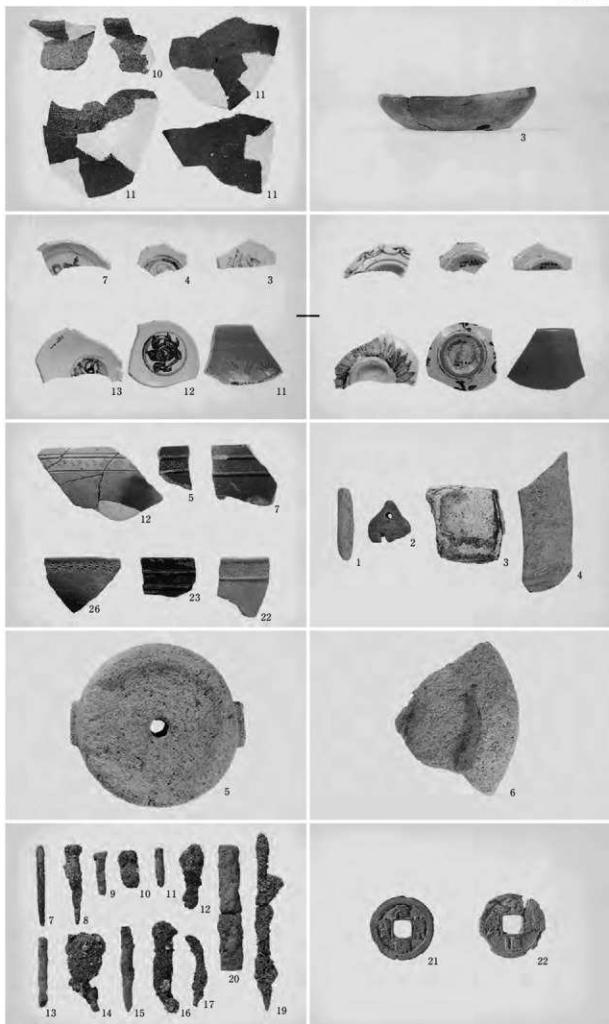
2 9号溝遺物
出土状態
(北から)



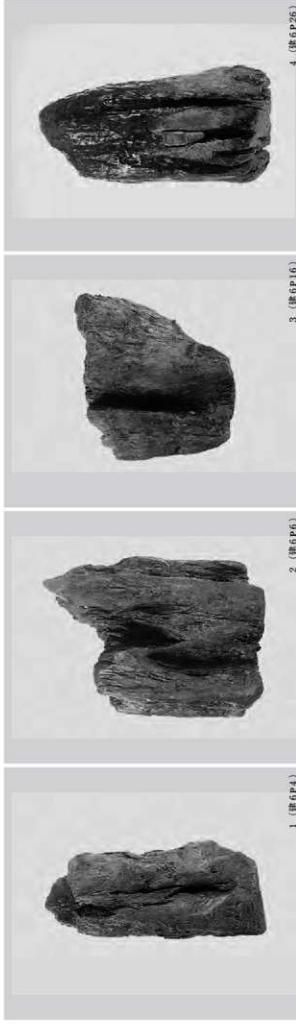
3 13号溝断面
(西から)



繩文土器、石器、掘立柱建物跡・溝出土土器・陶磁器



満・ビット出土土器、染付、石製品、金属製品、古銭



6 ~ 8 号掘立柱遺物 · 2 号柱列柱根



1 上伊良原川上・下ノ段遺跡
遠景（北上空から）



2 上伊良原川上・下ノ段遺跡
遠景（南上空から）



1 上伊良原川上遺跡全景（上空から）



2 上伊良原川上遺跡縄文グリッド
(上空から)



3 調査区西端土層（東から）



1 縄文グリッド（東から）



2 1号竪穴住居跡・
3号土坑（北から）



3 1号竪穴住居跡完掘状態
(北から)



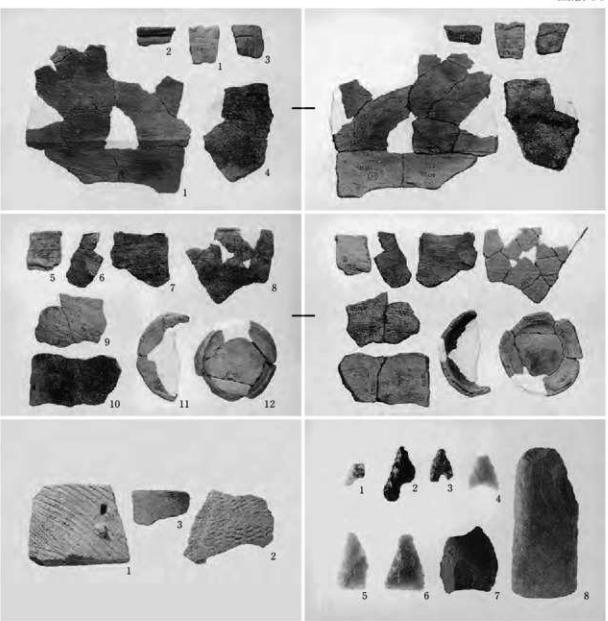
1 1号土坑（東から）



2 2号土坑（東から）



3 5号土坑（北から）



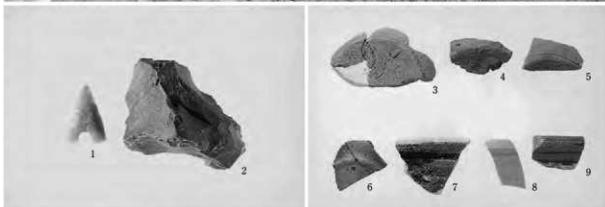
上伊良原川上遺跡出土遺物



1 上伊良原
下ノ段遺跡
全景(南から)



2 調査区
西端土層
(東から)



3 上伊良原
下ノ段遺跡
出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	いらはら いち						
書名	伊良原 I						
副書名	伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告-1-						
卷次							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第222集						
編著者名	吉田東明						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号						
発行年月日	2009年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
しらいはら なかのつはせき	ふくおかけんみやこくみやこまち さいがわしらはら						
下伊良原 中ノ坪遺跡	福岡県京都郡みやこ町 屋川下伊良原1176-1		33° 34° 29°	130° 57° 04°	2006.07.18 ~ 2006.10.04	3,300	
しらいはら はらだのたにせいき	ふくおかけんみやこくみやこまち さいがわしらはら						
下伊良原 原田ノ谷遺跡	福岡県京都郡みやこ町 原田ノ谷遺跡 屋川下伊良原1881,1884,1890		33° 34° 27°	130° 56° 36°	2006.09.04 ~ 2007.01.26	4,500	
しらいはら てのたいせき	ふくおかけんみやこくみやこまち さいがわしらはら						
下伊良原 寺ノ谷遺跡	福岡県京都郡みやこ町 寺ノ谷遺跡 屋川下伊良原1723,1724		33° 34° 34°	130° 56° 48°	2007.01.12 ~ 2007.02.28	1,500	県営 伊良原 ダム建設
かわいはら かわいせいき	ふくおかけんみやこくみやこまち さいがわくわいはら						
上伊良原 川上遺跡	福岡県京都郡みやこ町 屋川上伊良原110		33° 33° 49°	130° 57° 09°	2006.11.08 ~ 2006.12.28	1,100	
かわいはら しじだいせいき	ふくおかけんみやこくみ みこまちさがわくわいはら						
上伊良原 下ノ段遺跡	福岡県京都郡みやこ町 屋川上伊良原103		33° 33° 49°	130° 57° 09°	2007.01.23 ~ 2007.02.19	600	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下伊良原 中ノ坪遺跡	集落跡	縄文時代 中世	土坑・包含層 掘立柱建物跡・土坑・溝	縄文土器・石器 土師器・陶磁器・古鉄			
下伊良原 原田ノ谷遺跡	集落跡	縄文時代 中世	包含層 掘立柱建物跡・柱列・土坑	縄文土器・石器 土師器・陶磁器			
下伊良原 寺ノ谷遺跡	集落跡	中世 近世	掘立柱建物跡・土坑・溝	土師器・陶磁器・古鉄			瑞応寺跡
上伊良原 川上遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡・土坑 ・溝・包含層	縄文土器・石器			
上伊良原 下ノ段遺跡	集落跡	縄文時代 中世	落ち込み状遺構	石器・土師器			

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 20	登録番号 8

伊良原 I

福岡県文化財調査報告書 第222集

平成21年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印刷 セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮1-5-13